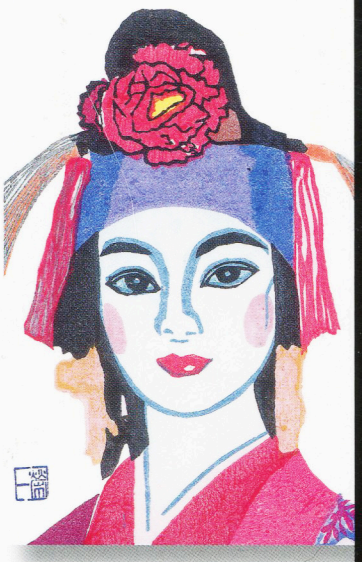
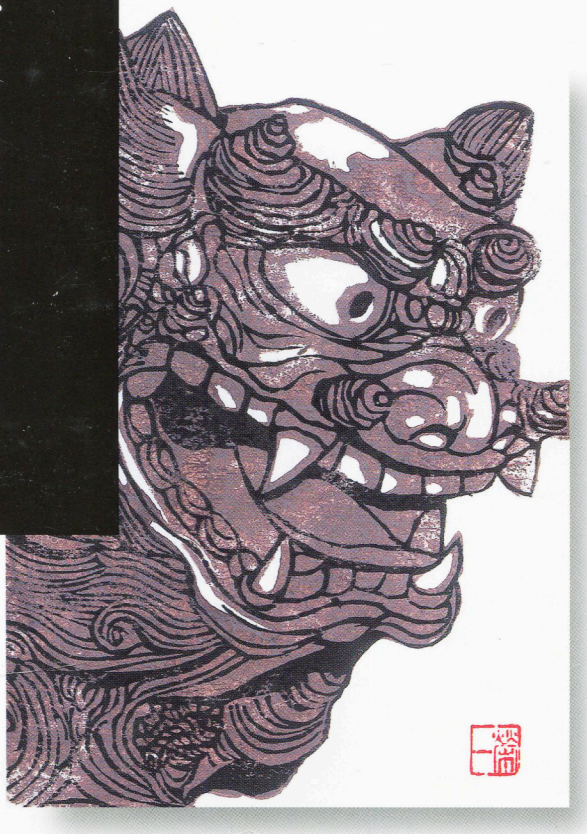
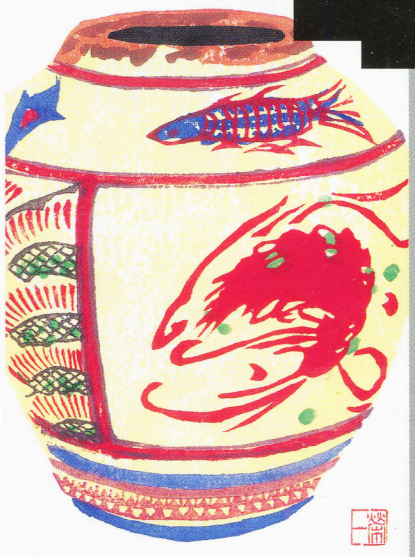
沖縄に魅せられて

白柳栄一 沖縄木版画集







目　　次

魅惑の島、沖縄へ……4

木版画作品　陶　　器……6
シーサー……190
染　　色……227
風物・その他……244
動物・植物……254

木版画の元となった作品の
作者と関係者の皆さん……264

作品目録……266

参考文献……274

装丁／仁井谷　伴子

題字／杉　野　弘　一

魅惑の島、沖縄へ

私と妻は陶磁器が好きで各地の「焼物の里」へ電車やバスを使ってよく出かけました。今までに益子、美濃、瀬戸、常滑、信楽、清水、赤膚、丹波立杭、備前、萩焼などの窯や町を訪ねてきました。

また、大阪近辺で開催される「全国陶器市」では手軽に全国各地の陶磁器を見ることができるので掘り出し物を探しによく足を運びました。

1997 年 7 月、大阪鶴見緑地の「陶器市」で沖縄陶器（壺屋焼）の美しさに魅せられ、立ちつくして眺めていると、『まじる商店』の方が、「現地の壺屋通りには多くの店が並んでいるよ」と沖縄へ来るように勧めてくれました。沖縄は飛行機に乗らないと行けません。私は飛行機が苦手です。そのうえ、極東最大の米軍基地があり、いつ事故が発生するかわからない。毒蛇の「ハブ」がうようよいて噛まれたりするのではないかといろいろ心配でした。

それで、沖縄県島尻郡南風原町に在住する大先輩 中村高雄さんに連絡をとると、「いいところだから、おいでよ、ハブは夜行性で森や草原に入らないといないよ」と言って心配を取り除いてくれました。それで、「すばらしい陶器に出会いたい」という私の思いは募り、２ヵ月後の９月末、沖縄ツアーの一員となり、好きでない飛行機に搭乗しました。

那覇空港に着くとすごい暑さで、また真夏に戻ったような天候に驚きました。亜熱帯の気候とはこのような暑さであると思い知らされました。

沖縄の１日目は自由行動、飛行場を出て「那覇市伝統工芸館」を訪ね、それから壺屋通りの陶器店の町並みを散策、勧めていただいた「まじる商店」さんへも挨拶に立ち寄りました。

２日目は中部の首里城、沖縄記念公園、万座毛などを観光バスで回りました。

３日目は、自由行動で中村さんと親戚の大城さんに私達の希望する場所を案内していただきました。通り道にある普天間飛行場、嘉手納飛行場、浦添美術館 (当日休館日)、大城織物店、南風原琉球絣事業協同組合、座喜味城跡、読谷村立美術館、読谷山花織会館、読谷「やちむん」通りの窯元巡り等、強行スケジュールです。

幸運なことに読谷村立美術館では『人間国宝 金城次郎展』が開催されていました。展示品 99 点にも上るこの展覧会が私達に大きな感動をもたらせてくれました。

それから６年余の間に、沖縄に 11 度も通うことになりました。1997 年頃の２泊３日の沖縄観光旅行は、中部か南部方面のどちらかを観光バスで巡り、前、後の半日は自由行動という形式が主でした。

２年後の 1999 年頃からはレンタカー付きのツアーが増えてきました。車を

運転できない私はバスとタクシーで移動しました。

沖縄の版画が 100 枚を超えた頃、友人が木版画の個展を開いたらと勧めてくれましたが、展覧会の案内、版画の額入れ等の準備や期間中のお世話のことを考えるとまだまだ彫り続けたいのでと、その意のないことを伝えました。

150 枚を越えた頃、下手な木版画も数があれば見ていただけるのではと思いました。私は、石の上にも 3 年、継続は力なり等のことわざを銘に 5 年位で沖縄シリーズを終えようと思っていました。それというのも、やりかけのシリーズが 2 種類待っているからです。

さて、そうした中で沖縄シリーズが 200 枚を超えると版画の先輩、友達が何か「イベント」などを行えばと期待を寄せてくれました。

257 枚を彫り終えて、一枚一枚に簡単なそのときの感想やつたない説明文を付けて「本」にできるのでは、と思うようになりました。妻も「良い機会だから出しましょう」と言ってくれました。

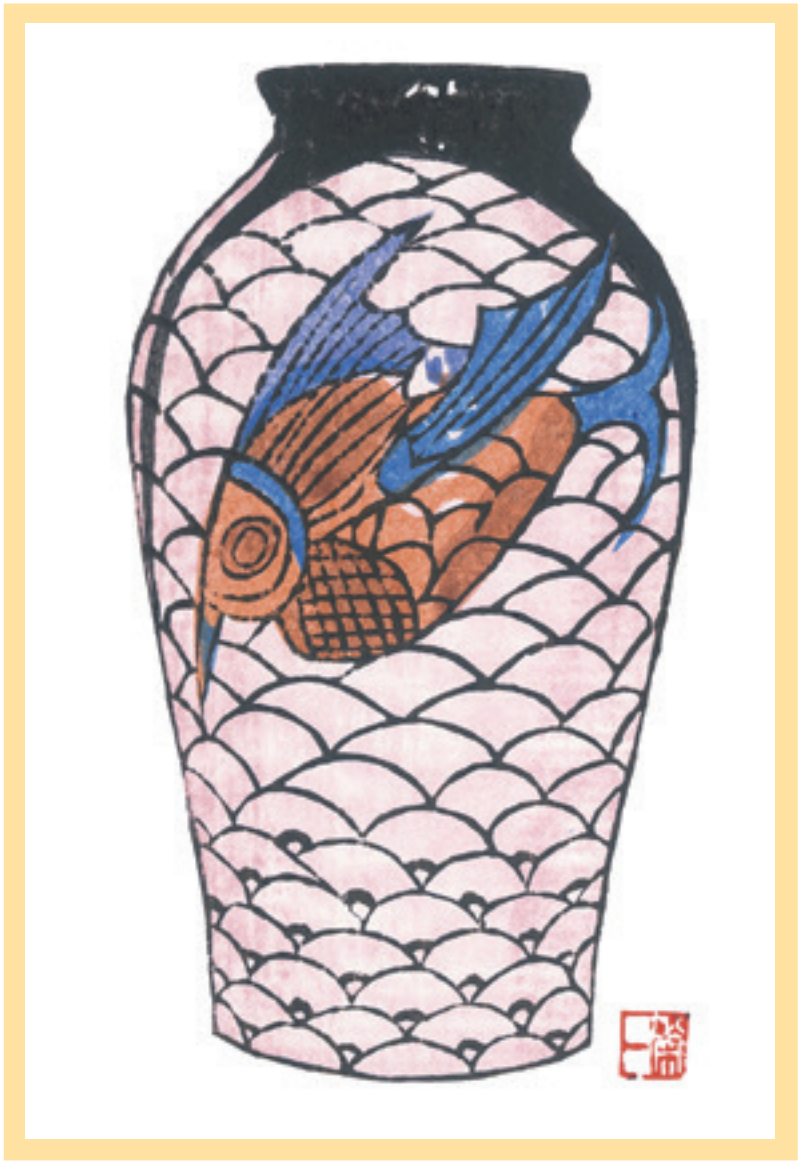
沖縄シリーズを彫り始めた頃、作者名が判らなかったり、どこで撮影させていただいたのかも思い出せなかったりで、説明文を作成するのに苦労しました。中には印象深く関連した出来事まで良く覚えているものもあり、それらはまるで昨日のことのように浮かんできます。妻も、説明文の手直しを手伝ってくれました。有難いことです。なお、不十分な調査や素人の知識で記述しており、作者名や陶器の呼び名が間違っているところもあるかと思います。大変失礼なことですがご容赦くださるようお願いします。

沖縄の壺屋通りと読谷村の陶芸家の方々に親切にしていただき、彫るにあたって多大のご協力をいただきました。また、壺屋通りのお店の方々から受けた温かい後押しは、とても力になりました。

沖縄県島尻郡南風原町の中村高雄、豊見城市の赤嶺真澄、（株）近代美術の島袋俊哉、川端良治、（株）南都観光社長 大城宗憲、那覇市伝統工芸館の前事務長 石川勝昭、読谷村立美術館の前館長 宮城元信各氏の方々からの温かい励まし、また、岐阜県高山市の『飛騨高山グリーン・西山木版画同好会』（HGS 木版画同好会）の皆さんからの、彫りや摺りの方法についてのご教示、版画を通しての友人からの声援……、こうして 6 年余の間、同じテーマをもって彫り続けることができ、この木版画集を出版できましたのも、こうした皆様方のお蔭と深く感謝しております。ありがとうございました。

つたない作品ですが、『沖縄の魅力』を少しでも理解していただければと思っています。

陶　　器



沖縄シリーズ 155 作　**線彫波・魚紋花瓶**　　2001. 01. 13

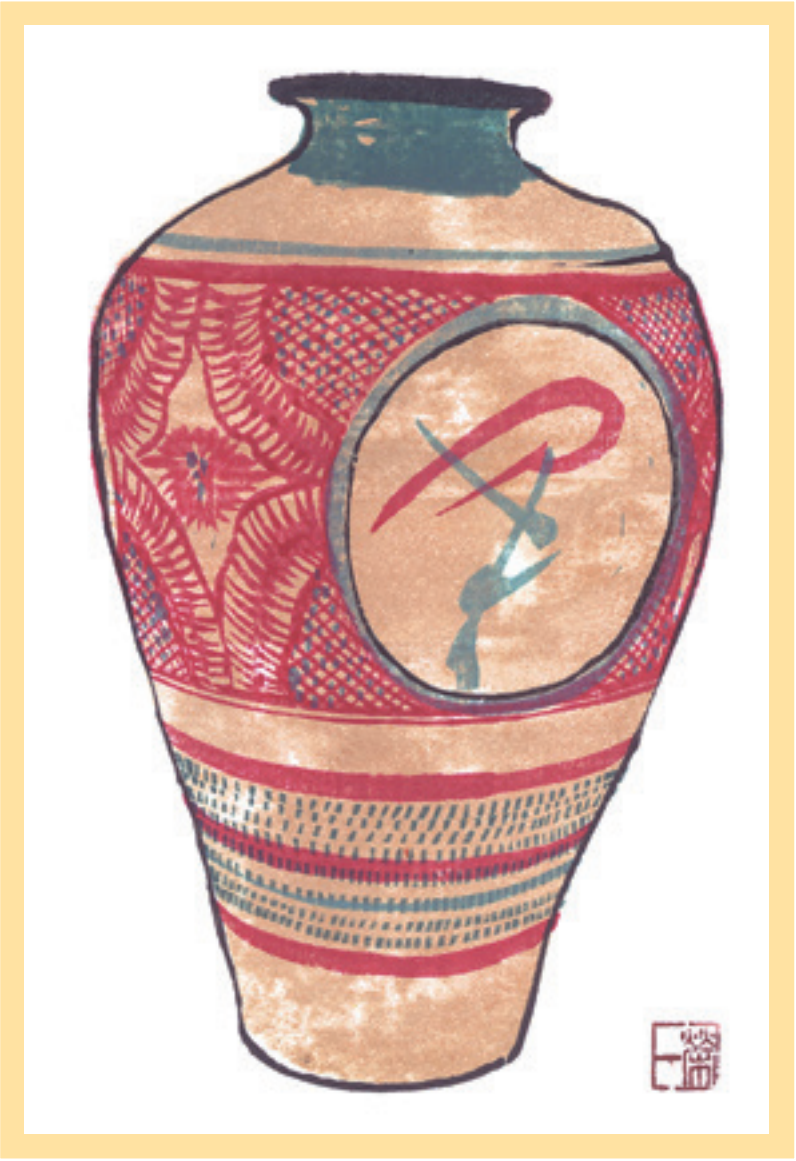
この木版画は新垣栄一さんの「線彫波・魚紋花瓶」です。［まじる商店］の奥さんに案内されて厚かましく新垣さんの工房にお邪魔させていただきました。栄一さんとお姉さんの２人でこつこつと線彫りの壺、花瓶を描き、お姉さんは盛り上げの難しい田舎の庵、風景を筥で載せているところでした。数多くは作れません。色合いは茶系統の玄人好みのするものが多く、栄一さんの作品を蒐集する方もいます。私も何点か小さな物を購入しています。

沖縄シリーズ213作　**盛上取手付注瓶**　2002.07.27

これは「水差し：注ぎ瓶」です。新垣栄一さんの逸品です。新垣さんが手捻りで成型し、乾燥後、隣でお姉さんが箆と指で粘土を盛り土しながら田舎の庵をこつこつと描いていきます。おもしろいことに、注ぎ口のところにリュウキュウオオコノハズクの顔が彫られています。この鳥は夜行性で鼠、蛙、トカゲなどの小動物を捕食しています。田舎のほうでは夜になるとこの鳥が森から開けた畑地などに飛んできて、じっと木に止まって獲物を探しているのでしょう。

沖縄シリーズ 199 作　**盛上田舎風景抱瓶**　2002. 03. 28

この木版画は、新垣栄一さんの「盛上田舎風景抱瓶」です。栄一さんが抱瓶を成型し、お姉さんがその表面に粘土を盛り付けながら、実のなるバナナに囲まれた農家の田舎風景を箆と指先で描いていきます。見本になるものはなく、頭の中に記憶している像を再生してさらさらと貼り付けていきます。長年の努力、熟練の賜と思いますが驚きです。［まじる商店］さんの向かい、細い路地の奥に新垣さんの工房があります。お客さんが直接、工房に入ることはありません。まじるさんの奥さんが案内してくれました。奥さんは、「抱瓶も型押し品が多くなっています。このような難しい手捻り、盛り付けの技法が長く引き継がれて欲しい」と言っていました。高齢のご姉弟がこつこつと地道に作業されている工房を拝見させていただき感動しました。有難うございました。



沖縄シリーズ 105 作　**赤絵キビ紋大壺**　1999. 08. 28

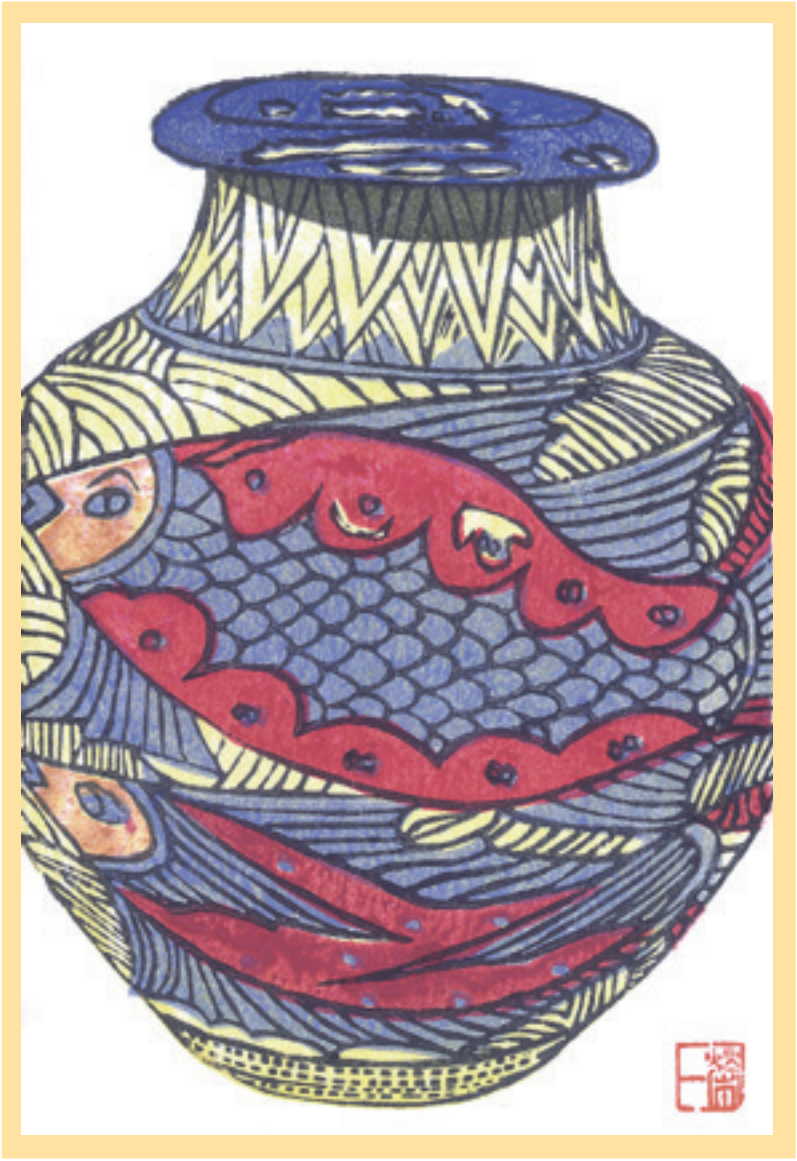
これは、那覇市伝統工芸館に常設展示されています新垣栄三郎さんのすばらしい「赤絵キビ紋大壺」です。網目紋が難しいので木版画にするのを躊躇っていました。網目紋は右上がりと左上がりの線を別々の木版に彫り、２枚の板を重ねて摺っています。岐阜県高山市の版画家、岩田先生から教わった技法です。１枚の板に交差する線を彫ると十字に交わるところが鋭利に彫れません。この版は、線の細さをうまく描くことができました。2000 年の年賀ハガキに摺りました。

沖縄シリーズ 93 作　**唐二彩抱瓶**　1999. 06. 29

この木版画は、琉球電信電話公社発行の名著『沖縄の陶器』に掲載されていた「唐二彩抱瓶」です。栃木県益子参考館に展示されている新垣栄三郎さんの作品です。白磁の下地を淡い黄土色に置き換えその上から織部のグリーンと茶の釉薬を筆で、“意の向くまま”に流した描き方をしています。すばらしい配色です。この陶器を眺めていますと慌しい日常生活の空しさをしばし忘れ、ゆったりとした気分になります。栃木県の益子にも出かけたのですが、時間の関係でこの建物に立ち寄ることができませんでした。

沖縄シリーズ 205 作　**荒焼龍巻壺**　　2002. 05. 19

この「荒焼龍巻壺」は、新垣栄用さんの登り窯による作品です。2001 年 2 月 10 日、那覇市伝統工芸館で撮らせていただきました。実物はもう少し黒っぽい焼き上がりでどっしりとしています。私の版は明るい色に仕上がってしまいました。“窯変の妙”が灰釉と炎の力によって現れ、力強さと奥深さがでてすばらしいです。壺の形はオーソドックスで重量感があり、見る者に安心感を与えてくれます。丸い壺に粘土で箆と指先を使って雲龍紋と太鼓紋を細かく描き、盛り土しながら貼り付けています。龍の背中の鱗や鰭は一枚一枚丁寧に描かれています。この方は、読谷村の登り窯［栄用窯］でシーサー、大きな甕、壺、花器等を作成されています。以前、民放のテレビ番組でシーサーの体験取材があり、“にわか”の弟子に厳しい土の捏ね方からシーサー作りまで優しく教えられているのを拝見しました。弟子の方が、一所懸命シーサー作りに挑戦されている姿を見て心温まりました。



沖縄シリーズ182作　**赤絵線彫魚紋大花瓶**　2001. 08. 24

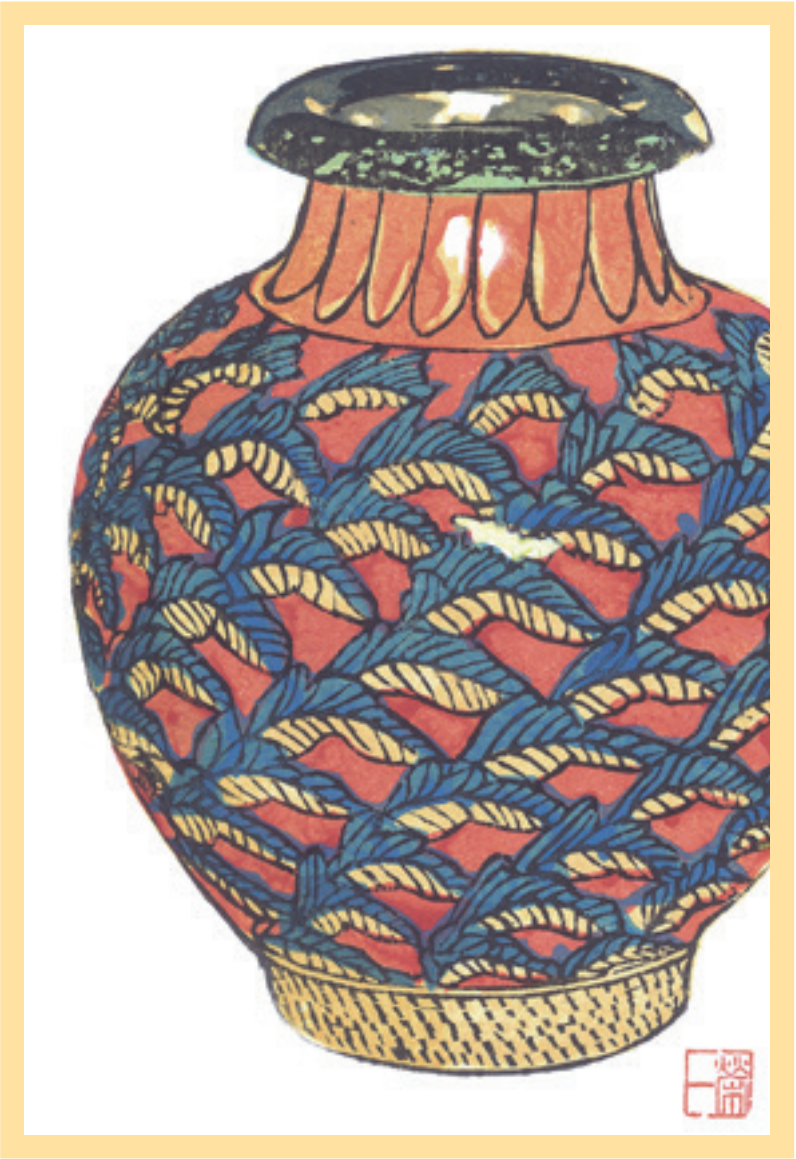
上部に三角形の楔紋、最下部に飛びカンナ紋を配したこのすばらしい「赤絵線彫魚紋大花瓶」は新垣勲さんの作品と思われます。作者の名前を帰ってから何に書いたか探しても見つかりません。新垣さんの場合、勲、勉、修、健司さんの４兄弟が活躍されていて勲さんと修さんの区別が難しく、お店を手伝っておられる新垣紀美江さんや橋本愛子さんに教わっています。中央に大きな赤い２匹の魚をゆったりと並べて線彫りし、バックは多重の波紋を巡らせています。赤と藍色はきつい感じがしますので、それを緩和するように黄土色を下地にしています。そしてガラス質の釉薬で明るく仕上げています。実物はとても豪華ですばらしい花瓶です。

沖縄シリーズ 239 作　**赤絵線彫双魚紋花瓶**　2003. 06. 11

この美しい木版画は、新垣勲さんの豪華な「赤絵線彫双魚紋花瓶」です。勲さんが花瓶一杯に作画し、叔母さんの新垣菊子さんが名人技で線彫りしています。細かな作品は線と線の間がせまいです。浅く鋭く彫らないと隣の残す壁面が崩れます。工房を訪ねますと、私のお送りした版画を見せて下さいました。ずっと大切に保存されています。菊子さんは小さいときから家業を手伝ってきました。近所の友達が遊んでいるときも一緒に遊べないで手伝いをさせられ、「いやだった」と当時を振り返っています。しかし、そのお蔭ですばらしい技が身につき伝統的な赤絵壺、唐草、エジプト文様や魚紋等、難しい文様をさらさらと曲面に彫っておられます。「父親（名人 新垣栄徳さん）に感謝している」と優しく微笑んでいます。最近、菊子さんの作品が市場に出ています。このことは“陶芸家”としての大きな励みになっています。

沖縄シリーズ184作　**赤絵線彫魚紋大花瓶**　2001.09.09

　このすばらしい「赤絵線彫魚紋大花瓶」は新垣勲さんの作品です。花瓶の中央に魚体を丸めて飛び跳ねる姿とその後に続く魚が描かれています。花瓶の口元は斜めに面切りされ、下部には飛びカンナ紋を配しています。中央の大きな魚は赤、鱗と鰭は藍色でまとめ華やかです。魚の周りに藻を抽象化して描き、余白部分をバランスよく補っています。壺屋焼に使われる赤は種類も多く、新垣勲さんの赤は明るく美しいです。小橋川ツル子さんは橙色の混ざったような赤で、茶系統に近く一番濃い赤は小橋川清正さんの釉薬で、その間は色とりどりです。



沖縄シリーズ 103 作　赤絵線彫木の葉紋丸花瓶

1999. 08. 16

　これは新垣勲さんの美しい「赤絵線彫木の葉紋丸花瓶」です。明るい茶色を下地に、グリーンの木の葉紋を細やかな線彫りで描いています。このようなすばらしい花瓶には生ける花が負けてしまいます。花瓶をそのまま飾るだけで部屋が明るく、華やかになります。

沖縄シリーズ 169 作　**線彫エジプト文様花瓶**

2001. 06. 11

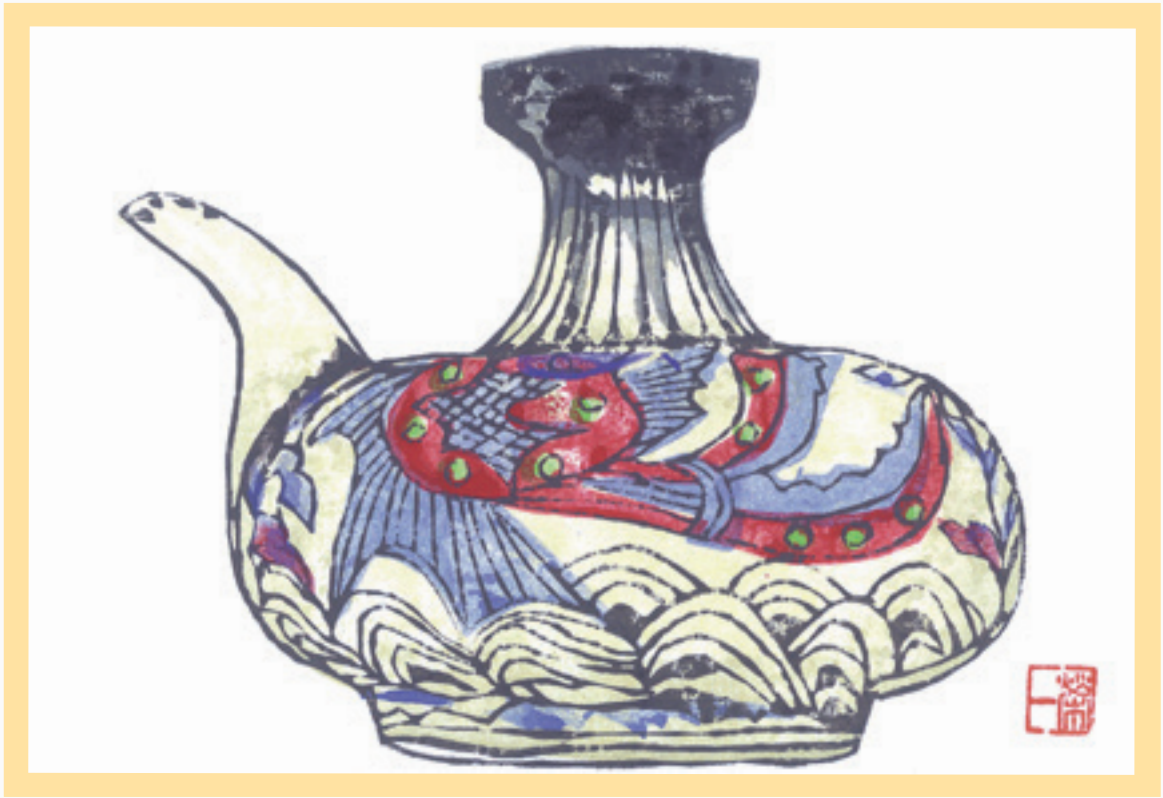
沖縄の「壺屋陶器商店街」、壺屋通りは、向い合せに陶器店が数十軒並んでいます。ひめゆり通り近くに新垣　勲、勉、修、健司さんの四兄弟の直売店が３軒のお店を構えています。紀美江さんは長女で販売や渉外の担当をされています。私は壺屋通りを散策すれば必ずお邪魔し、焼物のことを教わっています。上の３人の方の作品は、教えていただいてもよく似ていてなかなか区別できません。これほど細かい線彫りをハガキ版にするのは、難しいと思って作家の名前を聞いてこなかったのです。穏やかな美しい色合い、細やかで複雑な線彫りは、眺めていてほれぼれします。

沖縄シリーズ 189 作　**赤絵線彫双魚紋抱瓶**　2001. 10. 28

　このすばらしい「赤絵線彫双魚紋抱瓶」は新垣勲さんの作品です。抱瓶の中央に２匹の魚を斜めに交差させ、画面一杯に描いています。前方の魚は細長く、後方は少し丸いです。赤の釉薬をバックに、魚は藍と黄土色の取り合わせです。新垣菊子さんが抱瓶に線彫りしていきます。難しい技をいとも容易に削り込みます。勲さんは作陶活動をされながら壺屋陶器事業協同組合長の要職に就かれています。壺屋通りの整備、観光客の誘導等課題も沢山あります。秋の沖縄は本土や近隣諸国から観光客が押し寄せる時期です。2001年ＮＨＫのドラマで「ちゅらさん」が放映され、“沖縄ブーム”が起きそうでした。それが《2001 年９月 11 日の同時テロ》の影響で冷えきっています。とても残念なことです。それから後、米空軍嘉手納基地前のゲートは厳戒態勢が取られ車両の出入りが厳重にチェックされていました。米軍基地も早く撤収して欲しいです。沖縄に平和で安心できる生活が来るよう願っています。

沖縄シリーズ 191 作　**赤絵線彫双魚紋抱瓶**　2001. 11. 23

　このすばらしい「赤絵線彫双魚紋抱瓶」は新垣勲さんの作品です。抱瓶の中央一杯に２匹の魚が“襷がけ”に描かれています。余白には織部のグリーンで唐草紋を細かく彫りこんでいます。新垣菊子さんが私や妻と話をしながら、抱瓶や花瓶に難しい線彫りを手馴れた技で描いていきます。私が版画集を出版する際に新垣勲さんの写真も掲載させて欲しいとお願いすると、壺屋陶器事業協同組合の会議中でしたのに中断して撮らせてくださいました。



沖縄シリーズ 212 作　**線彫魚・波紋カラカラ**　2002. 07. 19

これは（カラカラ）という泡盛をお猪口に注ぐ徳利です。新垣勲さんの作品です。下部がどっしりとしていて安定感があり、徳利のように倒れてひっくり返るようなことはありません。何故このような形に作られたのかおもしろいです。貴重な泡盛を大切に扱うために作られたようです。線彫りされた魚紋は尻尾を曲げて飛び跳ね、多重の波紋も美しいです。勲さんは 2002 年多忙の壺屋陶器事業協同組合長を退任されました。これからは、焼物の制作に専念できます。このカラカラの注ぎ口は細い筒状に形作られています。形作るのも焼き上げるのも壊れやすく難しいです。沖縄の土は温度が上がりすぎますと形が崩れやすいそうです。鶴首のように先端が細長くなったものは特に難しいといわれています。新垣紀美江さんの話しによりますと、勲さんはこの難しい形の作品を得意としており、催し物があって行う壺屋焼の実演コーナーではその技をお見せしているそうです。ご健康に留意されて良い作品を送り出していただきたいと願っています。

沖縄シリーズ 83 作　**線彫唐草紋抱瓶**　1999. 05. 04

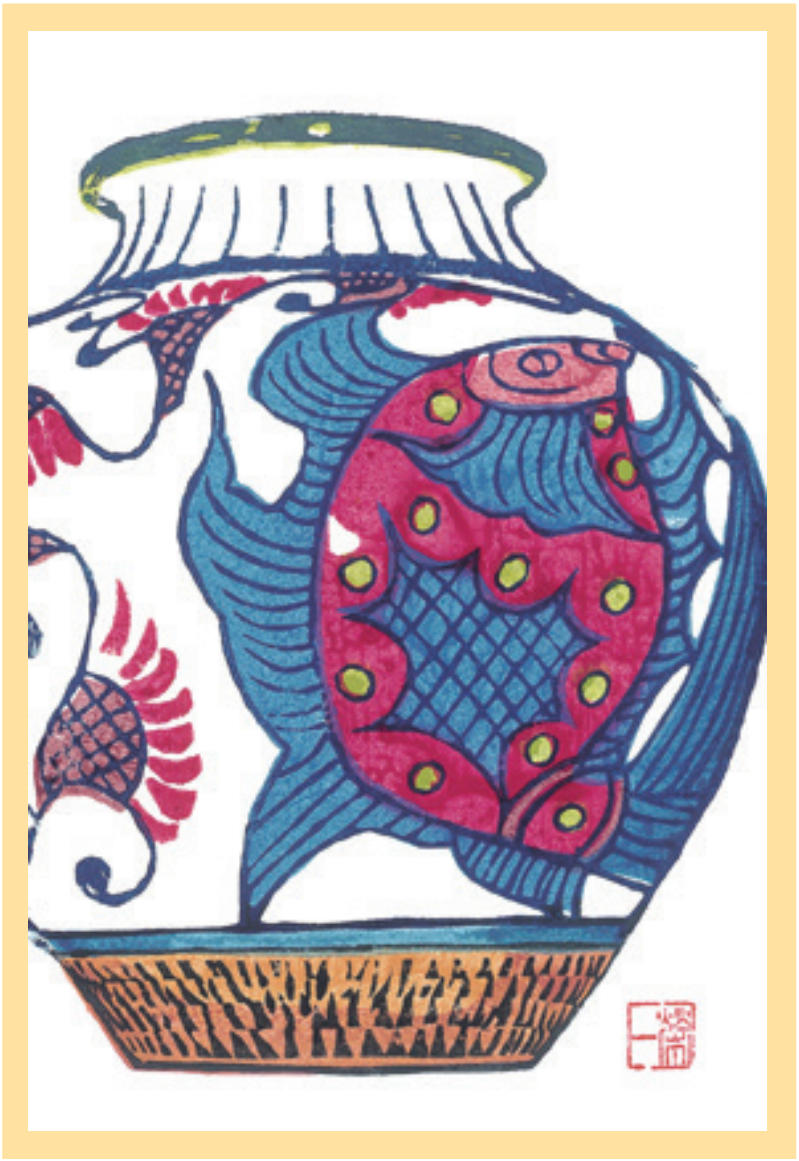
　このすばらしい「線彫唐草紋抱瓶」は新垣菊子さんの作品です。人間国宝 金城次郎さんが若かったころ、こちらの［新垣製陶所］で勤務されていました。その頃、菊子さんは遊び盛りの子供で学校から帰ると家業である陶器作りの手伝いを父親から命ぜられ、その時は「いやだ」と思いながら手伝ったと述懐しています。今はその頃から覚えた技が身について「手が勝手に動いてくれる」と難しい線彫りの技を下絵もなしにどんどんと彫っています。「この年齢になっても好きな仕事ができるのは父親のお蔭」と感謝し、懐かしく思い出して喜んでおられました。

沖縄シリーズ137作　**蓋付赤絵鉢**　　2000. 07. 16

この美しい「蓋付赤絵鉢」は私の家のガラスケースに並んでいます。蓋の真中あたりが少し凹み、つまみの部分が突出しない珍しいものです。牡丹の花模様を崩しているのでしょうか、すばらしいです。お店番をされている新垣紀美江さんは「赤絵模様は修さんが得意としています」と説明してくれました。難しい球形に抽象画が軽やかなタッチで描かれています。

沖縄シリーズ194作　**赤絵線彫双魚紋大皿**　2002. 01. 14

　このすばらしい「赤絵線彫双魚紋大皿」は新垣修さんの作品です。1998年７月、大阪阿倍野近鉄百貨店で沖縄の［まじる商店］さんが展示販売されていたものです。魚の文様は美しく色の配合も華麗です。赤色は鮮やかです。赤絵の版を彫っていて気付いたことですが、上下２匹の魚模様は対象形をしていますが、腹部のブルー部分に僅かな違いを見せています。また、周りの縁には細やかな２種類の曲線と線による幾何学紋を巡らせています。



沖縄シリーズ139作　**赤絵線彫魚紋花瓶**　2000.08.02

これは1998年7月29日、大阪阿倍野近鉄百貨店で開催された『人間国宝　金城次郎展』のとき、東京都福生市の［沖縄グラスコーラル］さんが陳列されていたものです。作家は赤絵の美しい新垣勉さんです。名前は「赤絵線彫魚紋花瓶」です。花瓶は均整がとれ、尻尾を跳ね上げた魚紋もすばらしいです。実物の赤色はもっと鮮やかで、私の色は輝きが不足しています。また、ハガキ版に花瓶全体を収めますと小さくなり、上下に空間が生じます。とても心残りでしたが、横の部分を割愛しています。

沖縄シリーズ240作　**赤絵海老紋壺**　2003. 06. 18

これは新垣勉さんの「赤絵海老紋壺」です。このすばらしい飛び跳ねる海老は美しく、勢いがあります。壺の形は安定感がありゆったりとしています。壺屋通りで陶器店を営む新垣紀美江さんは「海老に勢いがあり、姿も美しいでしょう」と「身内のことを誉めるのは気が引けるがすばらしい」と感嘆しています。私も「そうだ」と納得しています。1995年に刊行された『心伝える手のぬくもり　やちむん（焼物）』、壺屋陶器事業協同組合の立派な冊子に［勉工房］が紹介されこの「赤絵海老紋壺」が掲載されていました。今度沖縄を訪ねたら工房を見学させて欲しいと思っています。

沖縄シリーズ 130 作　**赤絵線彫魚紋抱瓶**　2000. 06. 03

これは新垣勉さんの華やかな「赤絵線彫魚紋抱瓶」です。沖縄へ出かけたときは必ず壺屋通りのお店にお邪魔しています。新垣陶器直売店の新垣紀美江さんは“壺屋焼”のことや陶芸家の作品のことについて、何でも詳しく親切に教えてくれます。初めて陶芸家の工房を訪ねるときなど、先方へ予め私たちを電話で紹介し、「これから訪ねるから」と気を配ってくれます。本当に有難いことです。もともと沖縄の方は親切で、更に口添えしていただくと初めての私たちにも安心して接していただき、いろいろな作品の案内や窯の様子まで見せていただけます。

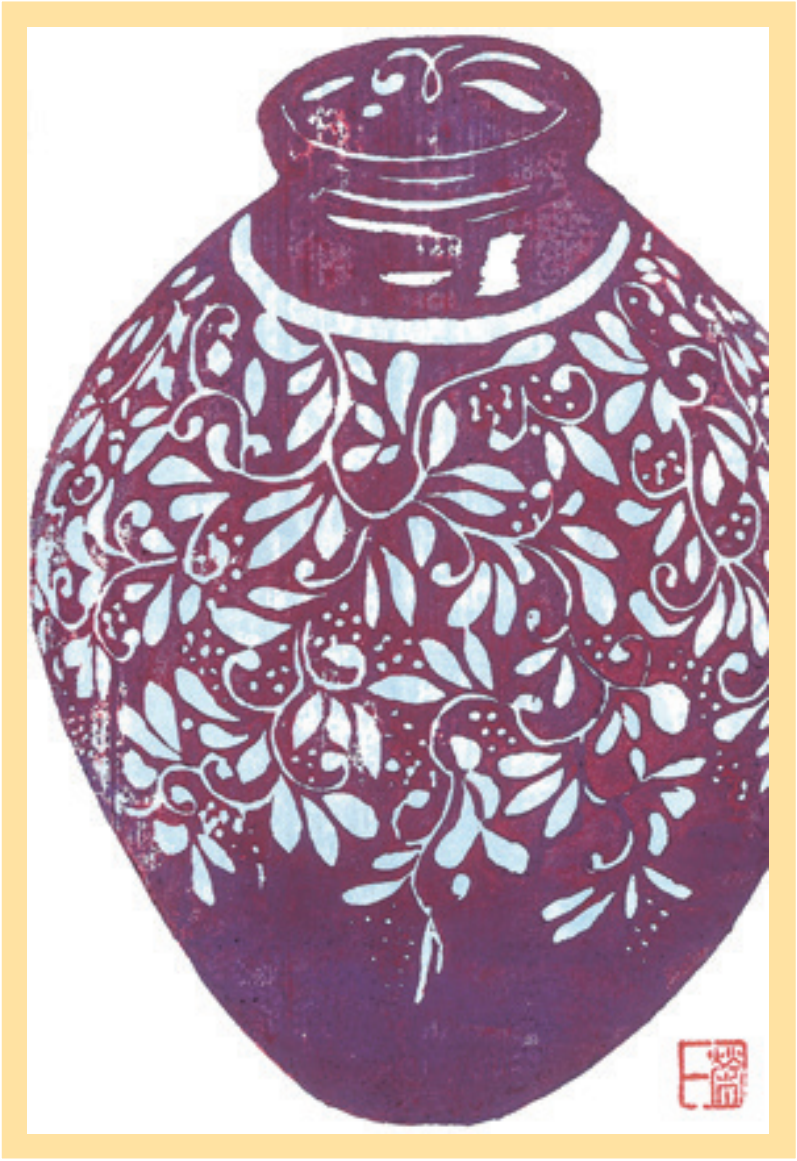
沖縄シリーズ 218 作　**貫入赤絵線彫海老紋大皿**

2002. 09. 24

このすばらしい「貫入赤絵線彫海老紋大皿」は、新垣勉さんの作品です。直径 45 ～ 50 ㎝位の大きなお皿です。勢いよく跳ね上がるこの赤い海老紋は新垣勉さんのトレードマークです。花瓶、お皿、鉢等にこの図柄が描かれていれば勉さんが作成したものです。壺屋焼のなかで海老紋を描かせると勉さんは、第一人者だそうです。姿が良くて海老の足、ひげもすばらしいと私も思っています。これだけ見事な海老は他にありません。国際通りの陶器店でこの海老紋を見つけると嬉しくなります。この皿のバックは青い空と海の色を表しています。お皿の縁は、幅広く取り唐草文様が描かれています。中央の青い下地には細かなひび割れ（貫入）を作り出して趣を広げています。膨張や伸縮の度合いの異なる粘土を表面に乗せるとこのようなひび割れを作り出せるのです。細かなひび割れを作って仕上げる薩摩焼、萩焼（経年貫入）の場合は器を使っているうちにお茶の渋が染み込んで美しい模様を描きます。

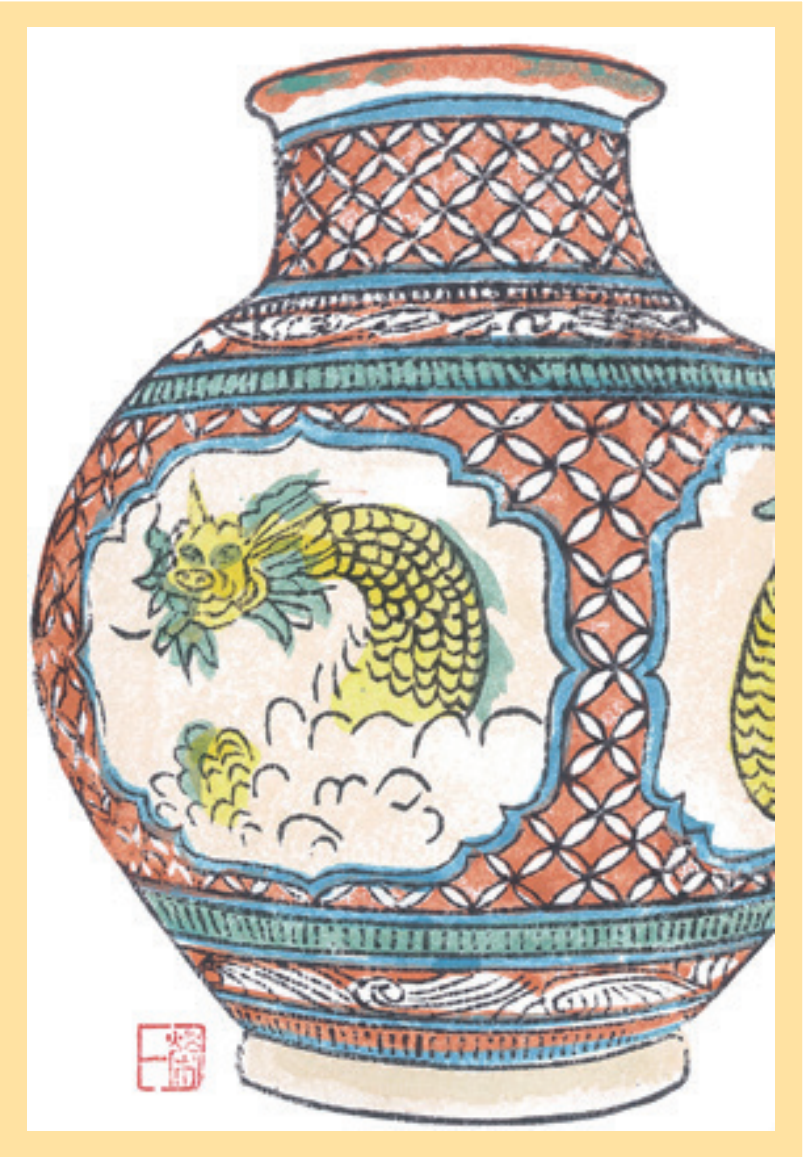
沖縄シリーズ 135 作　**赤絵線彫魚紋皿**　2000. 07. 04

これは新垣製陶所の「赤絵線彫魚紋皿」です。美しい尾を 90 度に跳ね上げて魚が人の世を眺めているようです。新垣さんの“赤”は“鮮やか”という色です。温かく、心を揺さぶり、元気をいただく色です。私のこの版は残念なことに“鮮やかさ”が不足しています。赤色は橙色に近い色から茶や黒の混じった濃い赤まであります。どの色を使うかは陶芸家の選択によって決定され、それが作陶家の特徴となっています。描かれた魚紋は、何を使って描いているか、線彫り、筒描き、イッチンなどの方法と描いている図柄、形、姿などの特徴から作陶家を特定することができます。それぞれの個性が表現されています。新垣　勲、勉、修、健治さん、ご兄弟の特徴はよく似ていて、何度お聞きしても私はなかなか区別できません。



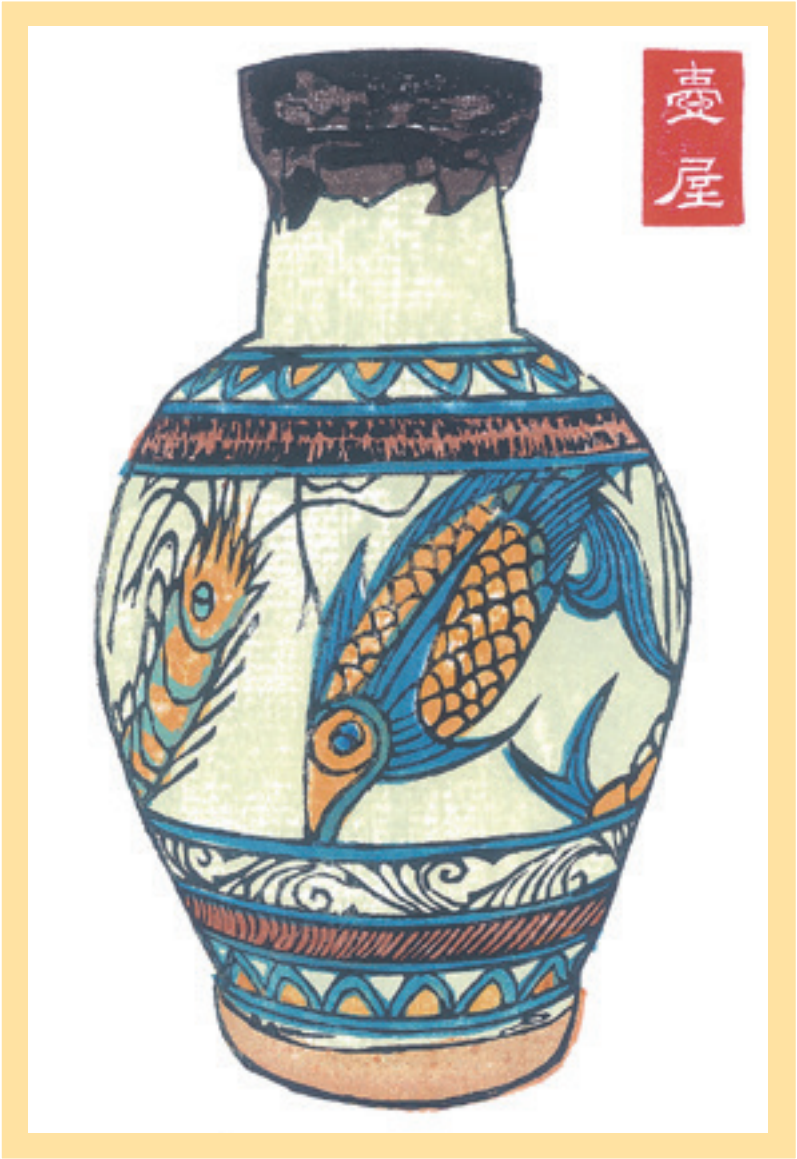
沖縄シリーズ 188 作　**葡萄・唐草紋大花瓶**　2001. 10. 15

この木版画は、読谷窯場共同販売所に飾られていた美しい葡萄・唐草紋様の蓋付大花瓶です。高さが 50 ㎝位あります。2002 年 2 月 9 日、すばらしさにただただ見とれていました。濃いエンジを下地に淡いクリーム色で葉と葡萄の房が浮き上がるように描かれています。この花模様を『文様事典』で調べましたが、よく似たものを見つけられません。萩の花のようですが、萩は巻くような蔓はありません。創作されたのでしょうか。花瓶全体は美しい曲線模様で描かれ、華やかです。細やかな運筆は、すばらしい技術と気の遠くなるような忍耐です。優雅な壺を眺めていますと作家の“心意気”が伝わって、見る人の心が和み、生きる勇気を沸かせてくれます。蓋を取って花瓶に使用するには、生けられた花が負けそうです。隣にあった大きな壺には生け花が飾られていました。



沖縄シリーズ 226 作　**龍・木の葉紋中花瓶**　2003. 01. 05

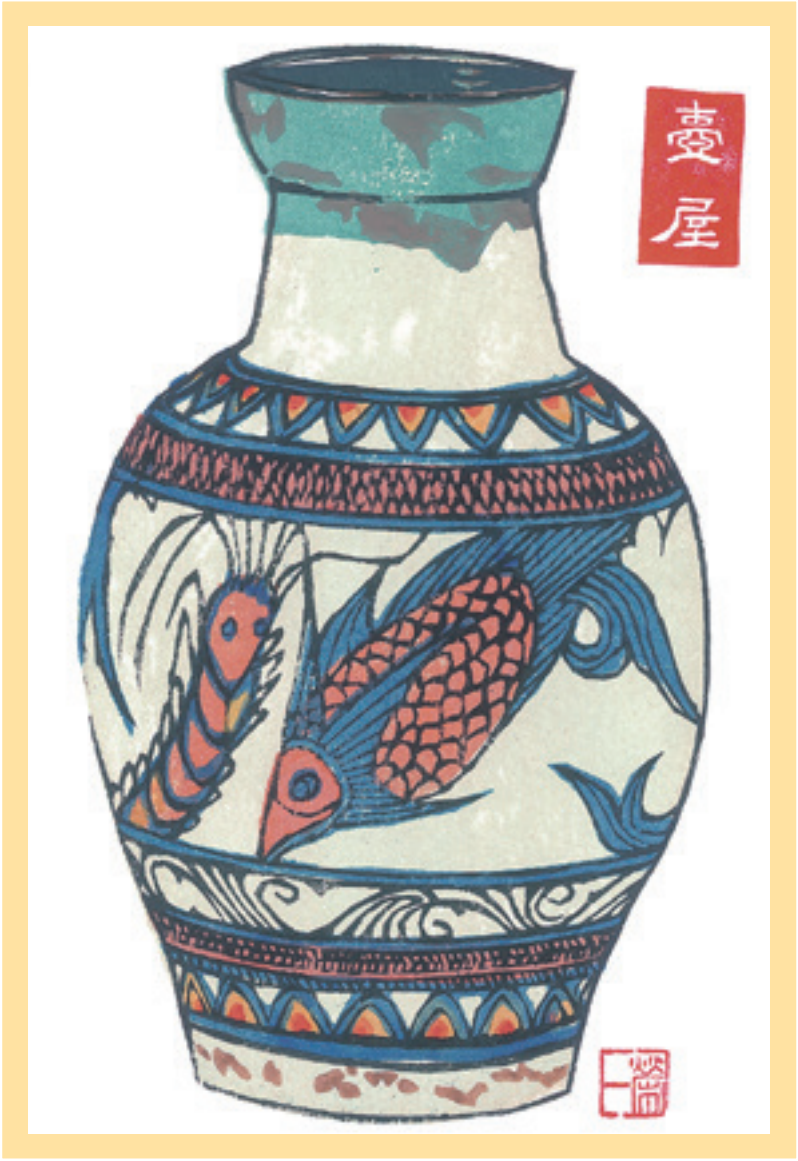
この木版画は「龍・木の葉紋中花瓶」です。2001 年 2 月 10 日、壺屋通りのお店に陳列されていたのをガラス窓越しに眺めて版にさせていただきました。作者が判らなかったのを兼島靖さんの作と、橋本愛子さんから教えていただきました。細かい木の葉紋と唐草紋が美しく、色合いは穏やかで上品です。後 10 数枚で沖縄シリーズを終えようと思っています。「沖縄で時間に余裕があったら是非行っておいで」と知人に勧められて［斎場御嶽（せいふぁうたき）］を 2002 年 12 月 27 日、8 回目の訪沖で訪ねました。沖縄本土には、自然崇拝の祈祷所がたくさんあります。それらを“御嶽”と呼びます。一般には地下にできる鍾乳石の洞が隆起し地上に現れたと思われるところや、この斎場御嶽のように大きな岩がもたれあって作り出した三角形の隙間に祭壇が設けられています。ここは沖縄の最高の聖地です。巨大な地殻運動がこの地で出現したことを物語っています。



沖縄シリーズ 39 作　**線彫海老・魚紋大花瓶**

1998. 06. 20

この版画は金城次郎さんの「線彫海老・魚紋大花瓶」です。『トラベルメイトテーマ 13　ふるさとの伝統工芸を訪ねる旅』出版社近畿日本ツーリスト(株）の中にこの大きな花瓶が掲載されていました。沖縄の最大の繁華街、国際通りの陶器店ではこの種類の花瓶が店頭に置かれ〈非売品　人間国宝　金城次郎〉作として飾られていました。海老紋と魚紋が交互に線彫りされ、下段に波紋が美しく彫られ、上下に飛鉋紋、口に近いところの上部と下部に幾何学紋が巡らされ、とても豪華です。恐れ多くも人間国宝　金城次郎さんと出版社へ木版画にさせていただいた旨、連絡、この版画をお送りしました。



沖縄シリーズ 41 作　**線彫海老・魚紋大花瓶**

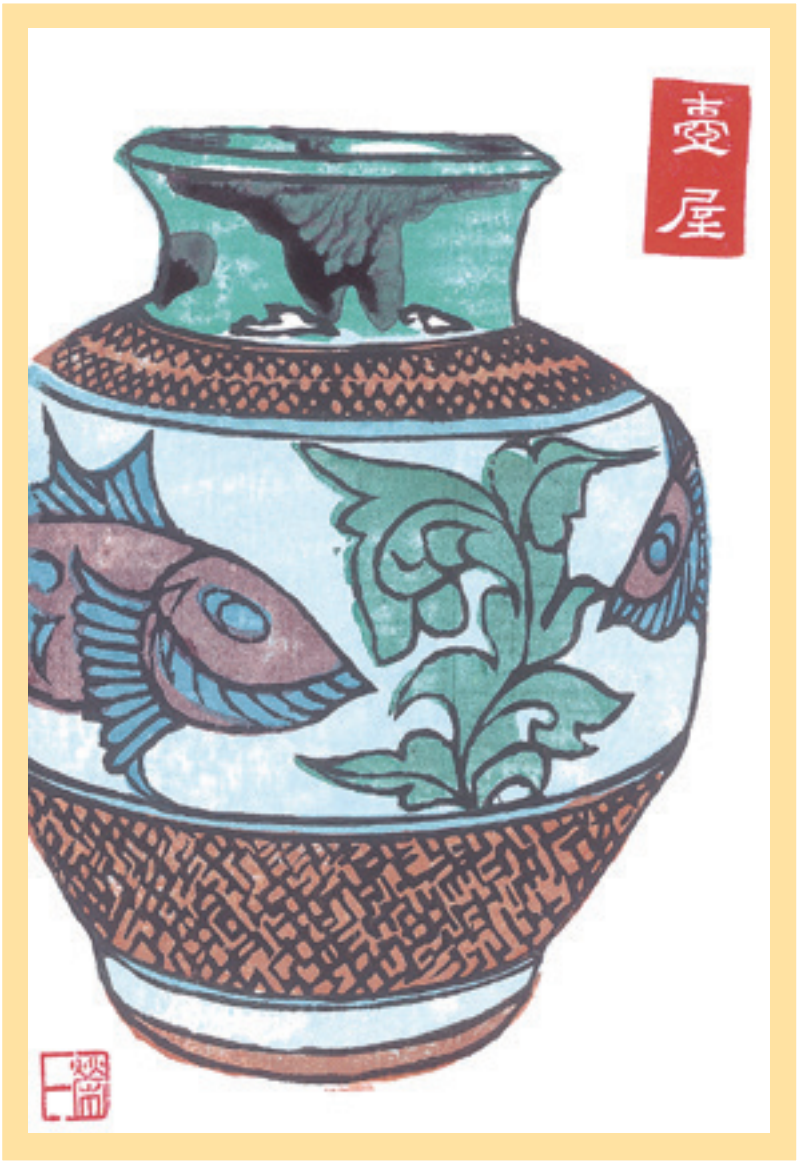
1998. 07. 04

この木版画は金城次郎さんの「線彫海老・魚紋大花瓶」です。先の版、『ふるさとの工芸を訪ねる旅』に掲載された大花瓶と大変よく似ています。素地の色と花瓶の口元の色合いは異なっています。これは朝日新聞　大阪版（1997 年 12 月 22 日付）に掲載されていたものです。那覇市伝統工芸館が観光宣伝用に作成し、報道したものと思われます。私は、初めて沖縄へ行く方には、この那覇市伝統工芸館、沖縄県立博物館、首里城、玉泉洞にある民家集落へ時間を工面して訪ねていただきたいと思っています。私が妻と飛行場を降りて最初に尋ねたのはこの那覇市伝統工芸館です。すばらしい陶芸作品や沖縄の各種伝統工芸品がゆったりと展示されています。著名な作家の作品が誠実な価格で販売されているのも魅力です。なお、伝統工芸館は何年か先に国際通りの方へ引越しされると伺っています。

沖縄シリーズ 40 作　**線彫刷毛目花・魚紋大花瓶**

1998. 06. 27

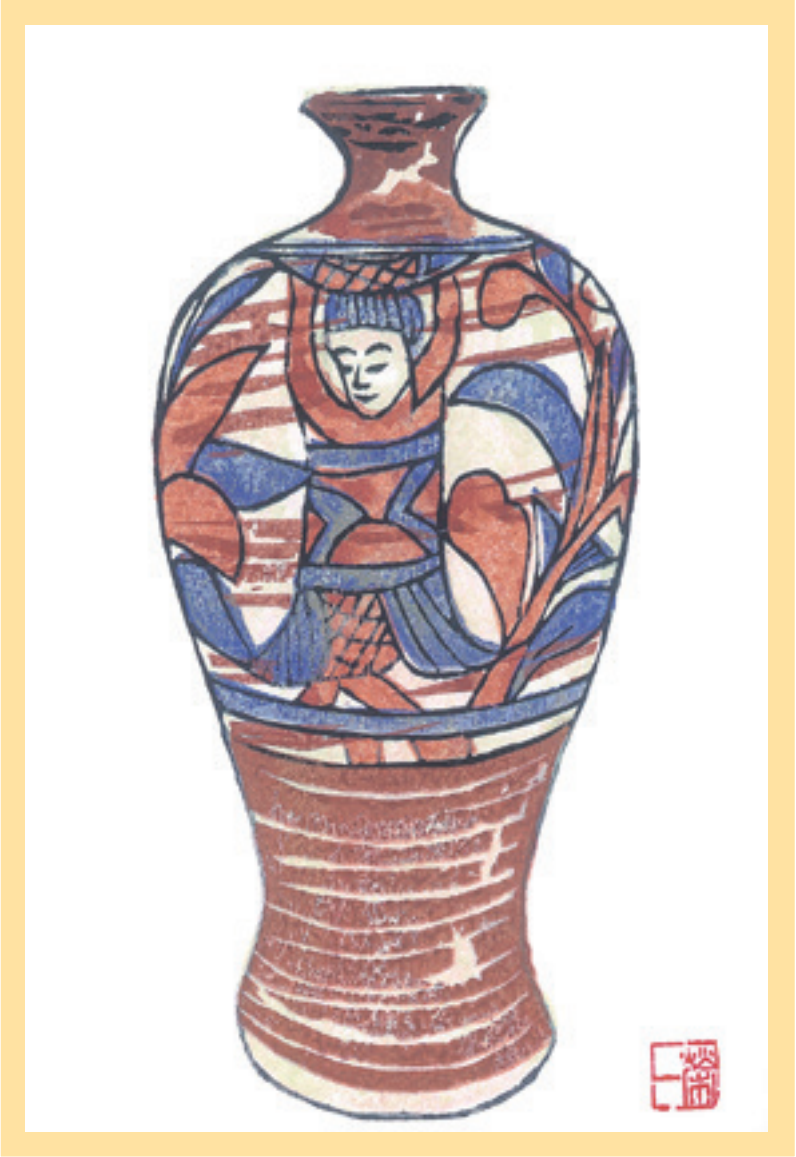
この木版画は金城次郎さんの「線彫刷毛目花・魚紋大花瓶」です。『沖縄文化財百科』（全４巻）の第３巻『芸能・民俗 第２章 工芸技術 琉球陶器』の中に掲載されていたものです。この大きな花瓶は、中央に大きな魚と花紋が線彫りで交互に描かれ、その文様の上下を飛鉋紋で挟みその上と下に幾何学紋の花びらを巡らせています。この花瓶の名前の刷毛目は焦げ茶の釉薬を含ませた刷毛を轆轤の回転に添って自在に付着させて描いていることによります。魚、花紋、幾何学紋等が刷毛目によって台無しになる場合もあり、その善し悪しの判断は大変なことです。そのリスクを少なくするため、先に刷毛目を付けて後、魚紋や花紋を描いたと思われます。いろいろと研究を重ね描いて来られたことと思います。窯から思い通りの作品が取り出されてくるとき、陶芸家の苦労、悩みも吹っ飛び、この上ない至福を手にし、すばらしい喜びを味わうことでしょう。



沖縄シリーズ 51 作　**線彫魚・海藻紋大花瓶**

1998. 08. 27

この木版画は人間国宝 金城次郎さんの「線彫魚・海藻紋大花瓶」です。花瓶は高さ、32.5 ㎝、直径 27.5 ㎝です。高さに較べて幅が広いのでどっしりとした安定感があります。室伏哲郎さんの名著『陶芸事典』（株）日本美術出版に掲載されていた白黒写真から私の想像で色版を作成しました。1997 年 9 月に読谷村立美術館で『人間国宝 金城次郎展』が開催され、99 点の陶芸作品を見せていただいたことが大変参考になりました。



沖縄シリーズ 204 作　**線彫エジプト文様大花瓶**

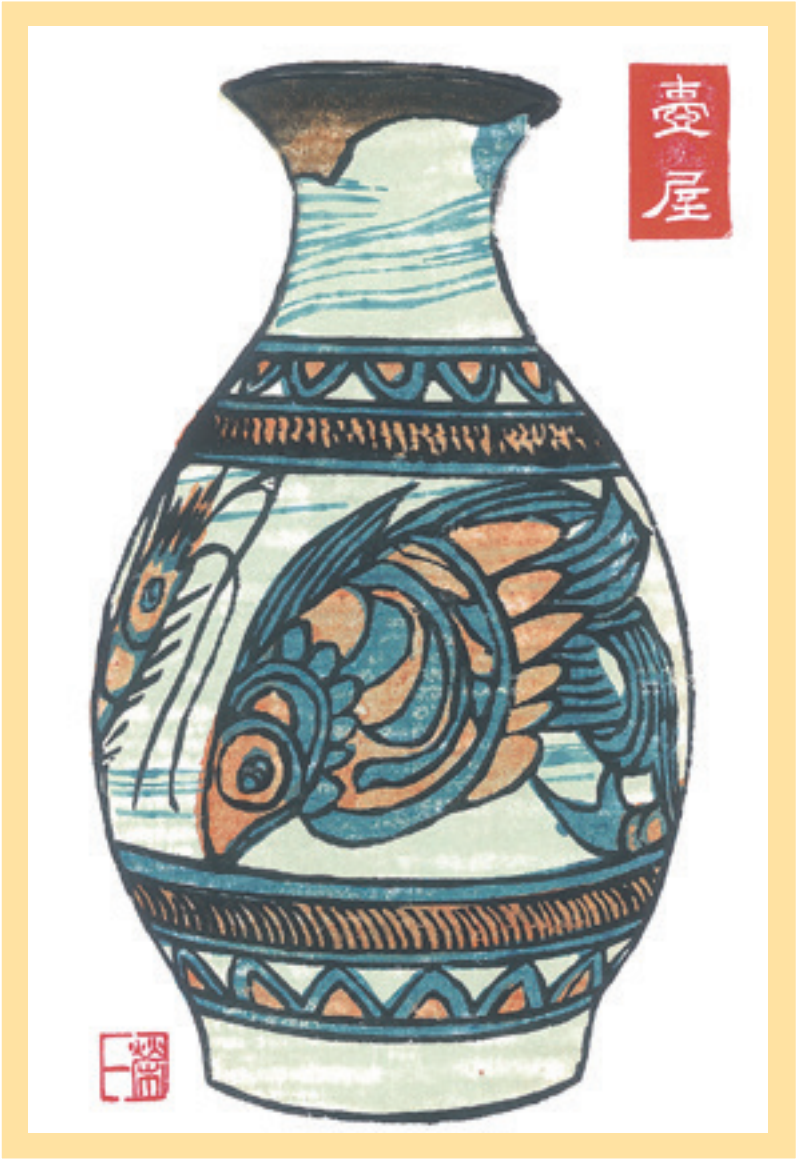
2002. 05. 15

　このすばらしい「線彫エジプト文様大花瓶」は、人間国宝　金城次郎さんの作品です。６度、沖縄めぐりを続けていますが、金城次郎さんの作品は、ただ眺め、鑑賞するものと思ってきました。高価すぎて購入できません。敏男さんは「親父の若い頃の作品です」と説明してくれました。エジプト文様は流行があって沢山制作されました。頭上に籠を乗せて歩く姿がおおらかに描かれています。高さが 38 ㎝もある大きな花瓶です。国際通りの土産物店には、金城次郎さんの作品が＜非売品＞として陳列ケースの中に飾られています。年々展示されているその作品数が少なくなっています。

沖縄シリーズ 163 作　**刷毛目線彫エジプト文様花瓶**

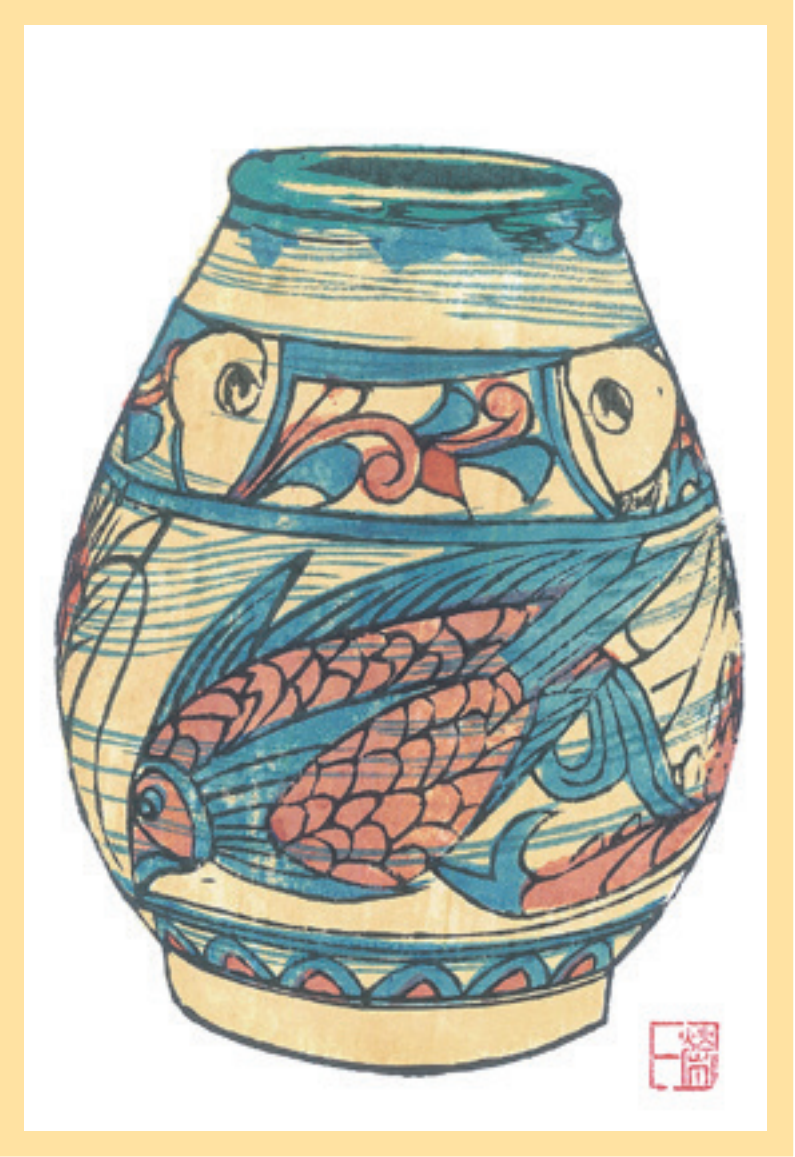
2001. 04. 28

この木版画は人間国宝　金城次郎さんの「刷毛目線彫エジプト文様花瓶」です。1998 年 7 月 23 日、大阪阿倍野近鉄百貨店で開催された『沖縄の味と伝統工芸展』で、池田市の阿南満三さんの企画によって次郎さんのすばらしい作品を数多く出展されました。許可を得て写真に撮らせていただきました。大阪で『人間国宝　金城次郎展』が開催されたようなスケールです。この花瓶の文様はエジプト文様といわれ、一時期流行して多くの陶芸家が数多く作りました。商品を入れた大きな籠を頭上に載せて逞しく歩く姿を中央に配し、その両脇に魚紋や花紋等が線彫りされています。このように線彫りの重厚なエジプト文様の作品は、国際通りの陶器店でも見かけたことがありません。



沖縄シリーズ 48 作　**線彫海老・魚紋花瓶**　1998. 08. 11

この木版画は 1998 年 6 月、大阪阪神百貨店で開催された『沖縄の味と技展』と題したミニ博覧会で販売されていた「線彫海老・魚紋花瓶」を写真に撮らせていただき版にしたものです。出展は、東京都福生市の［沖縄グラスコーラル］さんです。壺屋焼と琉球ガラスのすばらしい作品を並べています。人間国宝　金城次郎さんの美しい花瓶、壺、抱瓶、陶板などに人気があり、お客さんも立ち止まって眺めていました。



沖縄シリーズ 75 作　**刷毛目四耳海老・魚紋花瓶**

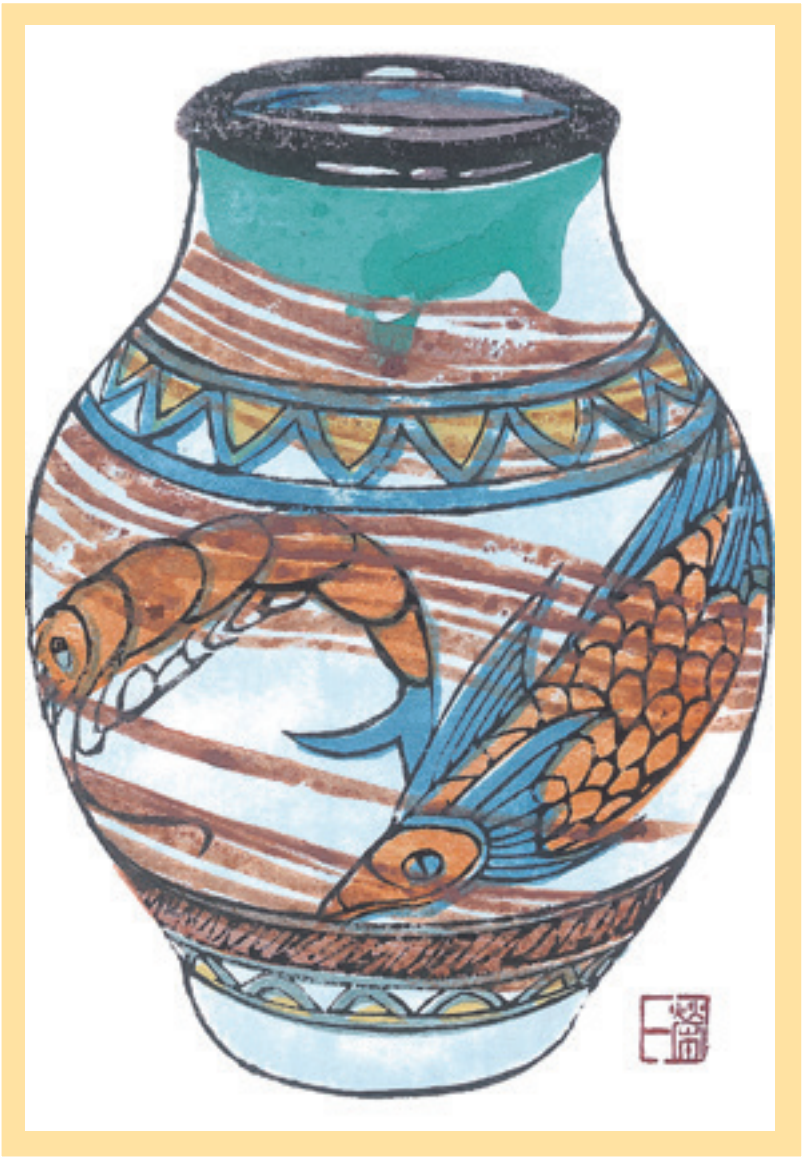
1999. 03. 08

この版は金城次郎さんの「刷毛目四耳海老・魚紋花瓶」です。東京日本橋三越本店が 1995 年 4 月に開催した『人間国宝 金城次郎展』に際し、すばらしい写真集を発行しました。その中から木版にさせていただきました。魚の姿は堂々としており、勢いが漲っています。見る人に爽やかさと勇気を与えてくれます。この写真集は全体が茶色っぽいのでフィルターをかけて撮影されたようです。このパンフは沖縄の友人が送ってくれました。感謝しながら一気に彫りました。

沖縄シリーズ 98 作　刷毛目線彫海老・魚紋花瓶

1999. 07. 20

これは金城次郎さんの「刷毛目線彫海老・魚紋花瓶」です。細かく美しい刷毛目が花瓶全体に掛けられ、海老と魚が向かい合って挨拶しているようで滑稽です。この花瓶の大きさは 20 ㎝を少し超えたくらいです。線彫りで描かれるこのような構図は花瓶や壺によく見られます。相当数多く作られたようです。土産物店が並ぶ国際通りを散策すると＜非売品＞として鍵のかかった陳列ケースの中に小、中型の花瓶や壺が収められています。夜は、金城さんの作品を探して歩くのも楽しみの一つです。



沖縄シリーズ 104 作　刷毛目線彫海老・魚紋花瓶

1999. 08. 24

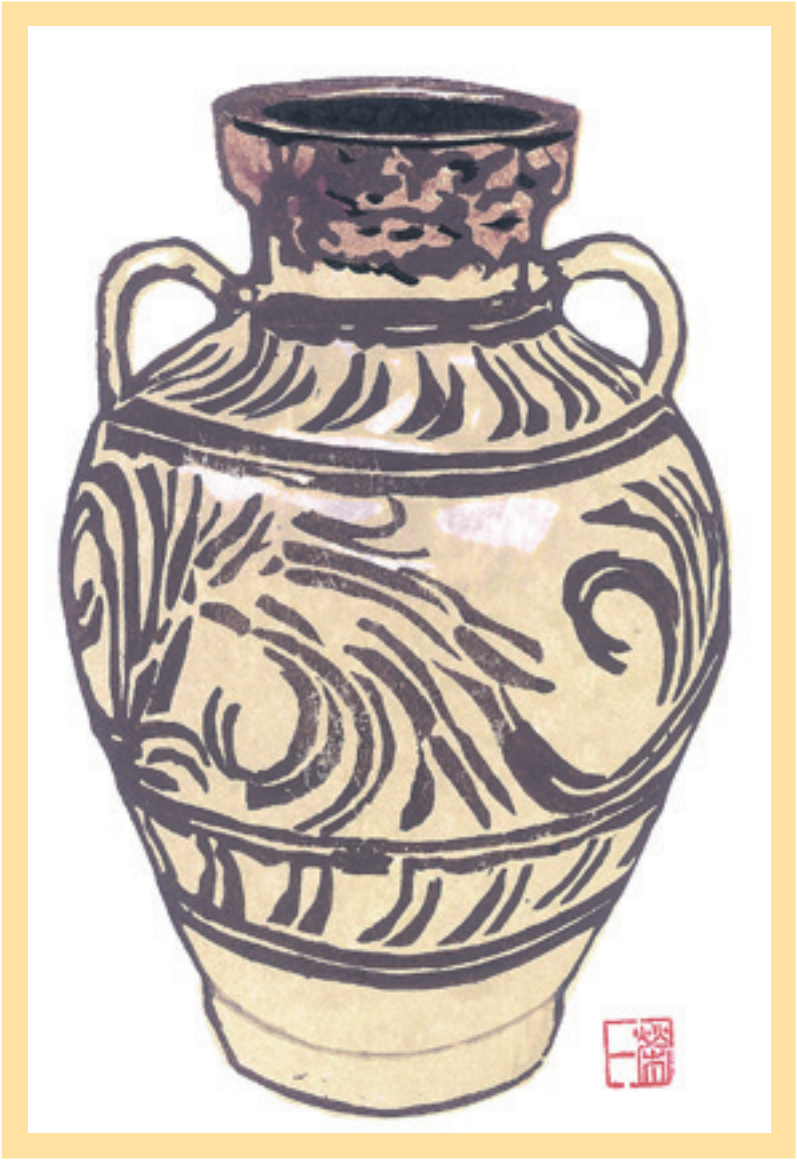
　これは読谷村立美術館が所蔵する「刷毛目線彫海老・魚紋花瓶」です。壺のようにも思われるこの花瓶は、口が大きいですが全体に安定感があります。金城次郎さんの作品です。この海老・魚紋に少し太めの焦げ茶の刷毛目が掛けられ、壺全体の色合いを暗くさせて、どっしりとした質量感をだしています。

沖縄シリーズ118作　**刷毛目線彫魚紋花瓶**　2000. 02. 08

　これは金城次郎さんの「刷毛目線彫魚紋花瓶」です。濃い藍色をバックに中央に大きな魚紋が描かれ、薄い刷毛目が口元上部を巡っています。魚紋の上下を橙色の幾何学紋（花びら）が挟んでいます。口も底も大きくどっしりとした安定感のある花瓶です。

沖縄シリーズ 119 作　**線彫魚・波紋花瓶**　　2000. 02. 17

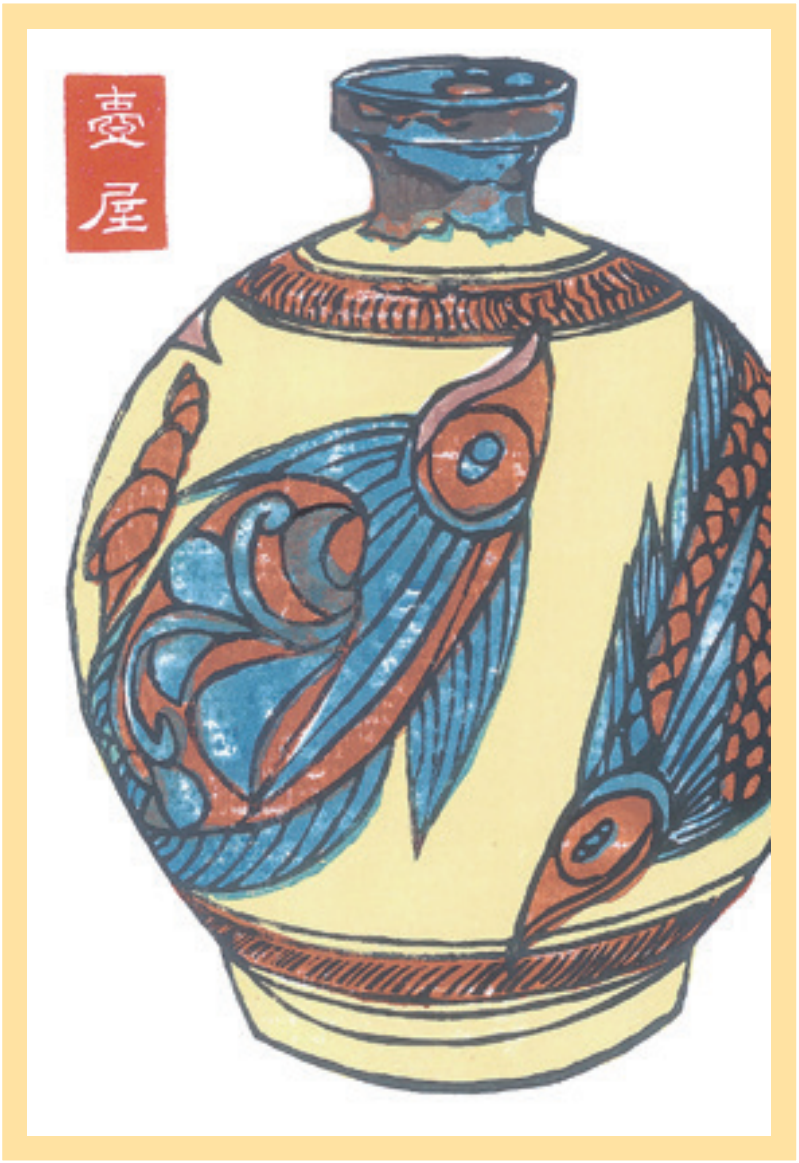
1999 年 6 月 12 日、大阪梅田阪神百貨店での『沖縄の味と技展』のとき、東京都福生市の［沖縄グラスコーラル］さんが展示販売されていた「線彫魚・波紋花瓶」です。濃い藍色の波紋の真中に美しい魚紋がおおらかに力強く描かれています。あるとき、グラスコーラルのご主人は、「東京から荷造りして百貨店等へ送り出しそれを現地で 1 点 1 点解いて陳列展示する。準備する時間は少なくキズや割れのないように注意しながら、作業するので緊張して汗だくになる。この仕事は荷を造り、解くの繰り返しで、結構大変な仕事ですよ」と笑いながら説明してくれました。私は「帰りの荷物、随分少なくなっていると良いですね」と応えました。



沖縄シリーズ 125 作　**双耳付指掻唐草紋大壺**

2000. 05. 02

これは「双耳付指掻唐草紋大壺」です。金城次郎さんの作品で沖縄県立博物館の所蔵品です。生乾きの壺に指先を押さえつけながら描いた次郎さんの唐草紋は、凹み、周りの粘土が盛り上がり、肉感が溢れ、その迫力が伝わってきます。この壺を眺めていると、次郎さんの陶芸に打ち込む勢いが、力強いエネルギーとなって、見ているものに新鮮な“元気”と“勇気”を与えてくれます。



沖縄シリーズ 38 作　**丸型線彫魚・巻貝紋壺**

1998. 06. 13

この木版画は金城次郎さんの「丸型線彫魚・巻貝紋壺」です。『沖縄文化財百科』（全４巻）の３巻『芸能・民俗　第２章　工芸技術』の中に紹介されています。壺には２匹の魚紋が描かれ１匹は壺を超えて跳ね出しそうな勢いで上向き、他方は頭を下げて深く沈みこむような姿勢をとっています。左側の上部に巻貝がさりげなく据えられおしゃれです。摺り終えてこの木版画を那覇出版社にお送りし、版にさせていただいた旨、了承をお願いしました。

沖縄シリーズ 102 作　**刷毛目海老・魚紋丸壺**

1999. 08. 09

この木版画は、1998 年 7 月、大阪阿倍野近鉄百貨店で開催された『沖縄の味と技展』で販売されていた金城次郎さんの「刷毛目海老・魚紋丸壺」です。高さに比べて丸い球形が大きく転がりはしないかと心配しました。しかし、大丈夫！　底部分を肉厚にして重心が下方に安定するように作られているのです。壺に描かれた魚紋は大きく悠然と泳いでいます。金城次郎さんの作品にはいつでも多くのお客さんが見入っています。これは「丸壺」と簡単な名が付されていましが、私が勝手に「刷毛目海老・魚紋丸壺」と呼んでいます。

沖縄シリーズ 66 作　刷毛目線彫海老・魚紋壺

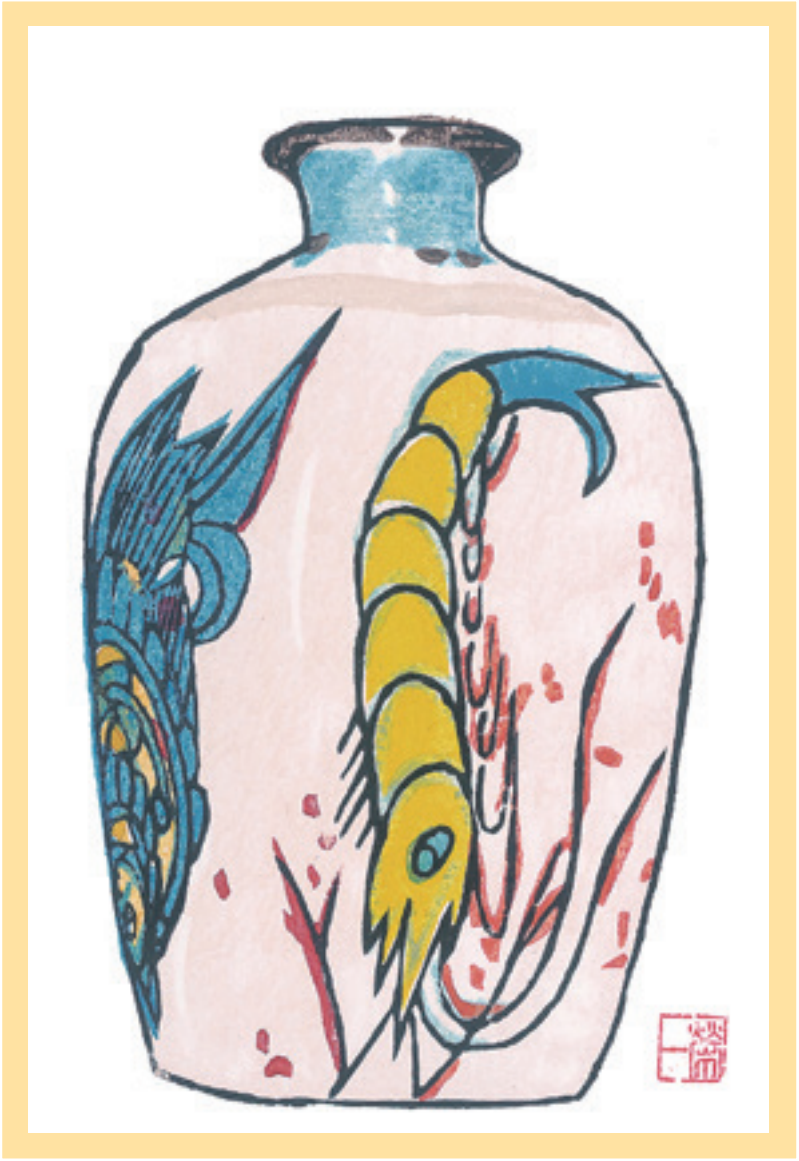
1999. 01. 22

この木版画は金城次郎さんの「刷毛目線彫海老・魚紋壺」です。大阪で『ミニ沖縄博』や『沖縄の味と技展』等が阪神、近鉄百貨店で開催されると聞くと必ず時間を作って出かけました。近鉄百貨店で開催された 1998 年 7 月 23 日、沖縄の［まじる商店］、東京都福生市の［沖縄グラスコーラル］、池田市の阿南満三さんの企画された作品群が『人間国宝・金城次郎特別展』に出展されました。すばらしい作品が多数展示即売されました。その中に陳列されていたのがこの「壺」で、阿南さんが展示されました。ずっと眺めていても飽くことはありません。このような球形面にバランスよく線彫りするのは大変難しいと思います。

沖縄シリーズ 45 作　**刷毛目線彫海老・魚・貝紋壺**

1998. 07. 23

この木版画は金城次郎さんの「刷毛目線彫海老・魚・貝紋壺」です。壺の中央に巻貝を配置し、右方に大きな魚と左方には海老と小さな魚を泳がせています。貝の隣に海老の胴体、尻尾が勢いよく描かれています。この壺は円筒形をした球体ですので同時に裏側をみる事が出来ません。海老を正面にしたのも見たいです。口元から底の方まで刷毛目模様が轆轤を回しながら付けられています。これは読谷村立美術館の宮城元信館長さんからいただいた“しおり”に掲載されていたものです。



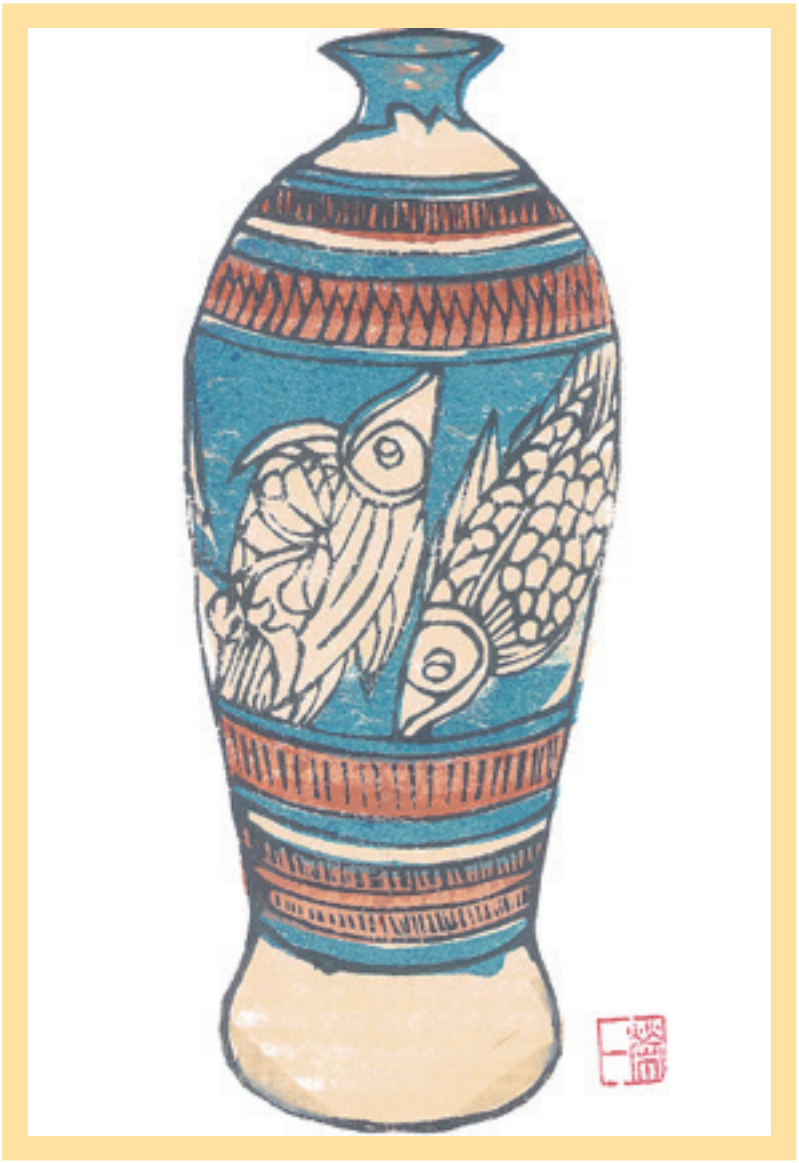
沖縄シリーズ127作　**線彫海老・魚紋壺**　2000.05.15

これは私の好きな、角が少し丸い四角面体の「線彫海老・魚紋壺」で、金城次郎さんの作品です。絵画や写真に表すと一方向から眺めた部分を捉えているのでその画面から「壺」や「花瓶」の裏側を見ることはできません。実物があると適当に回して横や裏側を眺められます。私はこれを撮影するとき、全体の特徴がよく把握できるように厚かましく動かしてアングルを決めて撮らせていただきました。この壺は海老紋が美しかったので魚紋には少し遠慮してもらいました。肉厚の壺で重量感があり、取り扱いも大変でした。1998年６月、大阪阿倍野近鉄百貨店で東京都福生市の［沖縄グラスコーラル］さんが展示販売されていたものです。

沖縄シリーズ 136 作　**四面体線彫海老・魚紋壺**

2000. 07. 08

この木版画は金城次郎さんの「四面体線彫海老・魚紋壺」です。1998 年 7 月 28 日、大阪阿倍野近鉄百貨店で東京都福生市の［沖縄グラスコーラル］さんが展示販売されていたものを撮らせていただきました。この壺の胴体は正四角形に近い形をし、口元は絞られ丸くなっています。一面に海老、魚紋が下向き（下向きの作品が多い）に流れるような美しい線で描かれています。この壺はそのままでもすばらしく、どんな花も負けてしまいそうです。



沖縄シリーズ 95 作　**線彫魚紋鬼の腕**　1999.07.09

この木版画は金城次郎さんの「鬼の腕」と呼ばれる壺です。池田市の阿南満三さんに、『沖縄大百科事典』を参考に教えていただきました。「鬼の腕」は沖縄語で（ウニヌティ）と読みます。荒焼（アラヤチ）で、黒褐色に焼き締め、肉厚、頑丈な造りが“丈夫な鬼の腕”を思わせたのが由来のようです。上焼（ジョウヤチ）でもこのような上薬を塗った壺が焼かれています。この壺の正式な呼び名は「七合タワカシー」といいます。この「線彫魚紋鬼の腕」、タワカシーは見るからに肉厚で重そうです。このような壺に高価な泡盛を入れて楽しんだのですね。甕や壺に入った高価な古酒（クースー）は飲んで２、３割減ると度の低いものを注ぎ足して大切に飲用したようです。

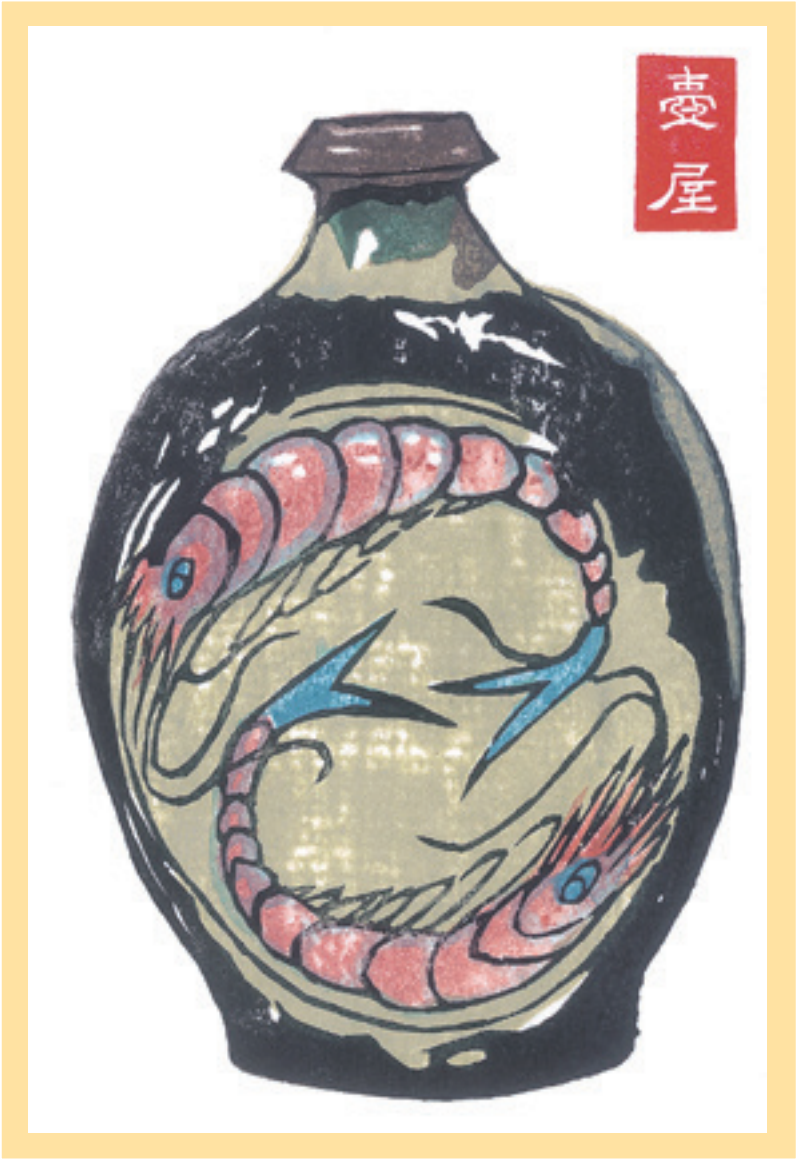
沖縄シリーズ 120 作　**イッチン水玉・魚紋嘉瓶**

2000. 02. 20

これは「嘉瓶（ユシビン）」といってお祝い事に泡盛を入れてお届けし、中身の泡盛を別の瓶や甕に移し替えて「瓶」を返却してもらうものです。この瓶は普通、他人には渡らないでその家の所有物としてずっと使われます。それぞれのお家の特注品として作られるか、または陶器店で並べられた中から購入して家財となる重要な役割を担っています。これは金城次郎さんの作品で、白い水玉模様と魚紋がイッチンという技法で描かれています。端正できりりとしたすばらしい嘉瓶で、名前は私が勝手に「イッチン水玉・魚紋嘉瓶」と呼んでいます。読谷村立美術館の常設展示品です。

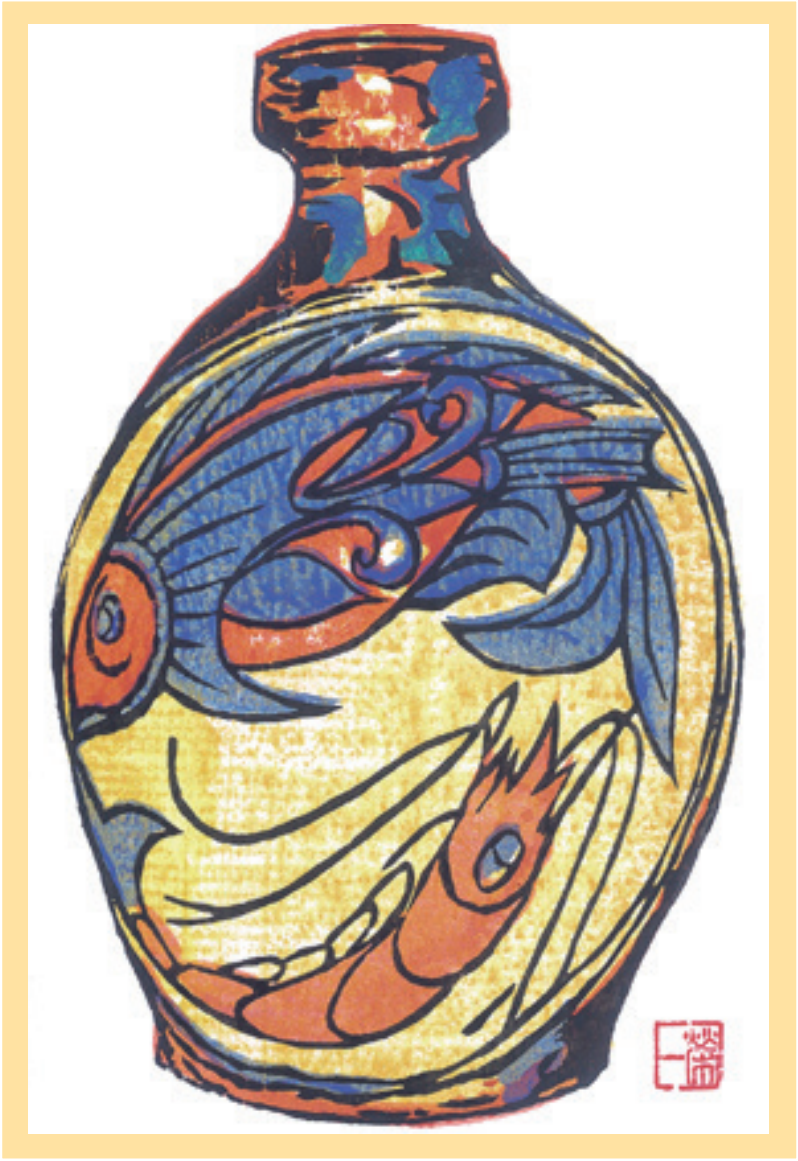
沖縄シリーズ 162 作　**線彫魚紋扁壺**　2001. 04. 21

この木版画は人間国宝 金城次郎さんの「線彫魚紋扁壺」です。あまり見かけない形ですが扁壺の一種だと思います。上部の口元が大きく、斜めに面切りされています。中央部に長円形の膨らみをもたせ、線彫りの美しい魚紋を描き、下部はどっしりと肉厚で高い台を付けています。東京都福生市の［沖縄グラスコーラル］さんのご主人からいただいた 1999 年の年賀ハガキの写真から版にさせていただきました。［沖縄グラスコーラル］さんは大阪の近鉄ならびに阪急百貨店へこられたら、その度に、金城さんのすばらしい作品を 10 数点、展示されています。



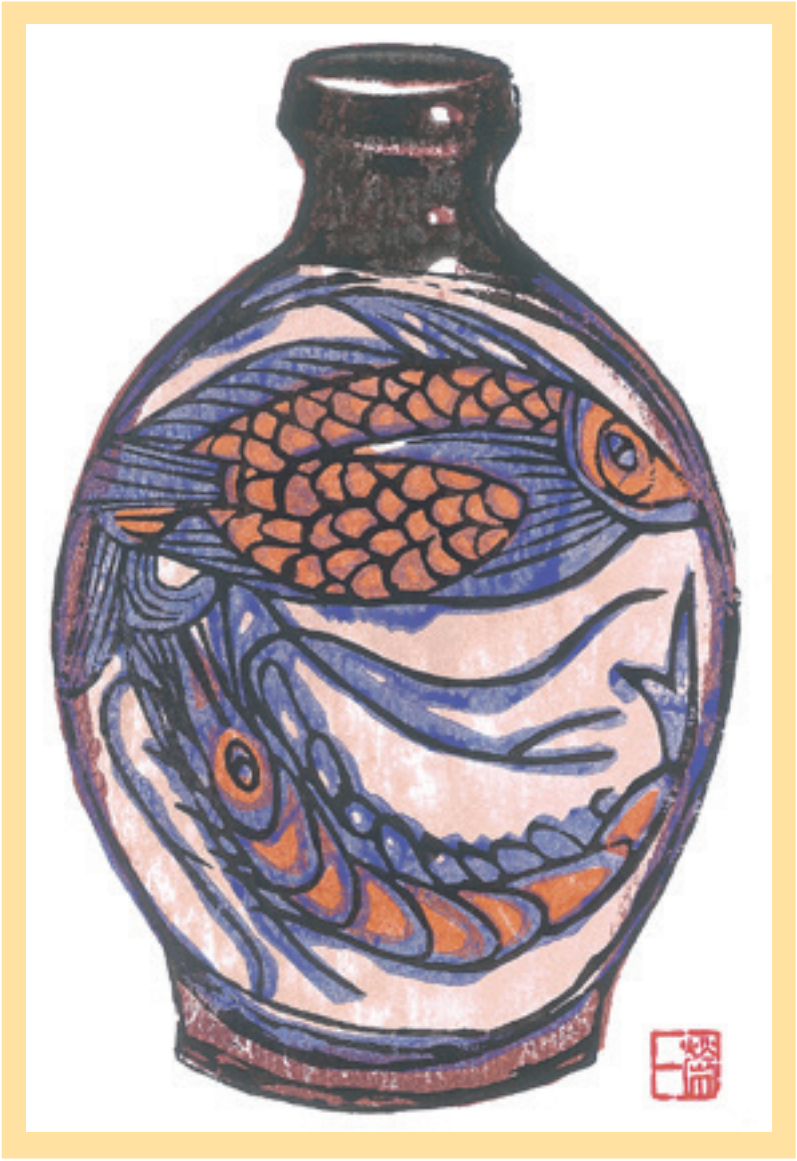
沖縄シリーズ 36 作　**線彫海老紋扁壺**　1998. 06. 03

この木版画は人間国宝 金城次郎さんの「線彫海老紋扁壺」です。壺の正面に 2 匹の勇壮な海老が円を形作りながら画面一杯に描かれています。バックの色はくすんだ黄土色、海老紋の外側は漆黒の釉薬で取り囲んでいます。海老の胴体は、ピンク、尻尾と目は淡いコバルト色です。この扁壺は、読谷村立美術館の宮城元信館長さんからいただいた『人間国宝 金城次郎展』（1997 年 9 月 24 日～ 10 月 25 日）の案内ポストカードをもとに彫りました。



沖縄シリーズ 164 作　**線彫海老・魚紋扁壺**　　2001. 05. 04

　これは人間国宝　金城次郎さんの「線彫海老・魚紋扁壺」です。大阪阿倍野近鉄百貨店で開催された『沖縄の味と伝統工芸：人間国宝　金城次郎展』に池田市の阿南満三さんが、企画されて数十点ものすばらしい作品を展示されました。私は、金城次郎さんの作品を大阪の 1 ヶ所でこんなに数多く拝見したことはありません。1997 年 9 月に読谷村立美術館で 99 点の金城次郎さんの作品を拝見して以来です。この扁壺はその内の 1 点です。形は昔のアルミ製の水筒によく似ています。泡盛を入れる酒器です。現在はこのまま飾るか、花瓶として利用されています。

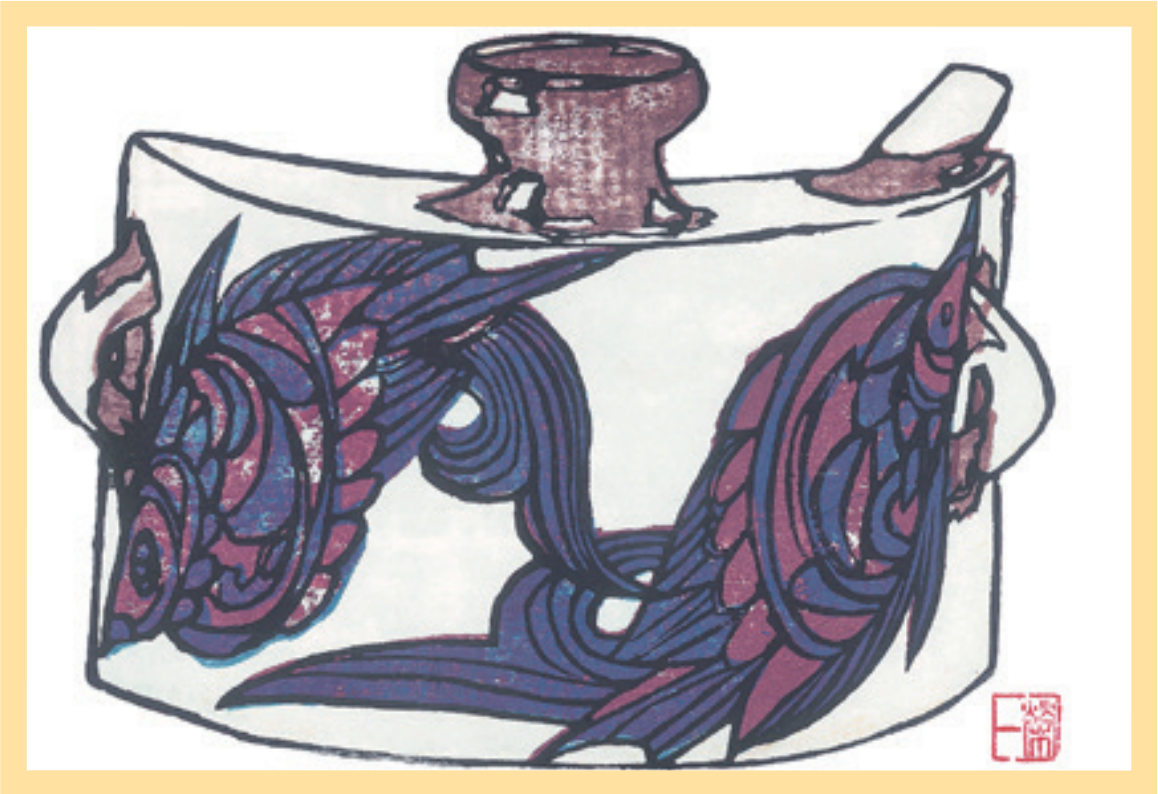


沖縄シリーズ 166 作　**線彫海老・魚紋扁壺**　2001. 05. 20

この木版画は金城次郎さんのすばらしい「線彫海老・魚紋扁壺」です。1995 年 4 月、東京日本橋三越百貨店で開催された『人間国宝 金城次郎作品展』に出品された扁壺です。南風原町の友人 川端良治さんがこの展覧会で発行された作品集（出品点数 60 点の内 40 点掲載）を送ってくれました。ときどき作品集を眺めては次郎さんの力強さ、優しさ、自由に作られている姿勢等を感じています。写真のように再現できませんが、誠実に一生懸命彫らなければならないと思っています。仕上がった版を眺めていて“彫り”や“摺り”でいつも反省し、悔やむことも多いです。

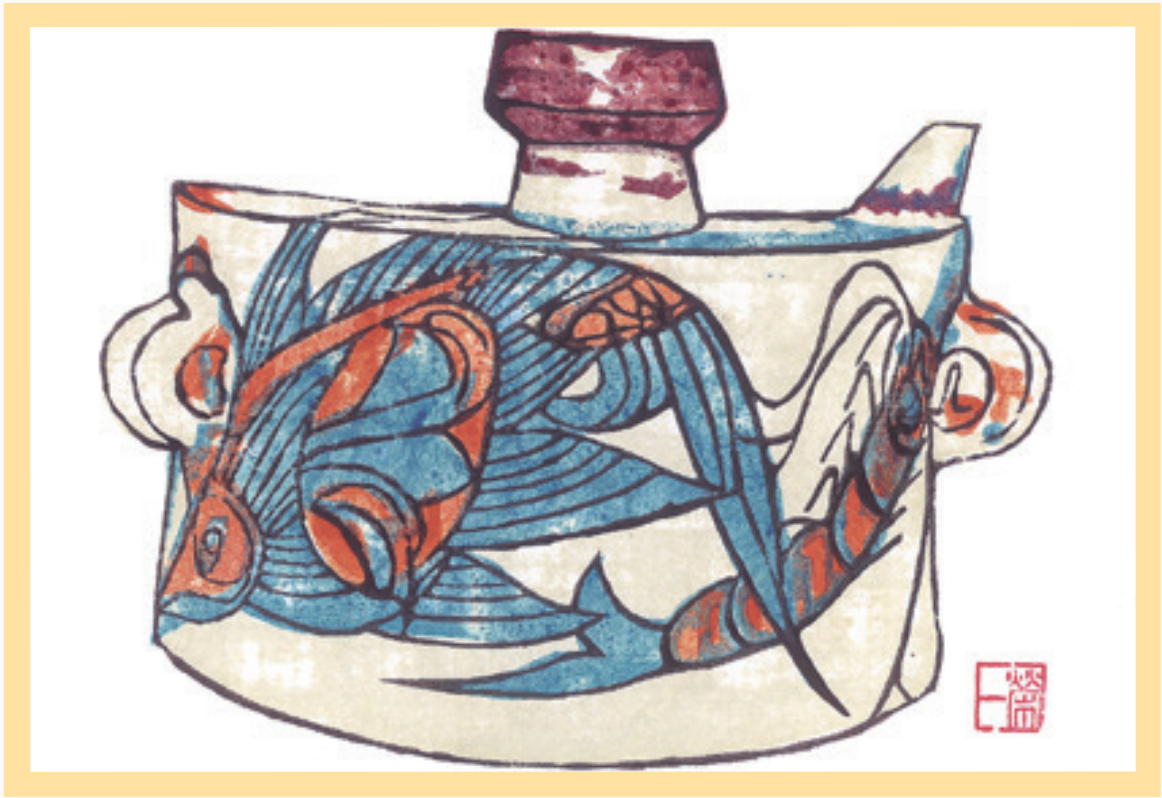
沖縄シリーズ 44 作　**線彫海老・魚紋抱瓶**　1998. 07. 18

この木版画は、金城次郎さんの「線彫海老・魚紋抱瓶」です。抱瓶の正面に魚紋が枠をはみ出すほどの勢いで描かれています。鱗部分に美しい唐草紋が描かれ、魚の尻尾部分に海老がその余白を埋めるようにＬ字型の姿勢を取っています。抱瓶の口元は少し高く長いようです。これは1998 年 6 月 15 日、大阪梅田、阪神百貨店で開催された『ミニ沖縄博覧会』に出展されていたものを、写真に撮らせていただき版にしました。沖縄を訪れて以来、大阪で開催される『沖縄展』には毎回出かけています。そのたびに泡盛を購入する関係で必ず酒造所から案内状をいただきます。そこに行けば［まじる商店］と［沖縄グラスコーラル］さんにお会い出来ます。楽しみにしています。



沖縄シリーズ 58 作　**線彫魚紋抱瓶**　1998. 10. 28

この木版画は、金城次郎さんの「線彫魚紋抱瓶」です。素地は白い釉薬を使っています。魚体は珍しく赤茶と濃い藍色を用いて全体をどっしり重い感じで仕上げています。魚の鱗文様は美しい唐草紋を描いています。元の写真は室伏哲郎さんの『陶芸辞典』（株）日本美術出版に掲載されていたものです。



沖縄シリーズ 63 作　**線彫海老・魚紋抱瓶**　1998. 12. 13

この木版画は、金城次郎さんの「線彫海老・魚紋抱瓶」です。正面に勢いのある立派な魚と海老が描かれています。人間国宝に指定されてから金城さんの作品はどんどんと価格が高くなり、欲しいと思っても一般の方は手が出せなくなりました。次郎さんはそのような状況を知って「少しでも安価に提供できるよう、どんどん数多くの作品を生み出しました」と書物で紹介されています。壺屋通りや国際通りの陶器店では金城さんの壺、花瓶等が数多く陳列棚に入れられて販売されていました。眺めているだけで元気が湧いてくるようです。次郎さんが引退されて、これらの作品は＜非売品＞とシールが貼り替えられています。

沖縄シリーズ 96 作　**線彫魚紋抱瓶**　1999. 07. 14

これは金城次郎さんの美しい「線彫魚紋抱瓶」です。1998 年 7 月 22 日、大阪阿倍野近鉄百貨店で開催された『ミニ沖縄博』で写真に撮らせていただき木版画にしました。抱瓶は表側（前）と裏側（後）の部分を合体させて、底と上部の面を張り合わせて作ります。そのとき内側を腰に合わせて曲面にしています。上部は泡盛を入れる大きな口と片隅に注ぐ小さな口が付けられ、前の両端に 2 ヶ所の耳を付けて仕上がります。陶芸家にとっては簡単に作れそうです。轆轤を使わず、粘土を型に押し込めて枠は仕上がります。抱瓶作りで“型”を使って作る場合、“型物”と呼んでいます。昔、抱瓶の製作較べ（コンクール）があり、陶芸家と愛好家の夢を駆り立ててすばらしい作品が輩出されました。第一に前面の部分の絵を何にするか、次に曲線部分の面も 5 面に面切りしたり、耳の形を工夫したりして変化を求め、制作されました。使用方法は腰の部分に紐を通して固定し、肩から吊るして持ち運びます。主として馬に乗って移動しましたので優雅です。財力のある地主等が畑の見回りや遠出した宴会に持参したようです。今は壁に掛けたり、置物として飾ったり、花瓶として花を生けたりしています。

沖縄シリーズ 124 作　線彫魚紋抱瓶　2000. 04. 30

これは金城次郎さんの「線彫魚紋抱瓶」です。中央で２匹の魚がすれ違いながら悠然と泳いでいます。抱瓶の表面は体に合うよう少し湾曲しているので、水槽の中で尻尾を追い回転しているようにも見えます。次郎さんの作品は自由自在に題材が湧いてくるのですね。“下絵”もケースや紙によく書かれていると図書に紹介され、実際、展覧会に飾られていたのを拝見したことがあります。

沖縄シリーズ 79 作　**線彫海老．魚紋大皿**　1999. 04. 06

この版はすばらしい「線彫海老・魚紋大皿」です。1998 年 7 月 12 日～ 29 日まで大阪阿倍野近鉄百貨店で開催された人間国宝 金城次郎さんの展示即売会は、大変盛況で多くのお客さんが押し寄せました。花瓶、壺、鉢、急須、カラカラ、抱瓶等すばらしいものばかりです。中でも最高の価格を付けて売り出されたのがこの大皿です。外国の乗用車と同じ位の値札です。お客さんは足を止め覗き込むように見入っています。金城さんは、本人の作品が市場で高い値段が付けられている事を知り（手元から離れていく価格と比べて）、少しでも安価で多くの方に使ってもらえるようにと湯呑、茶碗等の実用品を多く作ったと聞いています。

沖縄シリーズ 92 作　**緑釉線彫双魚紋大皿**　1999. 06. 24

この木版画は金城次郎さんの「緑釉線彫双魚紋大皿」です。室伏哲郎さん編纂による名著『陶芸事典』より、彫らせていただきました。この事典には金城さんの作品が３点掲載されています。版画にさせていただいたのは「魚紋線彫抱瓶」に続いて２枚目です。次郎さんの作品は色合いが少し暗くどっしりと安定感のあるものが多いですが、この大皿の画面はとても明るく、下方にある魚の尾と頭が少し上方にある魚の上に被さって描かれています。1997 年９月、読谷村立美術館で開催された『人間国宝　金城次郎展』のとき展示総数 99 点の中にこの大皿が展示されていて拝見することができました。とても嬉しい出会いで、幸運なことでした。

沖縄シリーズ 122 作　**線彫海老・魚紋大皿**　2000. 04. 03

沖縄県島尻郡南風原町に住む友人であり、私の沖縄訪問の恩人 中村高雄さんが、読谷村立美術館で開催された『金城次郎展』を報道した 1997 年 10 月 20 日付の沖縄タイムスを送ってくれました。そこに掲載されていた沖縄県文化財審議会委員の平良邦夫さんの記事のなかに白黒写真版のこのお皿が紹介されていました。この展覧会へは中村高雄さんと親戚の大城義広さんが、私達夫婦に心のこもった案内をして下さいました。お昼の食事時間も節約したいと言って、首里餅菓子店で買った餅をほおばりながら車を走らせてくれました。心が熱くなり感謝の気持ちで一杯になりました。

沖縄シリーズ 80 作　**線彫魚・貝紋大皿**　1999. 04. 11

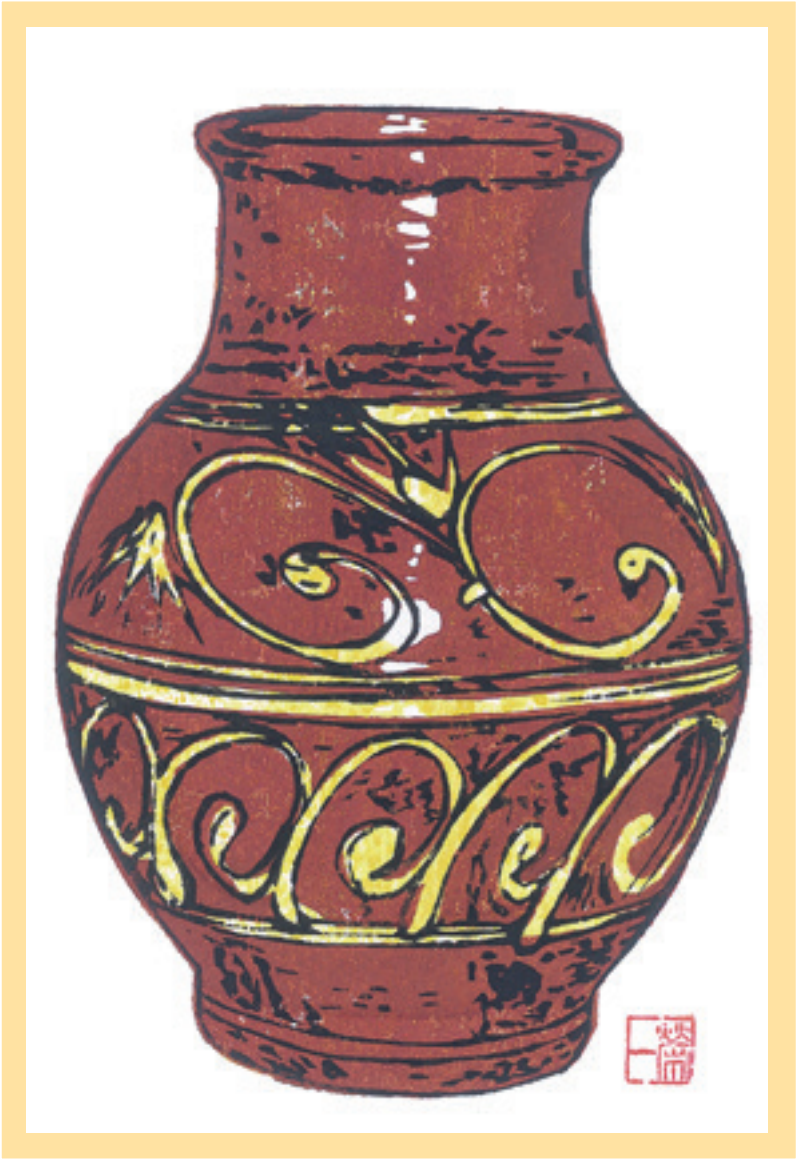
これは那覇市伝統工芸館の売店の陳列ケースに飾られていた金城次郎さんの「線彫魚・貝紋大皿」＜非売品＞です。大皿には２匹の魚が描かれ、魚の間に小さな二枚貝をそっと描いています。私はこれまで金城さんの海老と魚紋、双魚紋の図柄の大皿、壺、抱瓶を数多く拝見してきました。それらと比較してアクセント的に描かれた“二枚貝や巻貝”は遊び心で描かれたのかなと、１人考えています。沖縄の友人は、「お父さんが、これまで普通に飾っていた次郎さんの花瓶を人間国宝に指定された後は、目のつかない場所に片付けてしまい、最近は見たことがない」と言っていました。国際通りでも展示されている作品は少なくなったように思われます。もっと残っていると思いますが、個人や法人が大切に保管されているのですね。金城さんのすごい制作活動は、ふとスペインが生んだ美術の巨匠“ピカソの多作”と重なって思い浮かびました。

沖縄シリーズ 47 作　**線彫魚紋大皿**　1998. 08. 04

この木版画は淡交社が発行した『カラー日本のやきもの第 1 巻 沖縄』に掲載されていた金城次郎さんの「線彫魚紋大皿」です。高さ 9. 2cm、直径 42. 4cm もある大きな皿です。 4 匹の魚はそれぞれ異なった美しい文様で線彫りされています。正面にいる魚は目が笑っているようです。犬や猫は表情や鳴き声で喜怒を表しますが魚が笑うなど不思議なことです。ユーモアがあって楽しいです。この大皿に似た作品を 1998 年 6 月、大阪近鉄百貨店で開催された『ミニ沖縄博覧会』で見ました。

沖縄シリーズ121作　**線彫魚紋急須**　2000.02.29

これは「線彫魚紋急須」です。金城次郎さんの作品です。下地は茶色で梅干などを漬ける壺の色とよく似ています。急須の中央に丸い窓絵の中に線彫りで魚紋を描いています。単調な色具合が落ち着いた感じを与えてくれます。少し簡素かなと思いますが心温まる雰囲気を醸しています。他に次郎さんの急須は、二彩や三彩で描いた抽象文様のすばらしい物が多く作られています。



沖縄シリーズ 128 作　**唐草紋大花瓶**　2000. 05. 19

この木版画は金城明光さんのすばらしい筒描きされた「唐草紋大花瓶」です。1999 年 7 月、読谷村立美術館に常設展示されていたものを版にさせていただきました。茶色の下地に美しい黄土色の曲線で描かれた唐草紋はとても迫力がありました。この茶色は、昔多くの家庭で梅や生姜を塩と紫蘇の葉で漬け込んだ“壺の色”とそっくりです。最近は“漬物”も家庭でつける習慣が薄れてきたようです。私の家庭でもパックに入ったものを買ってきて食しています。

沖縄シリーズ 206 作　**盛上龍巻抱瓶緑釉流**　2002. 06. 01

この抱瓶は、あまり大きくて度肝を抜かれました。名前は「盛上龍巻抱瓶緑釉流」、金城明光さんの作品です。2000 年『読谷（やちむん）展』に出品されたもので、2001 年２月９日、読谷村座喜味の巨大な連結登り窯［北窯］を訪ねての帰り、お腹がすいて立ち寄った真新しい食堂にこのすばらしい抱瓶が飾られていたのです。とてもラッキーでした。白黒の小さな写真ではその大きさを想像できません。高さはおよそ 60cm、横幅は１ｍ位ありそうです。壁面に多くの陶芸品が並んでいます。明光さんのお住まいで１階部分が軽食堂で陶器も販売されています。あいにく明光さんはお留守でした。いつかお会いできる日を楽しみしています。

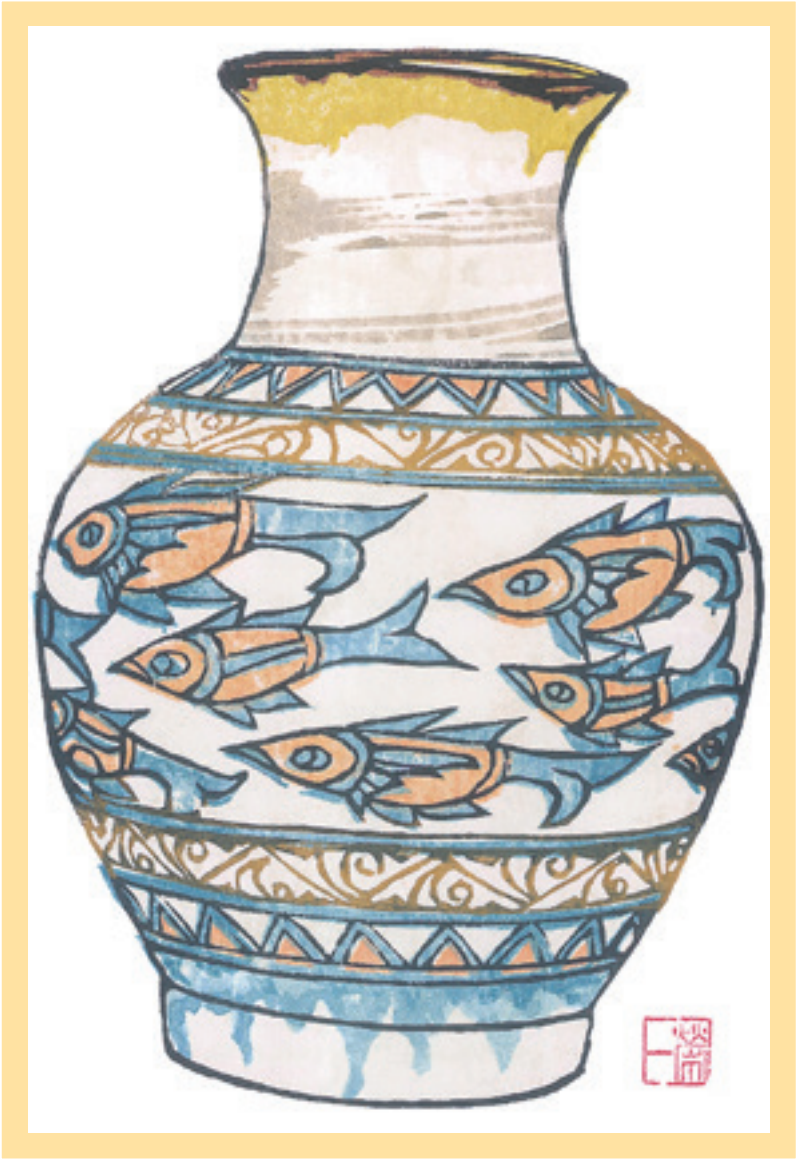
沖縄シリーズ 68 作　**筒描海老・魚紋大皿**　1999.01.30

　これは金城明光さんの「筒描海老・魚紋大皿」です。線彫りのようなすばらしいラインに嬉しくなります。実際には釉薬の白いラインが少々盛り上がって立体感があります。読谷村立美術館が同村の陶芸家に協力をいただいて作品展を行ってきました。今では春の風物詩として村民に親しまれています。この木版画は、1998 年の『 読谷（やちむん）展』のパンフより版にさせていただきました。明光さんに一度お会いしたいとお尋ねましたが、所要で出かけられていて会えませんでした。

沖縄シリーズ 77 作　**線彫海老・魚・波紋大皿**

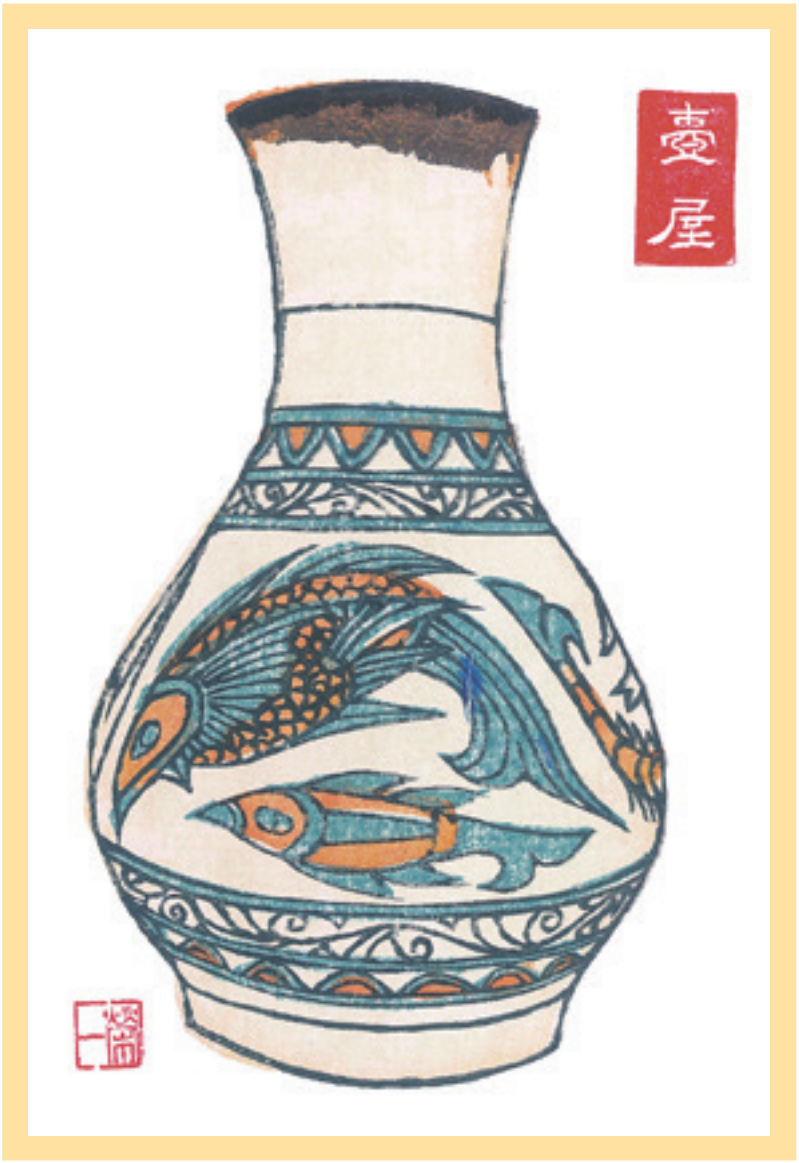
1999. 03. 26

　このすばらしい「線彫海老・魚・波紋大皿」は、金城秀義さんの作品です。壺屋通りの荒焼［南窯］からすぐのところにある［カカズ人形・陶器店］のガラス窓に飾られていました。大皿には躍る海老、優雅に泳ぐ魚、岩にぶつかり飛散する波紋が、線彫りされ、描かれています。線彫りは細く機械で削り取ったように同じ太さで彫られています。とても美しいです。



沖縄シリーズ69作　**刷毛目線彫魚紋大花瓶**　1999.02.04

この「刷毛目線彫魚紋大花瓶」はとてもゆったりしています。1999年1月、読谷村立美術館から読谷山花織会館を経て“やちむん通り”に入り工房を巡りました。人間国宝 金城次郎さんの二男でこの花瓶の作者である金城敏昭さんのお店を尋ねました。この花瓶は、中央に彫りこまれた魚たちが水族館の球形水槽で群泳しているように軽やかで、眺めていると心が和み、安らぎを覚えます。

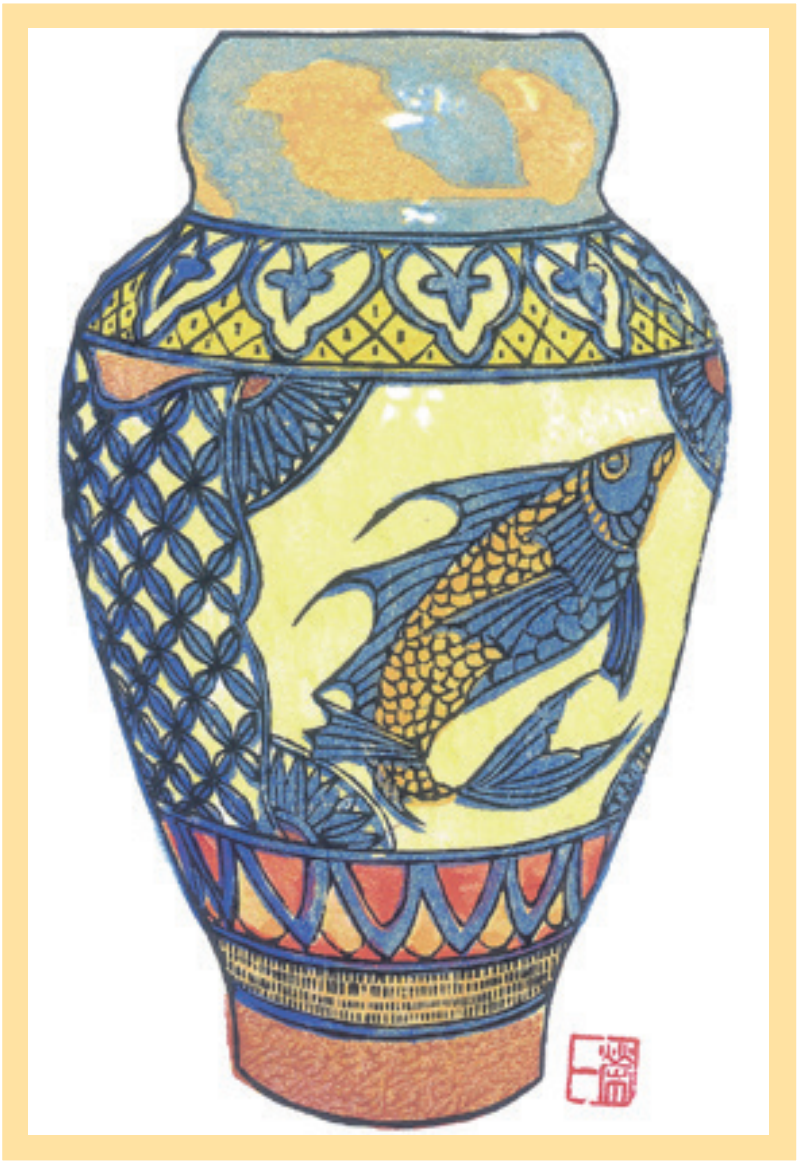


沖縄シリーズ 57 作　**線彫海老・魚紋大花瓶**　1998. 10. 22

この木版画は金城敏昭さんの「線彫海老・魚紋大花瓶」です。この方は人間国宝 金城次郎さんの二男です。次郎さんが作陶活動を引退するまでの間、ごいっしょに長く共同作業をされてきました。独立して窯入れしたのは遅いそうです。この大花瓶は形が安定しており、描かれている魚紋や海老が悠々としています。大阪梅田阪神百貨店で開催された『ミニ沖縄博覧会』で壺屋通りの［まじる商店］さんが展示販売されていたものを写真に撮らせていただきました。1998 年 6 月 15 日から 3 日間、沖縄へ壺屋焼をはじめ紅型、琉球紬、珊瑚の装飾品、泡盛等を見に出かけました。［まじる商店］のご主人、西平宗秀さんは、沖縄の伝統工芸である“壺屋焼”を長年の間、全国に広めて来られました。焼き物の名前や作陶家の作品に現れる特徴を優しく説明しながら、沖縄の文化を紹介されています。

沖縄シリーズ 88 作　**線彫海老・魚紋中皿**　1999. 06. 10

これは金城敏昭さんのすばらしい「線彫海老・魚紋中皿」です。絵画というと平面の画用紙に描くことしか経験がないので、ナイフで乾いた皿に絵を線彫りするのは容易ではないだろうと想像するだけです。皿の縁側が少し盛り上がっていますので手の置き所が難しいと思います。それに彫る速さ、深さを考慮して、流れるような美しい線を生み出すのです。木版画を彫ることで作品の鑑賞と同時に作家の工程やご苦労の技をも自分のことのように思い浮かべ楽しんでいます。



沖縄シリーズ 151 作　**木の葉・魚紋大壺**　2000. 11. 27

この版画は、お正月の催しや、大きな会場での式典で豪勢に花や松を生けて飾る壺です。真中に魚紋、四隅に菊花を配し、その外側に木の葉紋を彫っています。上部に格子模様とカトレア、下部には蓮華紋、更に底に近いところに細かな飛びカンナ紋を丁寧に彫っています。なんと贅沢な大壺でしょう。作者は読谷村座喜味にお住まいの金城敏勝さんです。

沖縄シリーズ 248 作　**盛上龍頭帆船大壺**　2003. 09. 11

この大壺は糸満市にある（株）朝日陶芸さんの円形ドーム型の大きな売店に展示販売されていました。沖縄の伝統工芸品（陶芸品、ガラス工芸品、琉球漆器、紅型染め、沖縄の織物など）が広い店内に整然と並べられています。この立派な壺は高さ 70cm 位。壺の下地は薄いエンジ色で、無数の凹穴を施して微妙な光の反射、陰影を作り出しています。中央には帆を一杯広げ、荒海を突っ走る“龍頭帆船”を描き、波紋も大きく力強いです。島国である沖縄の商人は、台湾やフィリッピンはもとより、遠く東南アジアの諸国とも交易したと言われています。大壺には、その勇壮な帆船を描いています。2001 年 2 月 10 日に写させていただき、2002 年 12 月 27 日、再度お伺いしました。このような大きな作品は、ホテルや企業のロビー等に飾られ、美術品のように鑑賞されるのが相応しいと思いました。

沖縄シリーズ 18 作　**刷毛目波・魚紋大花瓶**

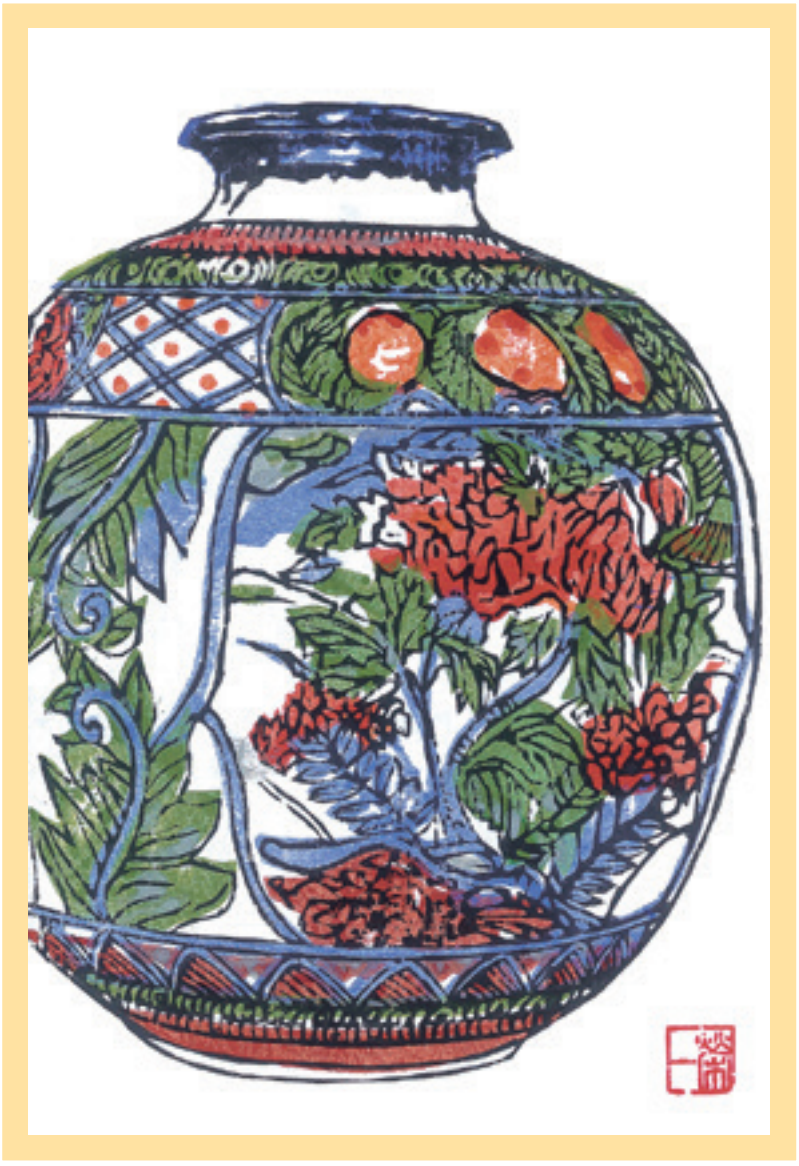
1998. 02. 25

この木版画は金城敏男さんのすばらしい線彫り「刷毛目波・魚紋大花瓶」です。『土と炎 一筋』から彫らせていただきました。濃い藍色の波紋に大きな魚紋が細やかに線彫りされています。茶色の魚紋が明るすぎて作家の思いと違っています。申し訳ありません。沖縄タイムス第２ホールで開催された『金城敏男 作陶展』は、もっと近くに住んでいれば何回も出かけて、細やかな美しい陶器から放出されるエネルギーを少しお裾分けしていただけたのにと残念に思っています。

沖縄シリーズ 201 作　**象嵌線彫蟹・稲・唐草紋大花瓶**

2002. 04. 21

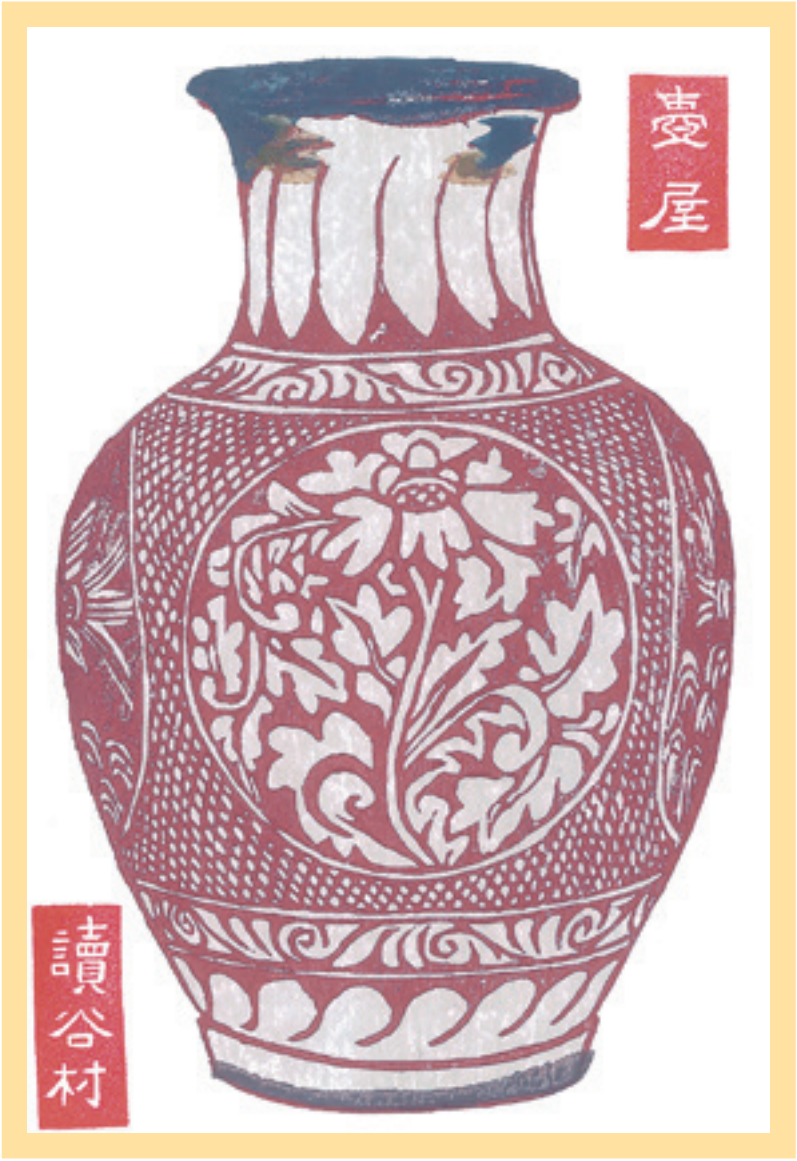
この木版画は、金城敏男さんの「象嵌線彫蟹・稲・唐草紋大花瓶」です。濃紺の下地に薄い黄土色と金色で文様が線彫りで描かれています。この花瓶は豪華ですばらしいです。木版画は細かな線が壊れないようにするため、堅い目の朴の木を使い、摺るときにインクを多く付けないように気をつけました。象嵌の手法で描いたのか、上の皮膜を薄く削り取って先に乗せた釉薬を浮かび上がらせたのかわかりません。［エッカホテル］に陳列されていました。作者に許可を得ていますのでとお断りして写真に撮らせていただきました。他にすばらしい花瓶が２点ありました。後日彫ります。



沖縄シリーズ 203 作　線彫牡丹・唐草紋大花瓶

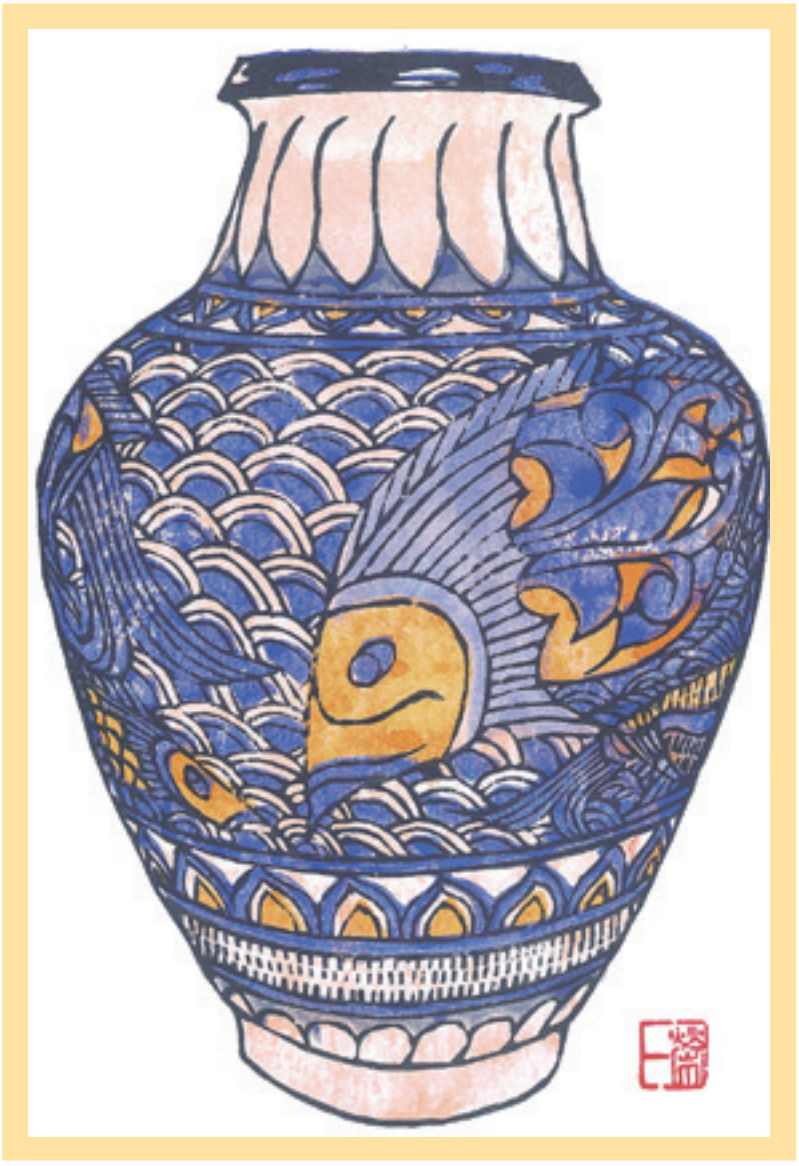
2002. 05. 06

この「線彫牡丹・唐草紋大花瓶」は金城敏男さんの作品です。この大花瓶も那覇市天久の［エッカホテル］に展示されていました。大きなすばらしい花瓶が３点も並んでいるのはとても豪華です。他にもいろいろな作品が並べられており、さながら美術館や陶芸の展覧会のようです。この大花瓶は口元からいっきに大きく膨らみ美しい球形をしています。図柄も上部に幾何学紋とマンゴーのような実のなる樹木、中央に牡丹の花が豪華に描かれています。花の色とマンゴーの実は深い茶色で、葉の緑も渋いグリーンで纏められ、重量感があります。この美しい大きな花瓶を見ていますと敏男さんの土に寄せる思い、力強さ、情熱が伝わってきます。これらの３作品は、金城さんが最近作った中で、一番精神集中して仕上げたそうです。すばらしい作品を撮らせていただいた［エッカホテル］さんに改めてお礼申し上げます。



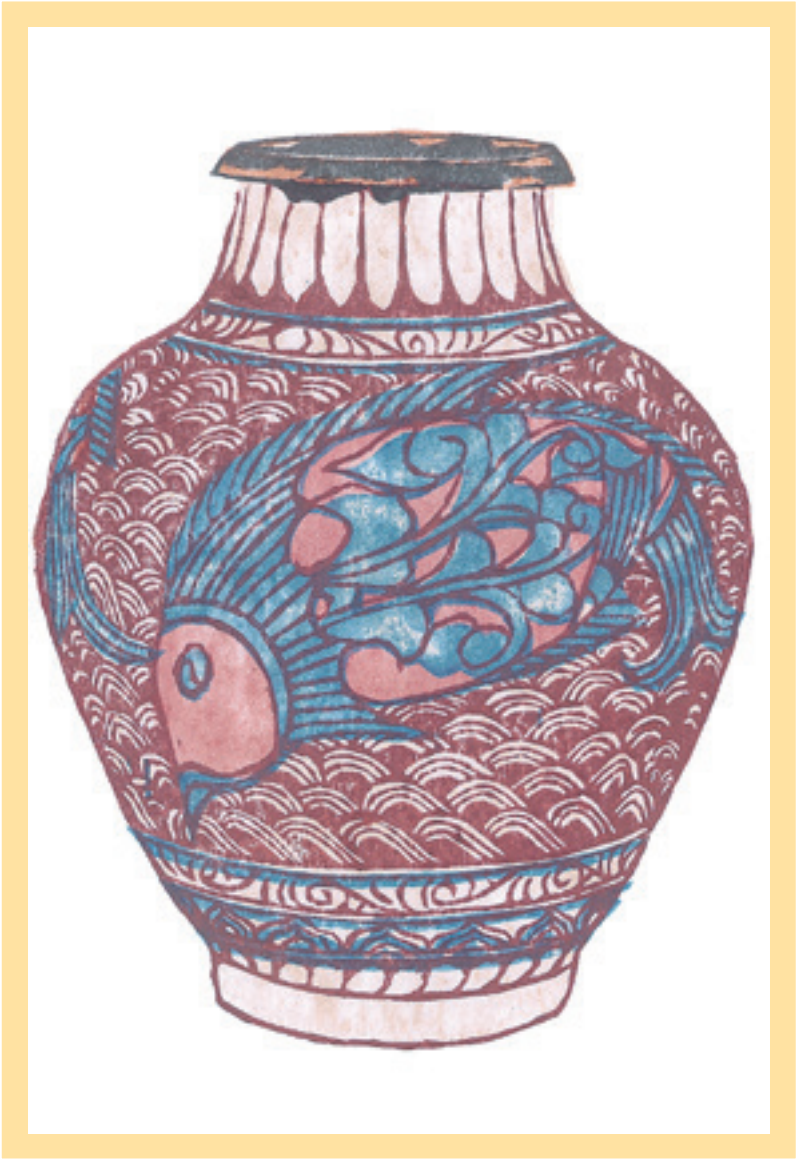
沖縄シリーズ 16 作　**掻落牡丹・魚紋花瓶**　1998. 02. 14

これは金城敏男さんの「掻落牡丹・魚紋花瓶」です。本来は、花生用の花瓶ですがこのままでもすばらしいものです。牡丹と網目文様が美しく、壺の裏側に魚紋が描かれ、尻尾が少しだけ覗いています。敏男さんの作品集『土と炎 一筋』から木版画にさせていただきました。この壺にくまなく茶色の釉薬を被せ、乾かしてから白磁に近い釉薬を載せて網目紋を線彫りし、続いて牡丹紋を残すようにバックを薄く削られたように思います。工程を考えるのも楽しいですが全く見当違いで間違っている場合もあります。



沖縄シリーズ 202 作　**線彫魚・波紋大壺**　2002. 04. 30

この「線彫魚・波紋大壺」は金城敏男さんの作品です。魚紋や波紋は球形の面にとても緻密に線彫りされています。このモチーフは数多く作られていますが、これほど大きな花瓶は見たことがありません。この大壺は、［エッカホテル］に展示販売されていた３点の中の１つです。敏男さんは、お父さんの人間国宝 金城次郎さんの元で早くから修業され、線彫りの技術は、緻密さやバランスの良さで開花したように思っています。私は人間国宝 金城次郎さんの特徴を、①線彫りの強弱（彫りの深さ、線の幅、太さ）を大胆に描いて勢い、速さを表現している。②色彩は濃い焦げ茶や藍色を良く使われているように思っています。他方、長男の敏男さんはバランス感覚を駆使し、彫りは、①均等で線の幅も細く美しいです。②色合いは軽快で黄色と紺色が優しく使われ、仕上がりは明るく優雅です。勝手にすばらしい陶芸家の作品を拝見して比べています。敏男さんの几帳面さや優しさが作品に映し出されているようです。



沖縄シリーズ 13 作　**丸型線彫魚・波紋大壺**　1998. 02. 01

　これは金城敏男さんのすばらしい「丸型線彫魚・波紋大壺」です。この方は陶芸部門の人間国宝　金城次郎さんの御長男です。宜野湾市の島袋さんからいただいた敏男さんの作品集『土と炎　一筋』を参考に沖縄タイムス紙（1997 年 12 月 12 日）に掲載されたものから彫りました。波紋が壺全体を覆い細やかで美しいです。敏男さんは繊細な線彫りを得意とされ、大きな美しい花瓶や壺を作られています。

沖縄シリーズ 32 作　**イッチン魚紋長壺**　　1998. 05. 10

この木版画は、金城敏男作品集『土と炎　一筋』より版にさせていただいた「イッチン魚紋長壺」です。直径 14 ㎝、高さが 35 ㎝と細長い壺で中央に下向きの魚紋が描かれています。釉薬の入った鹿皮の袋から細い管を筆に見立てて描いた魚紋は壺のキャンバスから跳び出てくるような勢いです。鱗の鋭さはイッチンで乗せられた白い釉薬を鑿で削り落とすことによって冴え、茶色の素地を生かせています。

沖縄シリーズ 85 作　**線彫魚・波紋長四角壺**　1999. 05. 23

この版画は金城敏男さんの「線彫魚・波紋長四角壺」です。美しい魚紋とバックの藍色の波紋がすっきりととても美しく、壺も肉厚で重量感があります。壺屋通りの［カカズ人形・陶器店］に飾られていたものです。賀数（カカズ）さんは、金城さんのすばらしい作品を展示されています。敏男さんは人間国宝　金城次郎さんの片腕として活躍されてきましたので、線彫りの技はすばらしいです。

沖縄シリーズ25作　**イッチン魚紋抱瓶**　1998.04.05

この木版画は金城敏男さんの「イッチン魚紋抱瓶」です。焦げ茶色の釉薬を全面に掛けて乾燥させた後、白い釉薬を絞り出しながら描かれた魚紋が３匹、顔を下に向けて並んでいます。両端にはそれぞれ縦縞のラインが引かれ、その外側に唐草紋が描かれています。光の関係で濃い茶色が様ざまに変化しすばらしいです。『土と炎　一筋』の金城敏男作品集に掲載されています。“イッチン”という言葉は初めてでないのに思い出せず、一般の辞書や沖縄語辞典を引いても見つかりません。大阪天王寺の骨董店で訊ねてもわからないとのこと。念のために引いた陶芸辞典に出ていて思い出しました。1997年９月26日、読谷村立美術館で開催された『人間国宝　金城次郎展』で99点の陶器と“イッチン”の大事な道具が陳列されていました。鹿皮の袋に先端が細くなった金属の細い管を紐で括りセットし、袋の中に釉薬を入れて絞り出しながら描く道具です。押し出された釉薬は多少盛り上がり立体感が現れます。言葉の響きも軽やかで、木版画にすることによって忘れられない言葉となりました。

沖縄シリーズ 30 作　**線彫魚紋抱瓶**　1998. 05. 03

この木版画は金城敏男作品集『土と炎 一筋』に掲載されていた「線彫魚紋抱瓶」です。全体の素地はもっと白っぽい釉薬です。この写真は、工房の入口にある乾燥台に置いて、近代美術の写真家 島袋俊哉さんが現場で撮影されたようです。大きいほうの口はグリーンとブルーの混じったような釉薬を使い、注ぎ口は淡い色で軽く仕上げています。洗練された線彫りのラインに敏男さんの実直で穏やかな性格が表れています。

沖縄シリーズ 67 作　**線彫海老・魚紋抱瓶**　1999. 01. 27

これは 1998 年 7 月 23 日、近鉄百貨店で開催された『ミニ沖縄博』で、那覇市壺屋通りの［まじる商店］さんが展示された金城敏男さんの「線彫海老・魚紋抱瓶」です。魚紋はとてもすっきりしています。紐掛け部分に“襷紋”が入り珍しく、この“襷紋”を魚網と見ると海老や魚が網の中に捕えられているようです。作者がどのようなつもりで描いているのかはわかりませんが、作者の想いと購入者の見方が異なるのもおもしろいものです。

沖縄シリーズ 22 作　**魚紋鉢**　1998. 03. 18

この木版画は金城敏男さんの「魚紋鉢」です。『土と炎 一筋』に掲載されている大きな鉢です。黄土地に薄い茶を混ぜたような下地に、魚が 2 匹渋い橙と藍色で描かれています。鉢の高さは 11. 5 ㎝、直径は 31. 5 ㎝もあります。鉢の縁には線彫りで細やかな唐草文様が施され大変豪華です。魚紋の魚は 2 匹ともお腹が膨らみおめでたいです。お菓子や果物を盛り付けると映えるでしょう。お店などの飾りとして柱に立てかけてもすばらしいです。

沖縄シリーズ23作　**巴魚紋鉢**　1998.03.24

この木版画は金城敏男さんの線彫り「巴魚紋鉢」です。『土と炎　一筋』に掲載されていたものを彫らせていただきました。鉢全体に渋い色の黄土色をかけて真中に巴紋を描き、その外側に魚紋と網目紋を交互に配置しています。描かれている魚の下地は赤、藍や黄土色を使って変化をつけて、華やかです。高さが6㎝、直径は19㎝の大きさの鉢です。

沖縄シリーズ 29 作　**唐草・魚紋鉢**　1998. 04. 24

これは金城敏男さんの美しい「唐草・魚紋鉢」です。作品集『土と炎　一筋』から版にさせていただきました。鉢はお皿より深さがあり、水を含む食材を入れてもこぼれません。皿と鉢は見分けが簡単ですが、花瓶と壺の区別は難しく、違いをどこで見分ければいいのか判りません。この鉢は真中に窓絵のような魚紋を配し、その周りに唐草紋を巡らせています。高さ 6. 5 ㎝、直径 21. 5 ㎝あります。

沖縄シリーズ 17 作　**線彫海老・魚紋大皿**　1998. 02. 19

この木版画は金城敏男さんの「線彫海老・魚紋大皿」です。３匹の魚が海老を真中にして巴紋を描いています。『土と炎　一筋』の写真ではもう少し暗い色をしています。バックの素地はねずみ色した肌色に近く、海老と魚紋の茶色は、私の版画では明るすぎます。実際の色はもっと濃い茶色です。まるで、敏男さんの知らないところで、私が木版画で１枚別の皿を作成してしまったようです。

沖縄シリーズ 33 作　**波・唐草・魚紋大皿**　1998. 05. 16

これは私の大先輩、南風原町の中村高雄さんからいただいた金城敏男さんの作品集『土と炎 一筋』という小冊子の表紙を飾った「波・唐草・魚紋大皿」です。沖縄タイムス社の主催ですばらしい個展が開催されました。その展覧会に発行されたのがこの冊子です。中村さんはこの個展をご覧になってあらためて「良かった」と郷里の“壺屋焼”に感動されたそうです。「なるほど、白柳さんが追い求めるのもわかる」と言っていました。沖縄の美しい海原を輝く黄金色で表現し、波紋と無数の気泡の中に、飛び跳ねる大きな魚紋を描いています。そして外側に２重の飛びカンナ紋を巡らせ、その間に蔦状の唐草紋を飾っています。とても華やかですばらしい作品です。後日お会いしたとき、敏男さんから「このお皿は私の作品を蒐集されている横浜の方が購入された」と伺いました。手放すのはさぞ寂しかっただろうと思いました。もし残しておられたら、拝見させていただけたのにと思うと、残念です。

沖縄シリーズ 31 作　**飴釉線彫魚紋大皿**　1998. 05. 06

この木版画は金城敏男さんの「飴釉線彫魚紋大皿」です。つるつるとした美しい茶色の“どんぐり飴”の素地、真中に近いところは“那智黒”の飴のように黒く輝いています。私の版は何と力がないのでしょう。すばらしい色が出せなくて申し訳ありません。皿の中央に２匹の魚が斜めに交差した姿が線彫りされています。横に行儀よく並んでいる構図より、勢いのあるすばらしい大皿です。金城敏男作品集『土と炎 一筋』より版にさせていただきました。

沖縄シリーズ 24 作　**呉須釉魚紋抜絵大皿**　1998. 03. 29

　これは金城敏男さんの「呉須釉魚紋抜絵大皿」です。『土と炎一筋』に掲載されていた大皿で、水族館の大きな水槽の中で泳いでいるようです。大皿に薄茶の釉薬を掛けて乾燥させた後、更に藍色の釉薬を全面に掛け、乾いた後に藍色の釉薬を薄く削り取って抜き取るのでしょうか。木版画に彫るのは、細やかな技術が要求されるので気が抜けません。愉快に泳ぐ 20 匹の鱗の文様は、各々変化していますので眺めていると楽しいです。

沖縄シリーズ 28 作　**呉須釉双魚紋抜絵大皿**　1998. 04. 18

この木版画は金城敏男さんの「呉須釉双魚紋抜絵大皿」です。皿には 2 匹の大魚が回転するように描かれ、下の魚鱗は赤貝のような細かい筋が入り、上部の鱗は美しい唐草紋です。皿や花瓶などに描かれる魚紋はバラエティに富んでいます。島の周りは海洋で、食生活は豊富な海の幸“魚”が並べられ、感謝をこめていただいてきたことでしょう。生活に密着した細やかな観察、そして工夫が積み重ねられて生まれてきたように思いました。金城敏男さんの『土と炎　一筋』から版にさせていただきました。

沖縄シリーズ26作　**白化粧流魚紋大皿**　1998.04.10

この木版画は金城敏男さんの「白化粧流魚紋大皿」です。焦げ茶色の素地に白い釉薬をたっぷりと注ぎ流し、その上から３匹のよく太った魚が描かれています。この大皿は高さ11㎝、直径が49.5㎝もあり、ホテルや料理店等のロビーや床の間に飾ればとてもすばらしいと想像しています。金城敏男さんの作品集『土と炎 一筋』に掲載されていました。

沖縄シリーズ 27 作　**象嵌魚紋大皿**　　1998. 04. 14

この木版画は金城敏男さんの豪華な「象嵌魚紋大皿」です。“象嵌”という手法は、素地を彫り削ってその溝に別の釉薬を埋め込み焼き上げます。木材で作られたお盆や衝立等に、真鍮や光沢のある貝殻を埋め込んだ高級品を見かけます。私の家に、妻が結婚する前に購入した東南アジアで作られた長四角形の象嵌のお盆があります。勤めていた給料の 1 ヶ月分をはたいて買ったようで、真鍮の細い線が埋め込まれ、美しい唐草模様が描かれています。この大皿は薄い焦げ茶色の素地を線彫りし、その中に堅い目の白い釉薬を丁寧に埋め込み焼き上げたようです。高さ 11 ㎝、直径 50 ㎝もある大皿に 2 種類のすばらしい魚紋が枠一杯に描かれています。金城敏男作品集『土と炎 一筋』から版にさせていただきました。

沖縄シリーズ 12 作　**丸型海老・魚紋皿**　1998. 01. 23

この木版画は金城敏男さんの「丸型海老・魚紋皿」です。沖縄県島尻郡南風原町の同窓生 中村高雄さんが、沖縄タイムス社のホールで開催された『土と炎 一筋』金城敏男作品集のパンフと、購入したこのお皿を送ってくれました。沖縄では読谷村立美術館、嘉手納飛行場の見える丘、南風原町の琉球絣事業協同組合や首里城など、甥の大城義広さんの車で案内していただきました。お皿の下地は淡い青白色で、海老と魚紋が交互に２匹づつ巡っています。真中に蓮華文様を描き優雅です。中村さんは私達の影響で故郷の“壺屋焼”の美しさにあらためて関心を深めたと言われました。とても嬉しいことです。

沖縄シリーズ 21 作　**呉須釉線彫魚紋皿**　1998. 03. 14

この木版画は金城敏男さんの「呉須釉線彫魚紋皿」です。“呉須釉”という言葉を辞書で引くと磁器の染付けに使う酸化コバルトを主成分にした釉薬のことで、色は藍色、もしくは黒っぽい藍色に発色するとのことです。大皿に白の釉薬を全面に引き、乾かした後に呉須釉薬を掛け、その後線彫りすると、先に掛けた白い釉薬の地肌が現れます。別の方法は、始めに藍の釉薬を全面にかけて、魚紋や縁の唐草紋を線彫りし、その彫られて凹んだ中へ固くした釉薬を摺り込みます。このようなことが出来るのか、どんな方法が採られたのかは判りません。素人が作陶家の作業工程を想像して楽しんでいます。

沖縄シリーズ 15 作　**泰山不動・魚紋皿**　1998. 02. 10

　このすばらしいお皿は、金城敏男さんの作品です。南風原町の中村高雄さんから送っていただいた沖縄タイムス紙（1997 年 12 月 12 日）の『土と炎　一筋』の『金城敏男作陶展』の案内記事から木版画にさせていただきました。白磁の素地に“泰山不動”と濃い藍色の釉薬で筆書きされ、峰雲という署名がされています。真中に細やかな線彫りの厳しい顔の魚紋が描かれています。

沖縄シリーズ 91 作　**線彫巴魚紋皿**　1999. 06. 20

　これは金城敏男さんの３匹の魚を巴紋として線彫りしたお皿です。細やかに線彫りされた魚の鱗紋がそれぞれ ①丸い形の真中に丸の班 ②鱗の後ろに５、６本の筋 ③側線に当たる所に太いラインを入れ、そのラインの上下に鱗と変化をつけています。作陶家は模様一つ描くにしても１匹、２匹、３匹と数が増えるとそれに合わせていろいろ工夫し、面白みを出すのですね。

沖縄シリーズ19作　**唐草紋７寸皿**　1998.03.05

この木版画は金城敏男さんの「唐草紋７寸皿」です。『土と炎　一筋』から彫らせていただきました。皿の大きさは高さ4.3㎝、直径21㎝の黄土色を下地にした美しいお皿です。真中の底部に蓮華文様が橙と藍色で描かれ、少し空間を持たせて、周りに唐草紋がぎっしりと線彫りされています。外側の枠には三角形の幾何学文様が蓮華文様と同じ色を使って巡らされています。線彫りも少し太めで力強くどっしりとしています。エキゾチックな感じのするお皿です。

沖縄シリーズ 20 作　**唐草・魚紋陶板　方向①**

1998. 03. 02

この木版画は金城敏男さんの豪華な「唐草・魚紋陶板」です。『土と炎　一筋』の作品集から彫らせていただきました。線彫りの細やかさや色具合が複雑なため、私にとって荷が重過ぎると、彫るのをためらい後回しにしていました。しかし、次から次へ難しい題材が飛び込んでくるのを逃げていては、木版画が仕上がりません。「難しくても、がむしゃらに彫って挑戦する気持ちを持とう」と自分に言い聞かせて彫り始めました。後で四隅の唐草紋の花が 4 個ともカットされていることに気が付きました。次回、この版を 45 度回転させて上下に花模様が入るよう彫ることにしました。次は躊躇しないで彫れます。

沖縄シリーズ 74 作　**唐草・魚紋陶板　方向②**

1999. 03. 10

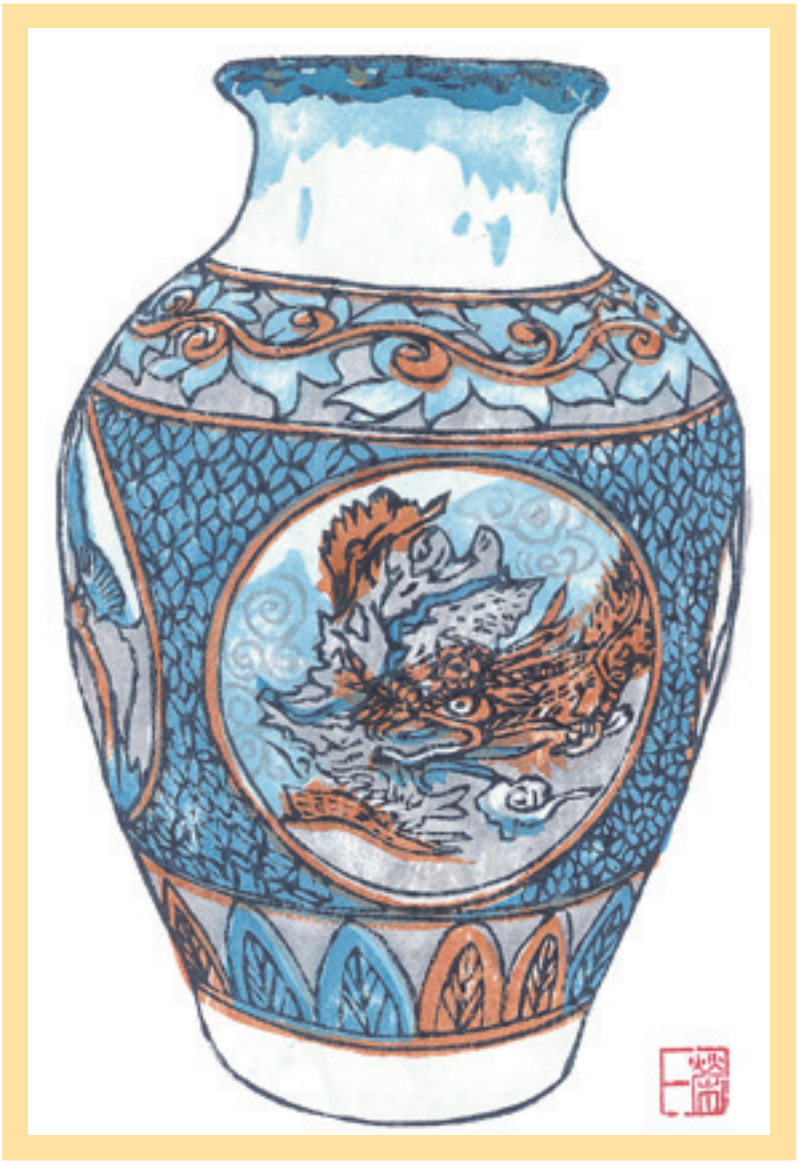
これは、金城敏男さんの「唐草・魚紋陶板」です。前回この陶版を木版画にしたとき、美しい魚紋に気を取られ、ハガキ版に入るように両端をカットして彫りました。必然的に四隅にある唐草の花紋が脱落してしまいました。今回は陶版を斜めに配置することによって花紋を彫ることができました。真四角や丸の物はどうしてもハガキサイズに収め難いものです。しかし、縮小するか両端または片方を削ると収まるのですが、縮小したことにより、ハガキの上下、または左右に余白が生まれ、バランスがよくありません。丸い壺やお皿等は止む無くハガキ版に合わせて両端または片側を割愛しています。

沖縄シリーズ 34 作　**魚紋陶板**　1998. 05. 22

この木版画は金城敏男さんの真四角「魚紋陶板」です。白い釉薬の上から陶板一杯に、２匹の魚紋が円形に収まるように線彫りで描かれています。上の魚の鱗紋は赤貝の貝殻紋、下は鱗の真中に小さな点が描かれています。読谷村立美術館で毎年開催される『読谷（やちむん）展』に出品されたものです。これは 1998 年の白黒版の作品集から勝手に色合いを想像し、版にしました。小冊子は同村立美術館の館長宮城元信さんからいただきました。

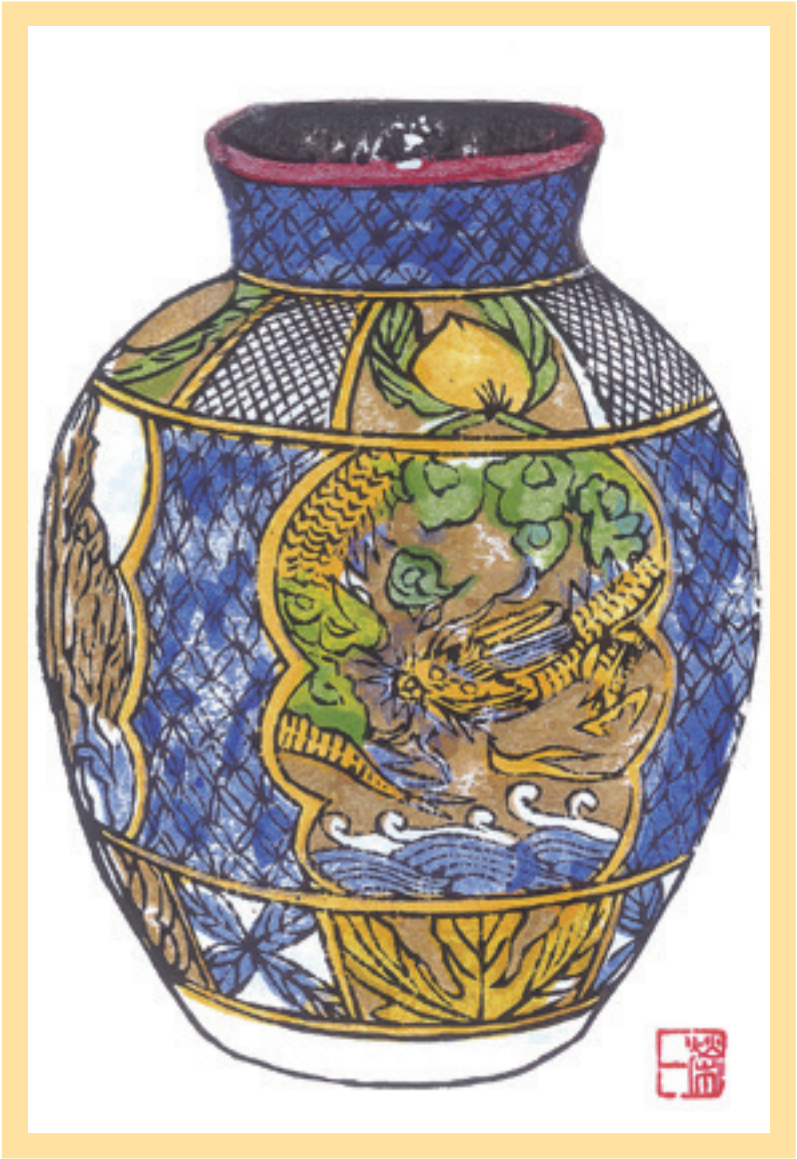
沖縄シリーズ233作　唐草紋花瓶
2003.04.13

この木版画は、小橋川永勝さんの美しい「唐草紋花瓶」です。形状はシンプルですが、すばらしいコバルト色の唐草紋が中央に描かれています。太郎さんのお店で拝見しましたので太郎さんの作品と思っていました。永勝さんは太郎さんの兄さんです。焦げ茶を下地にしていて暗いのですが、唐草紋の周りを削り取ってその上にガラス質の釉薬を乗せて光を取り入れています。永勝さんの作品は重厚で力強く、眺めているとエネルギーをいただけます。木版画を彫ろうとする力が湧いてきます。



沖縄シリーズ 87 作　**龍紋大花瓶**　1999. 06. 05

　このすばらしい花瓶は、小橋川永弘さんの「龍紋大花瓶」です。木の葉紋の細かさに彫刻刀を握れず後回しにしていました。私の場合、毎日、彫りたい写真を見えるところに置いて眺めていると、彫ろうとする意欲が湧いてきます。永弘さんは、小橋川太郎さんのお父さんです。太郎さんへお送りすると、太郎さんのお母さんがこの版画を懐かしく思われ大変喜んでくれたそうです。



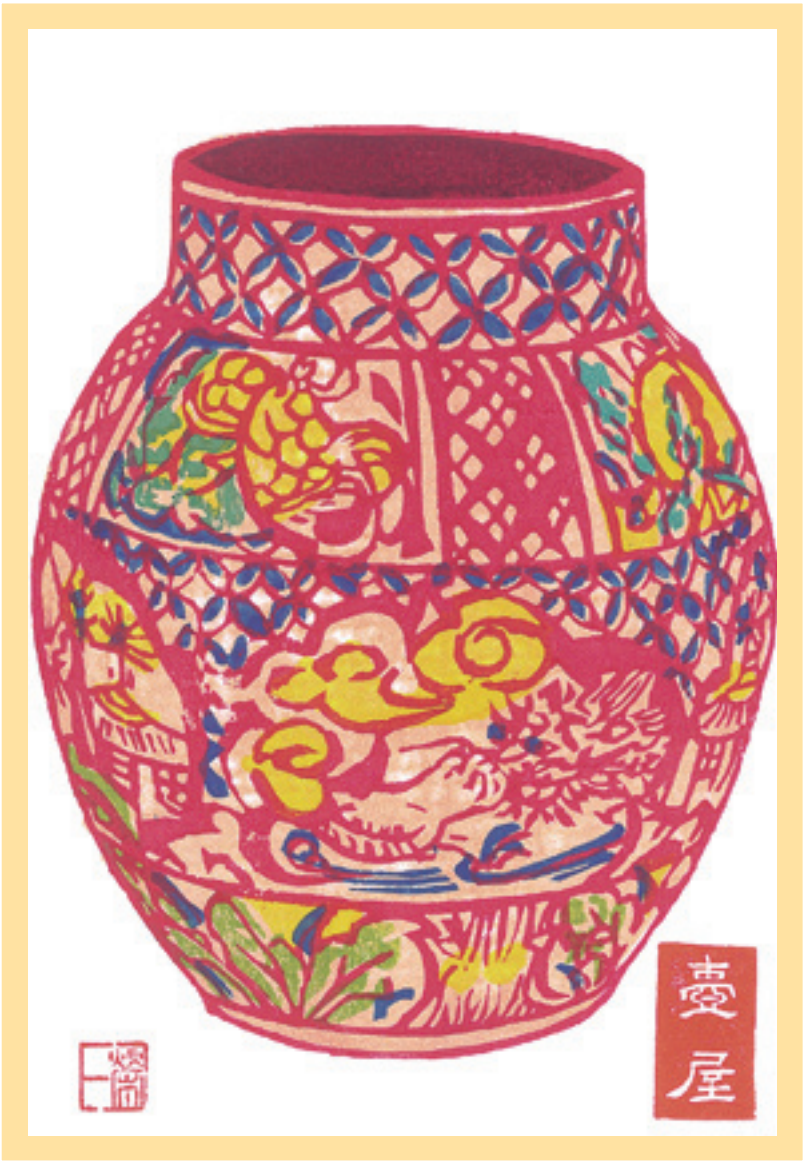
沖縄シリーズ 207 作　**龍紋大花瓶**　　2002. 06. 15

このすばらしい線彫り「龍紋大花瓶」は、小橋川永弘さんの作品です。壺屋通りの［つぼや工藝］の藤崎出さんに見せていただきました。高さ 50 ㎝位の豪華な花瓶です。出さんは永弘さんのお孫さん。叔父さんの小橋川太郎さんの陶芸作品と、お父さんの藤崎真さんの［藤崎紅型工房］で作られた紅型を主として販売されています。藤崎真さんは藍色をメインとした紅型を作られ、暖簾や額入れされた布はとても上品です。これは永弘さんがお嬢さんの結婚をお祝いして特別に作られた花瓶で、裏側にその年月日が彫りこまれています。なんと心のこもったすばらしい贈り物でしょう。那覇市伝統工芸館や美術館等の施設で『小橋川永弘作品展』を開催していただければ嬉しいですが。日取り等が合わず、都合で沖縄へ行けなかったらせめて作品集を手元に置き、じっくり鑑賞したいです。

沖縄シリーズ 221 作　双耳付緑釉掻落唐草紋壺

2002. 10. 27

このすばらしい「双耳付緑釉掻落唐草紋壺」は小橋川永弘さんの作品です。壺屋通りの［つぼや工藝］（藤崎出さんのお店）で見せていただきました。美しい唐草紋の藍、濃緑、黄、黒色が何ともいえない優雅なハーモニーを奏でています。壺の高さは 45 ㎝位です。出さんは永弘さんのお孫さんです。この作品は非売品で地下のギャラリーに飾られています。１階には永弘さんのご子息 小橋川太郎さんの優雅な作品、その隣に上江洲茂生さんのすばらしい陶芸作品も並んでいます。出さんのお父さんは、著名な紅型作家で［藤崎紅型工房］を主宰されています。出さんに「陶芸や紅型をしないのですか」と尋ねますと「どちらも難しいし、私には続けていける素質がない」と謙遜し、ニコニコしながら答えてくれました。私は、遠慮しないで教えていただけるすばらしい２人の師匠を持っておられる出さんを羨ましく思いました。とても親切で優しい方です。

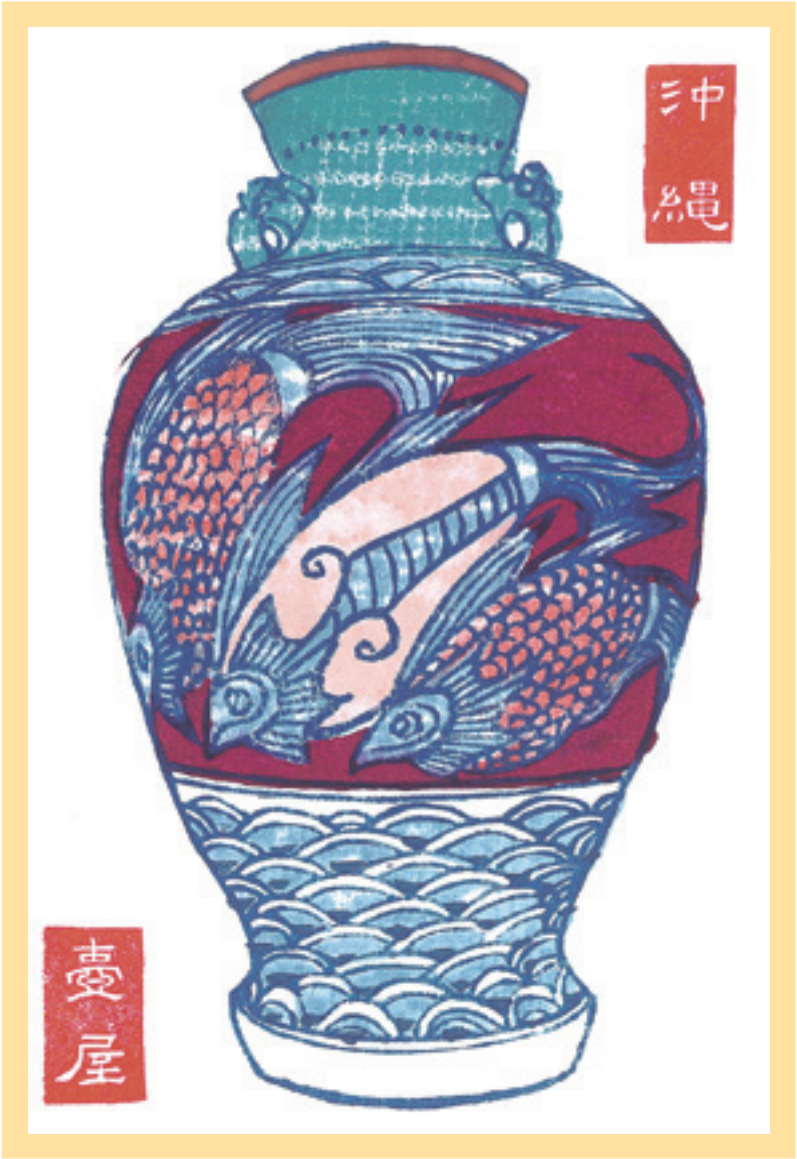


沖縄シリーズ 50 作　**赤絵壺**　1998. 08. 20

この版画は小橋川永昌さんの「赤絵壺」です。一時期この赤絵の陶磁器が作られず姿を消していました。小橋川さんが研究に研究を重ねてその釉薬を見つけ出しました。その功績は絶大で、沖縄の陶芸家の誰もが感謝しています。この赤絵壺は代表的な作品で、沖縄の情熱と温かな心を表現しているように思えます。これは淡交社が刊行した『カラー日本のやきもの 第１巻 沖縄』に掲載されていた写真から版にさせていただきました。釉薬を含ませた筆で曲線や線を描いていくことは大変難しいことです。それぞれの枠に収めるバランス感覚も必要です。木版の色合わせをしていて陶芸家のすばらしい技を想像しました。

沖縄シリーズ106作　**赤絵牡丹崩し紋大皿**　1999.09.07

これは「赤絵牡丹崩し紋大皿」です。那覇市伝統工芸館に展示されている小橋川永昌さんの作品です。牡丹の花びらは大胆に描き、葉のグリーンもバランスを考えて散りばめ、周りには飛びカンナ紋を配しています。お皿は使うものですが、あまりにもすばらしく、みごとなので料理を載せるのも遠慮してしまいそうです。赤い色が美しいのでお祝い事のお席に飾られると映えます。



沖縄シリーズ１作　**赤絵魚・波紋大壺**　　1997.10.09

1997 年７月、大阪鶴見緑地で開催された『全国陶器市』で沖縄の“壺屋焼”に魅せられ感動しました。そこに出店されていた［まじる商店］さんの若主人に勧められて、同年９月 24 から 26 日まで妻と２人で沖縄へ壺屋焼を見に出かけました。大阪外国語大学短期大学部（夜間３年制）の同窓生に 33 年ぶりに再会するのも楽しみでした。初日、那覇市伝統工芸館を訪ね、陶器の町、壺屋通りを歩きました。小橋川清正さんのお店で渋い濃い赤を使った花瓶、壺、抱瓶（だちびん）、お皿、お椀、湯呑等を見て驚きました。そこで、何とか手の届く価格の湯呑、お皿、菓子盆を買い求め、すばらしい作品を何点か写真に撮らせていただきました。そして、初めて木版画にしたのがこの「赤絵魚・波紋大壺」です。これまで、仏像や神社仏閣等を木版画にしていましたので不安でしたが、何とか見ていただけるものに仕上がりました。

沖縄シリーズ５作　**赤絵丸型魚紋壺**　1997.11.14

　このすばらしい「赤絵丸型魚紋壺」は小橋川清正さんの作品です。大きな壺は肉厚で重いです。沖縄の土は火力に弱いので薄手で焼くのは難しく、大きな陶器は肉厚にするそうです。薄手で作ると火に遭って形が崩れ、歪んだりするからです。この壺はどっしりとした質量感が伝わり、心が和みます。線彫りのラインは太く、小指の先で押さえつけたかのように見えます。

沖縄シリーズ６作　**赤絵丸型海老・魚紋壺**　1997. 11. 22

この木版画は美しい波紋の上に交差した海老・魚紋が、画面一杯に繊細なラインで描かれています。小橋川清正さんの優雅な作品です。この壺を眺めていると時間がゆっくり過ぎて、慌しい生活に潤いをもたらせてくれます。濃い赤と薄いブルーの色合いが良いハーモニーを奏で、脳に安らぎを与えてくれます。壺の形状もどっしりと安定感があります。1998 年の年賀状として親しい方（40 名）に摺りました。一般の年賀は白黒版の円空仏、450 枚発送しました。

沖縄シリーズ８作　**赤絵丸型海老・魚紋壺** 1997. 12. 04

　この木版画は小橋川清正さんの作品です。すばらしい「赤絵丸型海老・魚紋壺」で、１匹に３匹の魚が向き合っています。何か相談事があり話し合いをしているようです。よく眺めると一匹の魚に重なって海老の尻尾が躍り上がって見えます。裏側に回った海老の顔が見えないのは残念です。下部がどっしりとして、安定感があります。

沖縄シリーズ７作　**赤絵瓢箪型海老・魚紋壺**

1997. 11. 28

この木版画は小橋川清正さんの「赤絵瓢箪型海老･魚紋壺」です。真中にくびれがあって、それが瓢箪のようだからこの名が付けられました。この魚紋の上に海老紋を重ねる図柄は清正さんが得意としています。海老紋も爪が大きく“ロブスター”のようです。清正さんの赤はこの色で統一されており、国際通りのお土産店でこの渋い赤い色の陶器を見つけたらこの方の作品です。

沖縄シリーズ９作　**赤絵鶴首魚・唐草紋壺**　1997.12.10

この木版画は小橋川清正さんの「赤絵鶴首魚・唐草紋壺」です。この壺はお店の一番奥にあり、写真に撮るために前のほうへ置き換えていただきました。すらりとした美しい壺です。奥さんが「この壺買ってください」「こんなに形がすらりとして焼き上がるのは大変なのです」「沖縄の土は火に弱いので歪んだり、曲がったりするので難しいです」と説明して下さいました。私は、笑いながら「この壺を購入すると帰りの旅費や他の買い物の費用が足らなくなります」と冗談混じりに答えました。

沖縄シリーズ４作　**赤絵海老・魚紋抱瓶**　1997.11.08

この木版画は小橋川清正さんのすばらしい大きな「赤絵海老・魚紋抱瓶」です。写真を撮らせていただくときとても重く、隣に当てたり落としたりしないようにそっと動かしました。壺屋通りでこの「抱瓶」を見たとき、いったい何に使うのか判らず店主の奥さんに教えていただきました。これは泡盛を入れて持ち運びする“水筒”のような酒瓶だったのです。昔、豪農が馬に乗り、自分の農地を見回りするとき、この酒器を腰に紐で固定し、肩から吊るしてでかけました。そして日陰でちょっと一休みして飲むか、酒盛りをしたのです。子供の頃、遠足のとき持参した“水筒”のようですが、中身は泡盛（高級酒）です。大きさは一般的には大人の片手を広げたより少し大きい位ですが、この作品は、横幅も高さも２回りも大きく、このまま装飾品として飾るか花瓶の代用に利用されるもののようです。

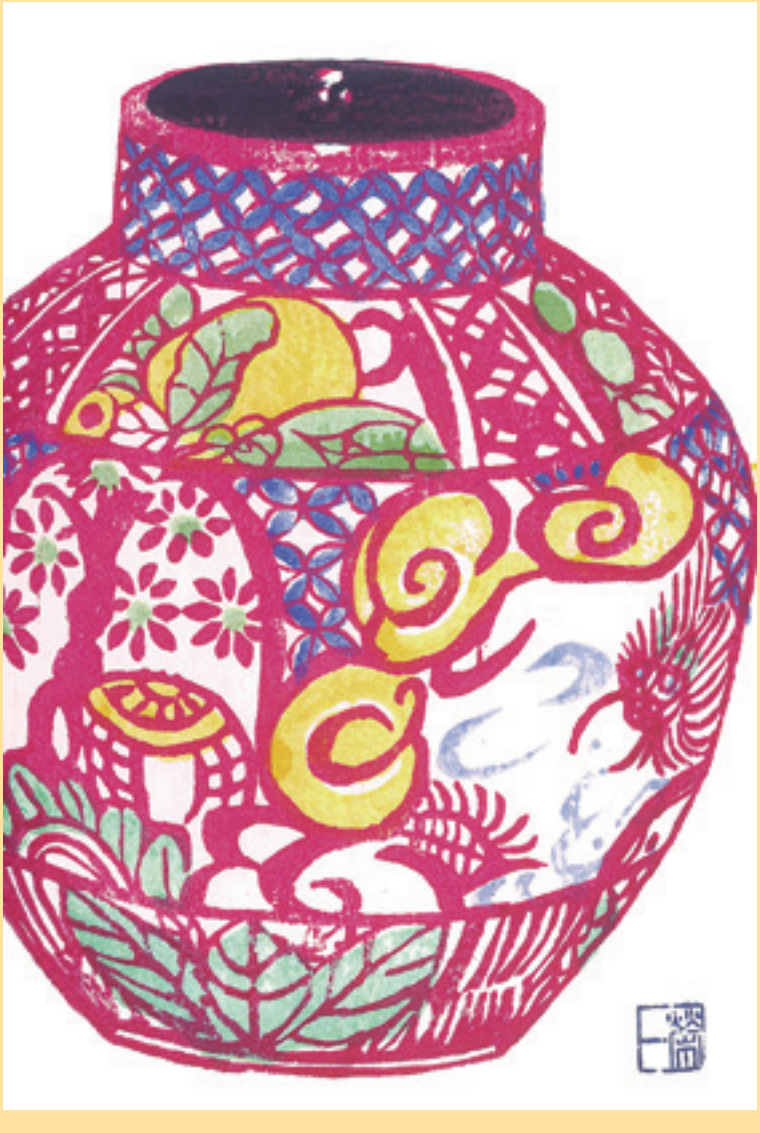
沖縄シリーズ 10 作　**赤絵丸型魚紋透彫菓子皿**

1998. 01. 11

　このお皿は小橋川清正さんの「赤絵丸型魚紋透彫菓子皿」です。直径 21 ㎝の大きさで、果物や菓子を盛り付けるのに適しています。とても淡い黄土色に濃い赤の２種類の魚紋が描かれ、上部のは普通の形でゆったりと泳ぎ、下方は体を丸め顔を逆方向に向けています。これは我が家の本箱に収まり、親しい方をもてなす時に使われています。肉が厚く重いです。

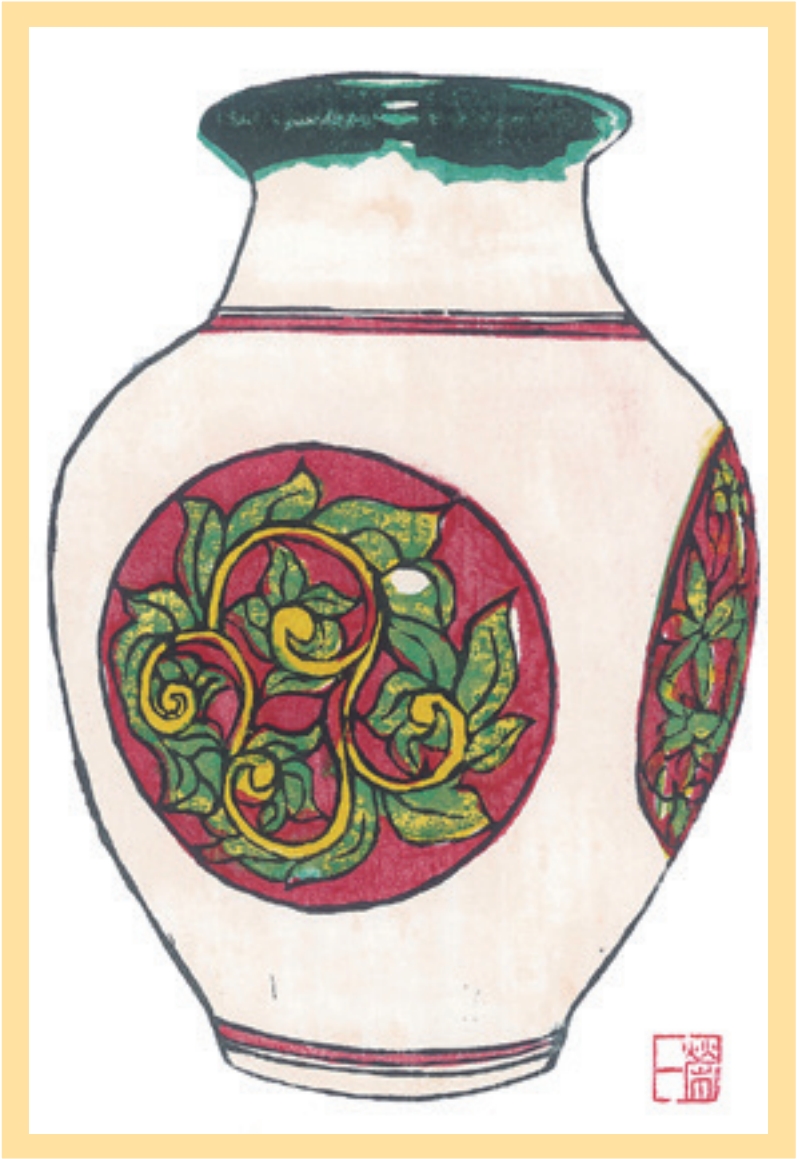
沖縄シリーズ 11 作　**赤絵丸型海老・魚紋皿**　1998. 01. 16

この木版画は小橋川清正さんの「赤絵丸型海老・魚紋皿」です。この皿はとても美しい仕上がりです。濃い赤絵をバックに２匹の魚と海老が重なって描かれています。外側の縁に唐草文様の線引きがされています。この皿より一回り大きな、これもまたすばらしい皿があり、両方を買うかどちらか一方にするか思案し、結局、価格や仕上がり具合を考えて小さい方を選びました。買ったものはゆっくりと版にできますので久しぶりにスケッチし、それを逆転写して彫りました。



沖縄シリーズ192作　**赤絵壺**　2001.12.29

この版画は小橋川ツル子さんのお店に飾られていた赤絵の華やかな壺です。2001年2月、5度目の訪沖で初めて由緒ある［仁王窯］の直売店を訪ねました。これまで壺屋のメイン通りだけを歩いて、間に入る道は全く通ったことがありませんでした。この赤絵の文様は良く見かけます。雲の合間から竜が舞い降り、田舎の茶室のような建物と回りに庭園らしい風景が描かれています。この壺はすばらしく華やかで、花を生けても花が負けてしまいそうです。



沖縄シリーズ 82 作　**赤絵唐草紋大花瓶**　1999. 04. 25

この花瓶は小橋川太郎さんの作品です。白磁に窓のような赤い円形を配し、その中に太郎さんが得意とする美しい唐草紋を描いています。色合いは黄、黄緑、薄いブルーが適度に混ざり合い和やかで温かい。右側に少し覗いている円には“カトレアの花模様”が描かれています。奥さんは色差しを手伝っているようです。ご主人と２人で仕事をしているのでそう数多くできません。「品物は丁寧に仕上げています」と控えめに、ニコニコしながら工房を案内して下さいました。

沖縄シリーズ147作　**赤絵唐草紋丸型花瓶**　2000.10.29

　これは小橋川太郎さんのすばらしい「赤絵唐草紋丸型花瓶」です。この方の赤色はとても優雅で、唐草文様はお皿や各種花瓶に描かれています。奥さんと２人でゆったりと作られていますので、その仕上がりも美しく上品です。球形の花瓶をハガキに収めるため、片側の端をカットしています。知り合いの兵庫県尼崎市の前田さんからは、出来るだけ全体が入るように彫って欲しいと言う要望が届いています。

沖縄シリーズ185作　**赤絵唐草紋鼓型花瓶**　2001.09.15

この木版画は小橋川太郎さんの「赤絵唐草紋鼓型花瓶」です。上下に藍色の横帯を大胆に巡らせ、中央に赤色の下地に黄土色の唐草紋を描いています。太郎さんの唐草紋の色は、黄色に薄いブルーを重ねて美しいハーモニーを奏でています。お酒やウィスキーのブレンドに当たるのでしょうか。この色合いの唐草紋は太郎さんの特徴です。直売店を電話に留守番させてご主人のお手伝いをされている奥さんは、「私のところは家族でゆっくりと作っていますので」とニコニコしながらお客さんに話しています。壺屋通りも年々整備されて美しくなりました。観光客の流れが、国際通りからこの壺屋通りへ増えることを願っています。

沖縄シリーズ 225 作　赤絵瓢箪型草花紋花瓶

2002. 12. 06

この木版画は、小橋川太郎さんの優雅な花瓶です。私が勝手に「赤絵瓢箪型草花紋花瓶」と呼んでいます。時々、太郎さんの奥さんが、「間違っているよ」と訂正してくれます。花瓶に濃い赤の太い帯が２本描かれ、その中に太目の松葉のような模様に黄色の実が稔っています。太郎さんの考案した軽やかな模様で赤、青、黄色の釉薬を穏やかにゆったり使用しています。この花瓶とは別の、瓢箪型のどっしりとした瓶物に酒器の「嘉瓶」（ユシビン）があります。嘉瓶の模様は、その家の注文で描かれ、唐二彩、唐三彩等様ざまで抽象文様が多いです。この花瓶も口元が、もう少し小さければ嘉瓶にも利用できそうです。

沖縄シリーズ 64 作　**赤絵線彫唐草紋壺**　1998. 12. 24

この木版画は、小橋川太郎さんの「赤絵線彫唐草紋壺」です。唐草文様と赤い下地の色は対立することなくうまく溶け合っています。色合いは鮮やか、優雅で気品があります。私の 1999 年の年賀用にさせていただきました。年賀 450 枚の多色摺りは“毎日、150 枚くらいを摺り、乾かしまとめ、そして、450 枚摺り終ると次の板に替えて色を出し、また摺り始める”の繰り返しです。多色摺りになってからは、摺るのに 1 ヶ月間も要します。そうなると摺るのもいろいろ工夫し考えるようになります。ハガキ 24 枚くらい置けるベニヤ板を 4 枚手元において、それに摺っては並べて乾かしていくと、すごく効率が良くて手を休めることなく仕上がるようになりました。

沖縄シリーズ 132 作　**赤絵木の葉紋丸壺**　2000. 06. 14

　これは小橋川太郎さんのすばらしい「赤絵木の葉紋丸壺」です。この壺は赤い色をバックに木の葉紋を黄緑、ピンク、ブルー、グリーンと色とりどりで美しく描き、所々に白抜きの丸い円の中に赤い花びらのような抽象模様が筆描きで描かれています。とても優雅で美しい壺です。丸い形もおおらかで安定感があります。壺屋通りには、誠実で安心できる価格を付けた作陶家の直売店が並んでいます。

沖縄シリーズ 49 作　**赤絵唐草紋抱瓶**　1998. 08. 16

これは小橋川太郎さんの「赤絵唐草紋抱瓶」です。この方は明るい赤色に唐草紋のすばらしい文様を線彫りで描き、花瓶、壺、お皿、鉢、抱瓶等、多種類の陶器を作られ、同じ物を数多く作らないようです。奥さんと２人でこつこつと丁寧に仕上げていますので、作品の品質はすばらしく、むらはありません。作品の価格も誠実ですから私たちも安心して購入できます。沖縄を訪ねるごとにお邪魔しています。この作品は 1998 年 6 月、大阪阪神百貨店で開催された『沖縄の味と技展』で［まじる商店］さんが販売されていたのを版にさせていただいたものです。

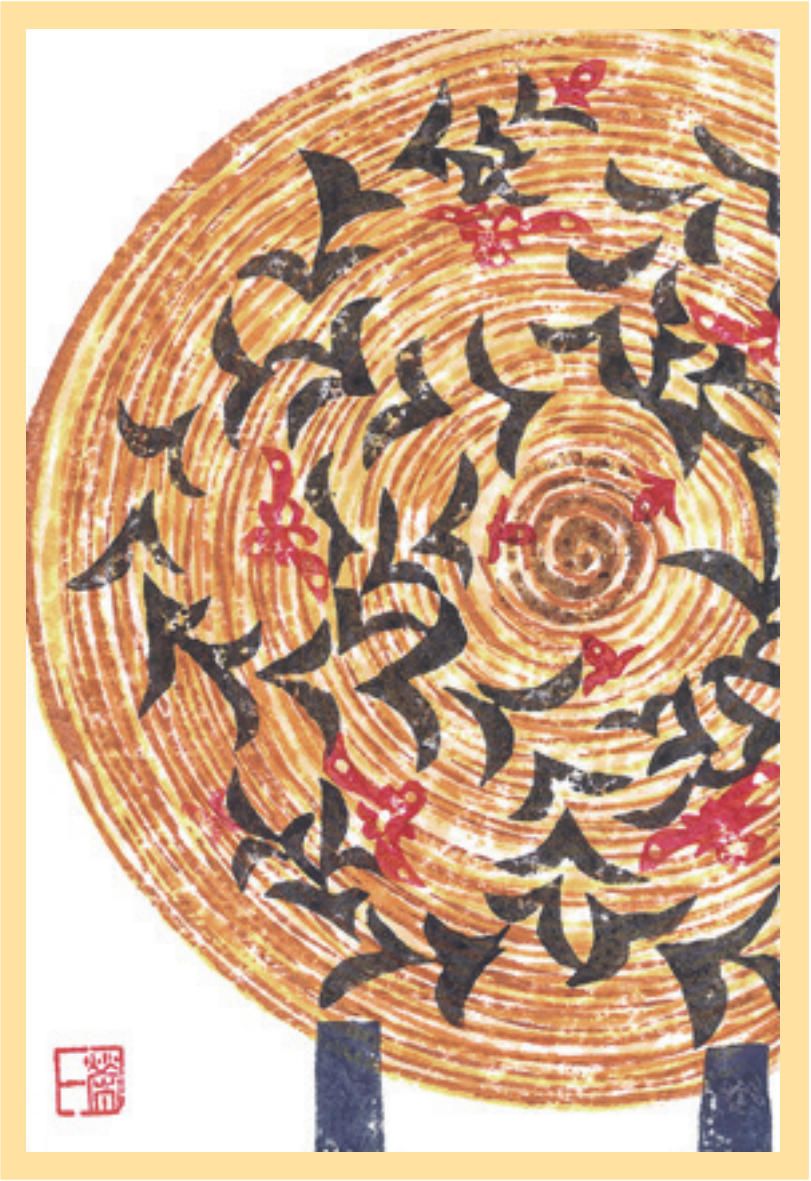
沖縄シリーズ 76 作　赤絵唐草紋抱瓶　1999. 03. 17

これは、小橋川太郎さんの「赤絵唐草紋抱瓶」です。この方は明るい赤に唐草紋のすばらしい文様を線彫りで描いています。同じ作品を数多く作らないので、那覇の壺屋通りの直売店で陳列されているものはそう多くありません。この抱瓶はコバルト色の素地にグリーンの唐草紋、抽象的な赤の花模様が描かれています。1998 年 6 月、大阪阪神百貨店で開催された『沖縄の味と技展』の展示販売品です。この催しでは壺屋焼、琉球ガラス工芸品、紅型染めの布製品、琉球漆器、珊瑚などの美術装飾品と沖縄の名酒　泡盛をはじめ沖縄の食材等が販売されていました。沖縄出身者の多い大阪では、毎年この催しを楽しみにしているそうです。

沖縄シリーズ 86 作　**線彫赤絵唐草紋大深皿**

1999. 05. 29

　これは小橋川太郎さんの「線彫赤絵唐草紋大深皿」です。美しい唐草紋と良心的な価格にひかれて購入しました。お皿の高さが 6.5 ㎝、直径が 27.6 ㎝です。紐を通して壁や柱に吊るせるように裏側に穴が開けられています。割れないように本棚に大切に保管して、取り出しては友達に見てもらっています。赤をバックにした唐草紋の色合いが美しいので、みなさん感動されます。



沖縄シリーズ219作　**赤絵唐草紋大皿**　2002.10.11

この木版画は、小橋川太郎さんの直径 60 ㎝もあろう大きなお皿です。焼き上げる前はこの大きさの 1.2 倍もあり、重くて扱いも大変です。下地は轆轤を回しながら細い刷毛目を薄い茶、黄土、渋い茶色等、釉薬を変えながら何度も回転させています。模様は木の葉とその先端に軽やかな赤い花模様が描かれています。画面全体はもっと黒っぽい落ち着いた色です。沖縄には観光客を迎える多くのホテルが林立しています。そのようなホテルが沖縄の伝統工芸を宣伝し、支援してロビーや陳列ケースに飾ると宿泊客にも喜ばれると思います。売店等で販売されているところもあります。

沖縄シリーズ 223 作　**赤絵円形文様中皿**　　2002. 11. 23

　このすばらしい「赤絵円形文様中皿」は、小橋川太郎さんの作品です。私が勝手に名付けさせていただきました。お皿の中心部に青、茶、ウグイス色の３色の円を２個づつ交互に重ねながら配置しています。余白部にも円形の端が覗いていますが、その効果によって模様の広がりができてゆったりしています。外側の縁は飾り模様をなくしてすっきりと仕上げ、中ほどに１本の赤い線を走らせています。円模様のバックの赤は少し濃い色で、その中に蛍のような黄色の点を散りばめています。この赤い色に黄色の点を散りばめる手法は、お皿や花瓶の模様に良く使われています。とても上品な華やかさが出ています。

沖縄シリーズ230作　**赤絵カトレア紋中皿**　2003.02.08

この美しい「赤絵カトレア紋中皿」は小橋川太郎さんの作品です。お皿の中心と外側に“飛びカンナ紋”を巡らせ、その間に赤い鳥が羽ばたくような、カトレアの美しい花が描かれています。太郎さんの奥さんが丁寧に絵付けされています。細い筆に釉薬を含ませ塗っていくのですが、水の含み具合で滲んだり、擦れたりしないよう細心の注意を払います。お２人で仲良く仕事をされています。太郎さんは伝統ある赤絵の［仁王窯］の流れを引き継いでいます。飛びカンナを打っている名人芸をいつか見せて欲しいと思っていますが、忙しくされている方に勝手なことを頼めません。穏やかな作品は人気があります。

沖縄シリーズ 99 作　**長四角幾何学紋花瓶**　1999. 07. 29

これは小橋川ツル子さんの「長四角幾何学紋花瓶」です。花瓶の正面は繊細な美しい幾何学紋を描き、両端は斜線を組み合わせた模様を線彫りしています。この方は有名な［仁王窯］の３代目です。最近体調を崩されているようで、何度かお伺いしているのですがお会いできていません。早く良くなられて、ゆっくりとすばらしい作品を制作されることを願っています。この版画は首里城内の土産物店で写真に撮らせていただき、彫ったものです。陶芸品コーナーには多くの作品が展示販売されていました。その中で、色合いの美しいスラーとした背の高いこの花瓶が一際目立ちました。

沖縄シリーズ161作　**蓋付緑釉波紋中壺**　2001.04.17

この木版画は小橋川ツル子さんの「蓋付緑釉波紋中壺」です。波紋を幾重にも重ねて上下から巡らせています。濃い緑と焦げ茶の釉薬を重ねたすばらしい色合いの壺です。那覇市伝統工芸館の２階の売店に陳列されていたものを写真に撮らせていただき、版にしました。混ざり合った色を版画にするのは難しく躊躇っていましたが、エイヤーと思い切って彫り、難しい彩色は何度も色だしをしました。作家は有名な［仁王窯］の３代目です。ベンガラ色の赤絵の陶器は数多く作られていますが、この色合いは珍しい作品かと思われます。この壺にはお菓子かお茶の葉を入れるのでしょうか。

沖縄シリーズ 154 作　**赤絵唐草・幾何学紋抱瓶**　2000. 12. 27

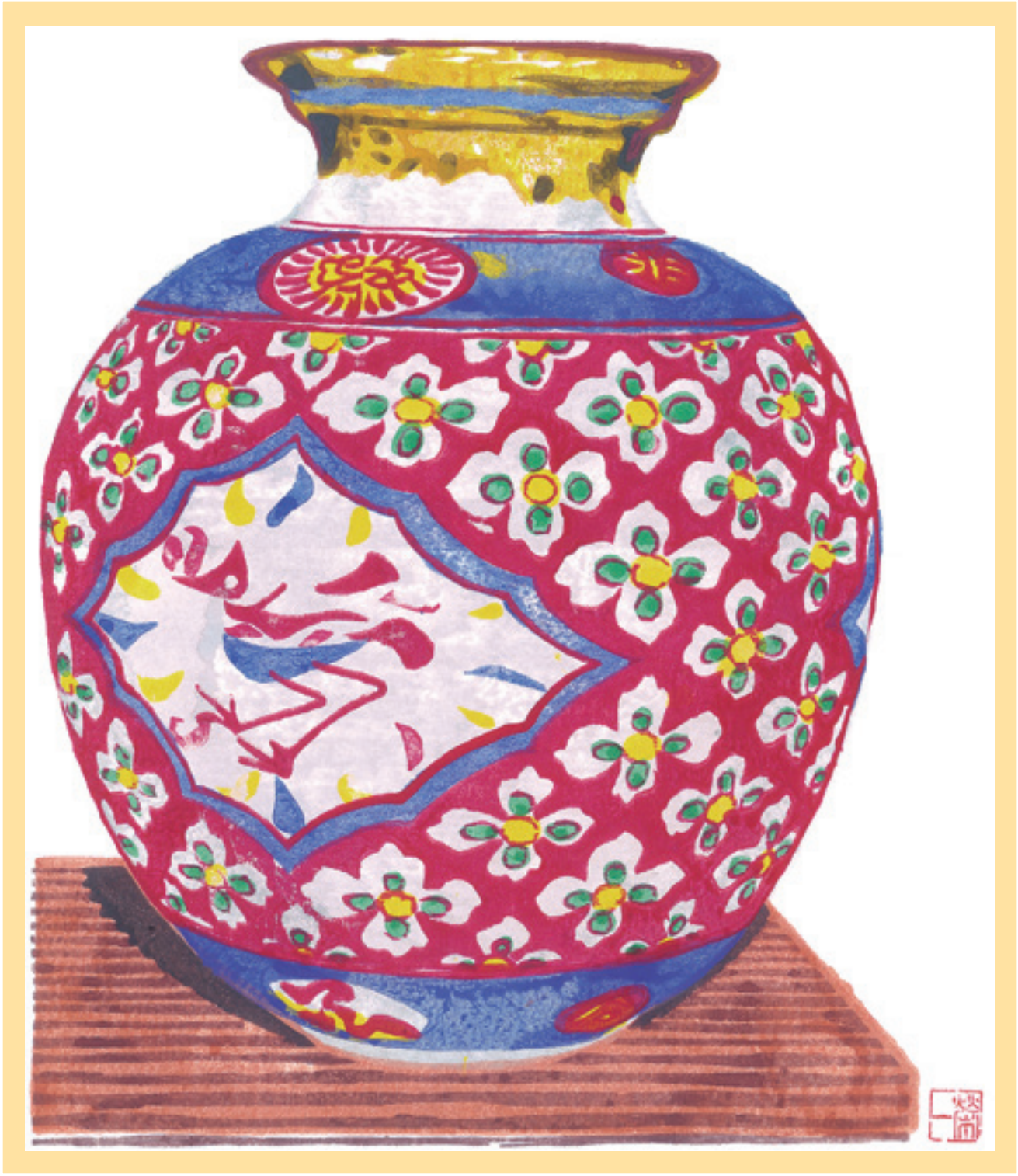
これは小橋川ツル子さんの「赤絵唐草・幾何学紋抱瓶」です。ツル子さんは［仁王窯］の主で、すばらしい赤絵の花瓶、壺、食器（お椀、皿、鉢等）類を多く造られています。軽やかな筆の運びと橙系の赤色に特徴があります。赤色を使わない陶器も作成しておられますが、この抱瓶はその赤がアクセントとして活きています。同じような図柄のよく似た抱瓶も木版画にさせていただきました。これは首里城博物館の売店で写真に撮らせていただいものです。

沖縄シリーズ 195 作　**赤絵幾何学紋抱瓶**　2002. 01. 19

この木版画は［仁王窯］の小橋川ツル子さんの直売店で飾られていた「赤絵幾何学紋抱瓶」です。棒線と三角形を組み合わせて描かれています。ブルーにグリーンを乗せてぼかし、縁取りの赤い色が美しいです。色使いは穏やかで、眺めていますと心が落ち着きます。2001 年 2 月 10 日、直売店の奥の工房では、男性が轆轤を回して花瓶を作っておられました。

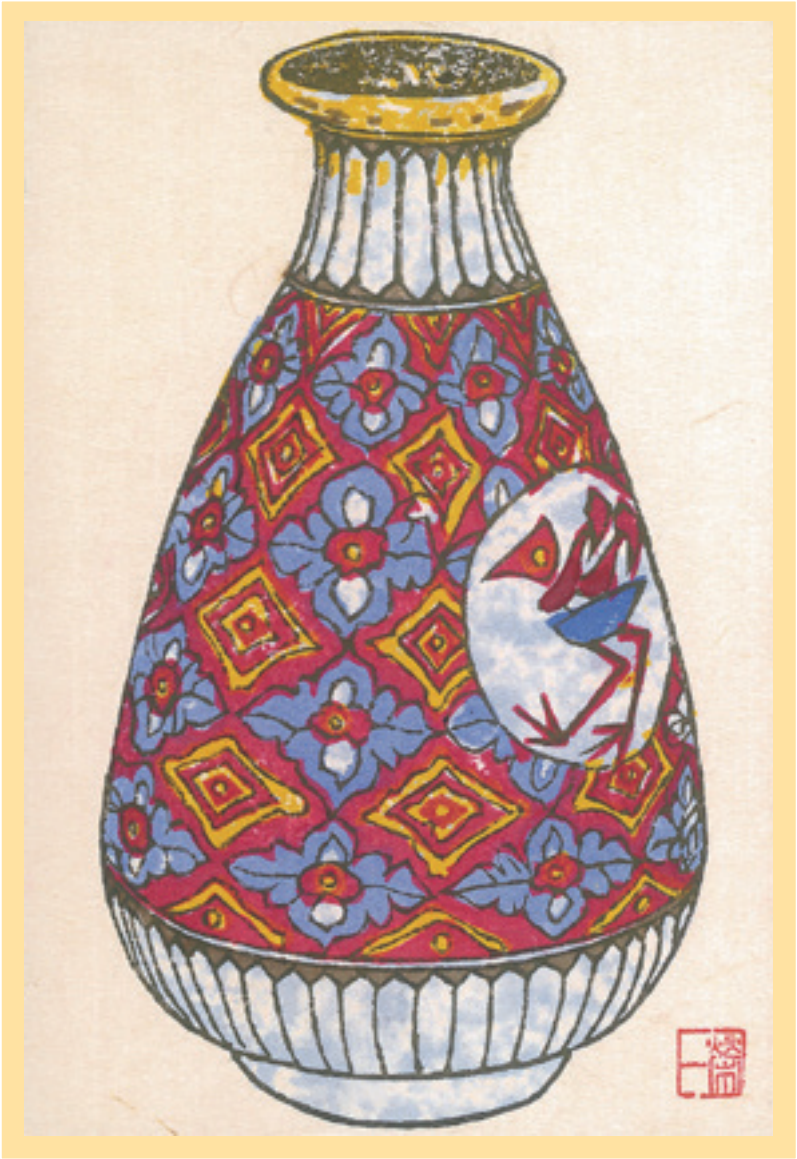
沖縄シリーズ 211 作　**赤絵流唐草紋抱瓶**　2002. 07. 14

この木版画は、小橋川ツル子さんの「赤絵流唐草紋抱瓶」です。私が勝手に名前を考えて付けました。2001 年 2 月 10 日、壺屋通りの東端、ツル子さんの工房と直売店を訪ねました。お店の壁には多くのお皿や抱瓶が吊るされています。この抱瓶は地味な色合いですが美しいです。「どうすればこのような模様を思いつき、バランスよく描き、美しい色の釉薬を乗せ、配色できるのだろう」と作家の限りない題材の広がりを羨ましく思いながら眺めています。この赤色は良く使われるオレンジ系の赤色より濃い赤です。“お茶の湯”で言うところの、“わび・さび”の世界が感じられます。上、下部の幾何学の斜線もしっとりと落ち着いた色ですばらしいです。



沖縄シリーズ 231 作　**赤絵ヤンバルクイナ・花紋花瓶**　2003. 03. 23

この木版画は、国場一さんのすばらしい赤絵の花瓶です。2003 年春の岐阜県高山市で開催される『HGS 木版画交換会』の題材に相応しい仕上がりに喜んでいます。壺の下地は明るい赤で華やかです。中央部一面に白、グリーンと黄色の組み合わせの花模様が描かれています。真中に窓枠を作り、“駆け出すヤンバルクイナ紋”と下段に“国”の草書体の文字が書き込まれています。この２つの特徴が備わっていれば、国場さんの作品です。このマークを国際通りや壺屋通りで見つけると「国場さん」と親しみを覚え、以前からの知り合いであるかのような錯覚をします。これからも独自性を追求されてすばらしい作品を送り出してください。



沖縄シリーズ 255 作　**赤絵花・ヤンバルクイナ紋花瓶**

2004. 01. 27

これは国場一さんの「赤絵花・ヤンバルクイナ紋花瓶」です。“ヤンバルクイナ”は沖縄本島の北部に生息する鳥で、羽が退化し飛べません。餌が豊富で捕食する動物も少なかったため飛ぶ必要がなくなり、羽根があっても飛ぶ力を無くしました。全長約 30 ㎝程の足のしっかりした比較的大きな鳥です。1981 年、この鳥が新たに見つかり、世間をあっといわせました。しかし愚かな人間が、他の生物の生態や自然環境のことを考慮せず、猛毒の“ハブ”を退治するために“マングース”を放ちました。マングースは、危険が伴わなくて容易に獲れるヤンバルクイナを捕食しているといいます。その為、今では中北部の境界線、限界線を決めて懸命にマングースを罠で駆除していると聞いています。ヤンバルクイナを絶滅させないよう、自然的な保護を願っています。北部には米軍基地の演習場があり、基地も早く撤去してほしいです。この花瓶は明るく華やかなので 2004 年の年賀用に彫ろうとしましたが、遅れて間に合いませんでした。この駆け出す“ヤンバルクイナ紋”これこそ、国場さんの作品です

沖縄シリーズ241作　**赤絵唐草紋中花瓶**　2003.06.27

これは、国場一さんのすばらしい「赤絵唐草紋中花瓶」です。2001年2月10日、陶器店のガラス窓越しに眺めて版にしました。木版画に彫っているときは、作者が判らず、彫りの途中細部を見たくなり、元の写真を6倍に拡大しますと“駆けるヤンバルクイナ紋”が現れたのです。見つけられて嬉しかったです。このような唐草紋は珍しいです。地味な色合いですが、ゆったりとしてとても美しい。いつか木版画にしようとストックしてから2年半も経過してしまった作品です。

沖縄シリーズ 179 作　**赤絵イッチン抽象文様壺**

2001. 07. 27

この美しい壺は“イッチン”と言う技法で描かれた、国場一さんの作品です。那覇市伝統工芸館の売店で展示されていたのを写真に撮らせていただき版にしました。この“イッチン”とは鹿皮の小さな袋に釉薬を入れ、金属製の先端が細くなった管を取り付けて、そこから搾り出すように模様を描く方法です。搾りすぎると釉薬が流れ出て線が太く、緩すぎると細くなり加減が難しく、その適度の強弱が柔らかな画面を醸し出しているのです。また、白、黄色の線は釉薬が載せられることによって少し盛り上がり、立体感を出しています。［国場陶芸店］は、国際通りの牧志バス停留所から壺屋通りの方へ入ったところにあり、案内パンフによりますと陶芸体験のできる教室を開いているそうです。

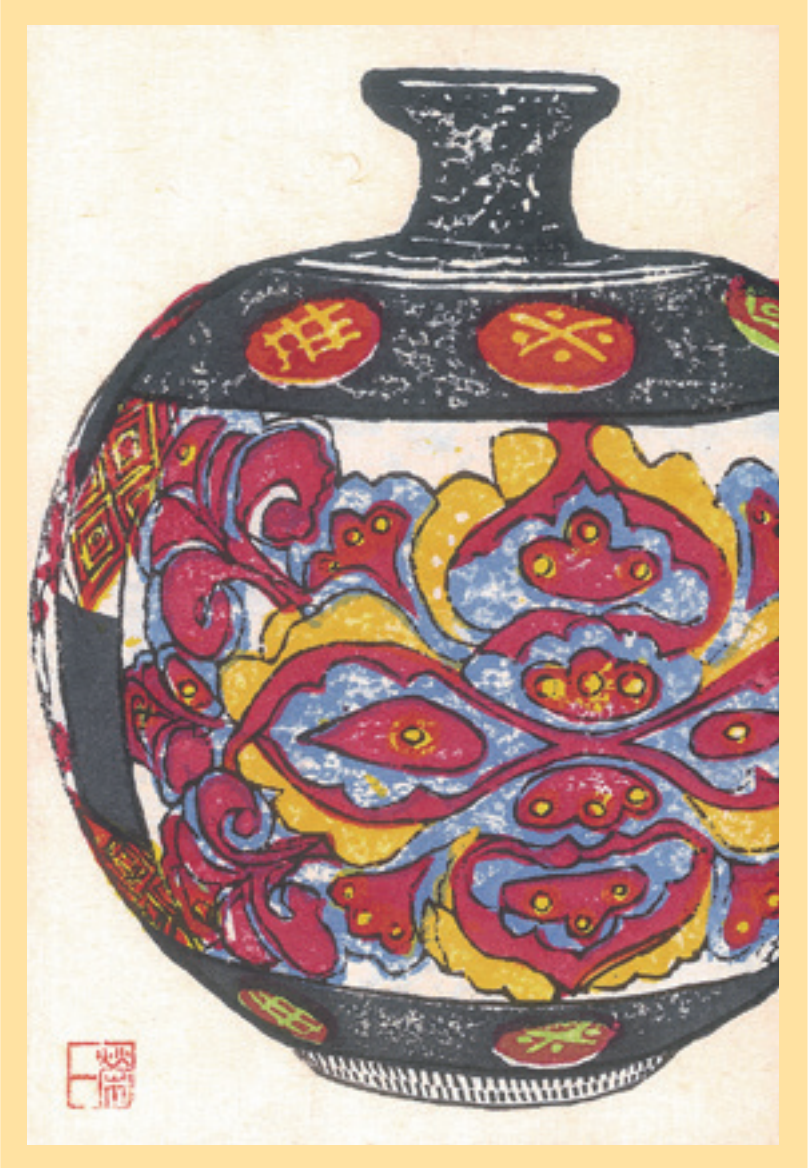
沖縄シリーズ209作　**蓋付唐草紋壺**　2002.07.07

この耳付き「蓋付唐草紋壺」は、国場一さんの作品です。群青色の上部に“国”の草書字体の模様を描いています。唐草紋は中、下段一面、おおらかに描かれ、その上の段に黄色と緑の葉のような抽象紋と赤い浮遊紋を配しています。国場さんの作品は穏やかで温かい色合いの陶器が多いようです。この方の壺や花瓶にはこの草書体の“国”と“駆け出すヤンバルクイナ紋”が入っているのでわかりやすいです。国際通りの陶器店や土産物店でこのマークの入った品物を確認すれば国場さんの作品です。これからも独自性を追求されてすばらしい作品を送り出していただきたいと願っています。

沖縄シリーズ 238 作　**面取唐草・ヤンバルクイナ紋壺**

2003. 06. 02

この木版画は、国場一さんのすばらしい「面取赤絵壺」（８面体）です。2001 年 12 月 10 日、那覇市伝統工芸館の売店で展示販売されていました。正面中央に“駆けるヤンバルクイナ紋”と草書体の“国紋”を、縦、交互に２個づつ描き、それぞれ丸で囲んでいます。その両側に葡萄の房のようなブルーの美しい唐草文様を描いています。漆黒にブルーの唐草は暗いので中央のヤンバルクイナと国の模様は白色で明るくバランスを取っています。大きさは 30 ㎝位、とても優雅な壺です。壺屋通りや国際通りのお店では、沢山の陶芸品が販売されています。国場さんの作品には、この２種類のマークが入っているので見分けるのが容易です。



沖縄シリーズ 253 作　**赤絵唐草紋壺**　2003. 12. 27

これは、国場一さんのすばらしい「赤絵唐草紋壺」です。2003 年 9 月 3 日、工房を訪ねたとき、ガラスケースに入っていたこの壺を見つけて版にさせていただきました。赤い部分を見ていますと、人やシーサーの顔に見えたりします。赤と黒のバランスが良く、どっしりとした質量感があります。注ぎ口と壺の膨らみ具合が美しいです。あいにく、ご主人は壺屋陶器事業協同組合へ出かけてお留守でしたので、妹さんでシーサー作家の照屋晴美さんが案内してくれました。もうすぐ、那覇市伝統工芸館が国際通りへ移転してきます。それを好機に壺屋通りへ観光客の流れを作り、活性化するチャンスです。ホテルを出て国際通りから壺屋陶器通りを散策していただきたいものです。他方、読谷村座喜味のやちむん通りは［座喜味城］が“世界遺産”に登録されたのを受けて周辺区域の整備がなされています。大型の観光バスが乗り入れられるよう駐車場が作られていました。

沖縄シリーズ 254 作　**赤絵抽象花紋壺**　　2004. 01. 16

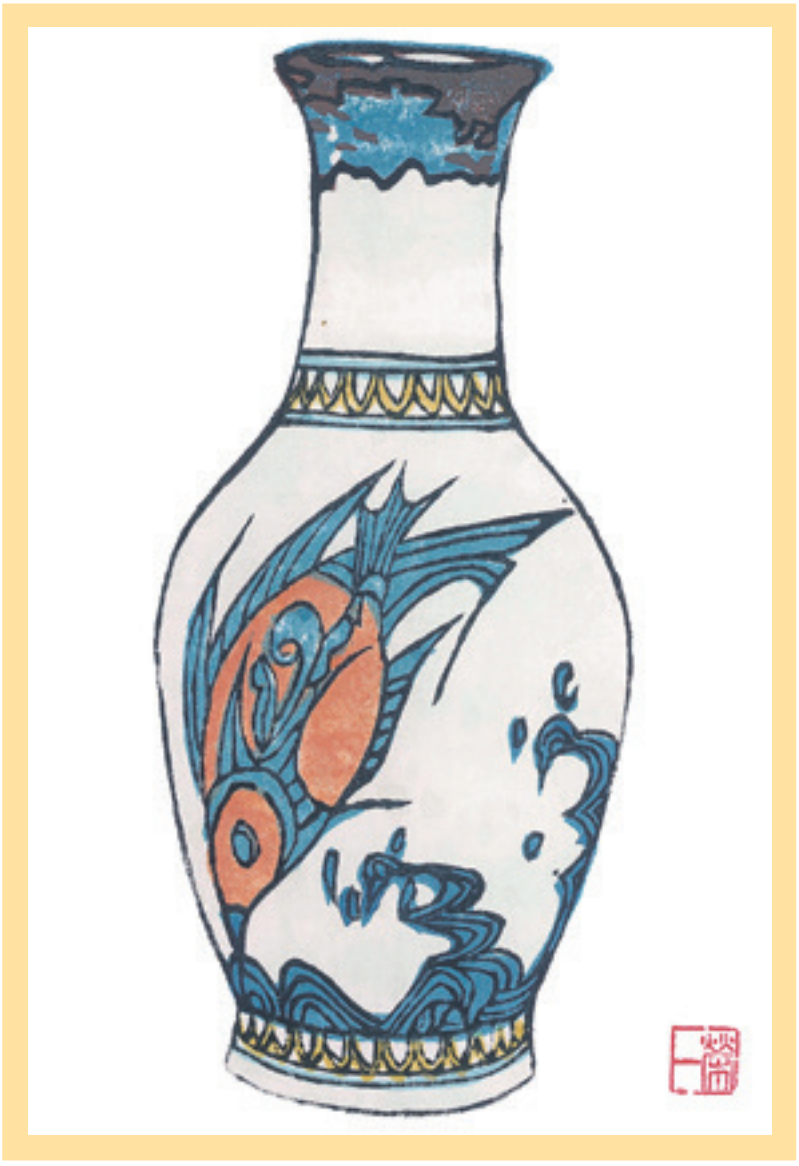
これは国場一さんの「赤絵抽象花紋壺」です。1997 年 9 月以来、一度訪ねたいと思っていた牧志の工房を 2003 年 9 月 3 日、念願かなって訪ねることができました。国場さんの妹さんにお願いし、すばらしい数点を写真に撮らせていただきました。この壺は薄い青地に黒い胡麻塩のような粒を張り巡らせ、中央に“窓絵”の枠に向日葵のような赤い花模様を描き、その周りには黄、青、赤色の花弁を配しています。版画にする時、胡麻塩の粒粒の点は、硬い朴版（白っぽい色）を使って彫り残していくので難しいです。陶芸家は良い作品ができると手元に飾っておきたいと思うでしょう。しかし、それらの作品を手放して、また新たに作品を作っていかなければなりません。厳しい巡り合わせです。国場さんの作品は独創的な“ヤンバルクイナ紋”、国場の“国”の草書紋、特徴的な“唐草紋”が入っていることで分りやすいです。また、色彩も黄土系と赤色がとても美しいです。作品はどれも手作りなのでとても時間が掛かります。

沖縄シリーズ 232 作　カラフル湯呑　２種類　　2003. 04. 11

これは国場一さんのカラフルな湯呑です。この木版画の湯呑は 1997 年９月、初めて沖縄へ出掛けたとき平和通りの与儀公園で開催された陶器市で購入しました。左の雲と唐草紋、右のヤンバルクイナ紋と国の草書体紋のコップを購入しました。あれから５年６ヶ月も経過しています。夜間の陶器市は恐ろしいハブが出てこないかと心配したことを思い出しました。後に南風原の中村高雄さんが私の心配事に対して「そんなにハブがうようよしていたら沖縄の住民だって噛まれてばかりする」と笑いながら教えてくれました。しかし、大阪に帰って、あちこちの物産展に出かけると、焼酎に入れられた“ハブ”をよく見かけます。

沖縄シリーズ 242 作　**刷毛目魚紋双耳付鉢**　2003. 07. 01

この木版画は、2001 年『読谷（やちむん）展』で見ました久場政一さんの「刷毛目魚紋双耳付鉢」です。この展覧会は 1991 年、24 の窯元から始まり、回を重ねて現在は 40 余の窯元が参加され、発展しています。多くの人々が、毎年新春に開催されるこの企画展を楽しみにされています。沖縄の陶器は那覇市壺屋と中頭郡読谷村が有名な生産地です。読谷村には自然がいっぱい残っており、恵まれた広い環境で登り窯が焚けるのが陶芸家にとって大きな魅力です。読谷村は、教育文化に力を注ぎ活性化を図っています。沖縄の那覇市や読谷村の小、中、高等学校では、児童生徒の授業に陶芸の時間を設け、伝統工芸への理解と後継者づくりに尽力されています。また、学校には陶芸クラブがあり意欲的に取り組まれ、作品展も行われていると伺いました。やがてその土壌に育まれて多くの名工が生まれることでしょう。久場さんのこの魚紋は勢いがありすばらしいです。バックに刷毛目模様が描かれています。すばらしい『読谷（やちむん）展』の作品集が、いつかカラーで印刷されることを願っています。（2003 年現在は白黒版）

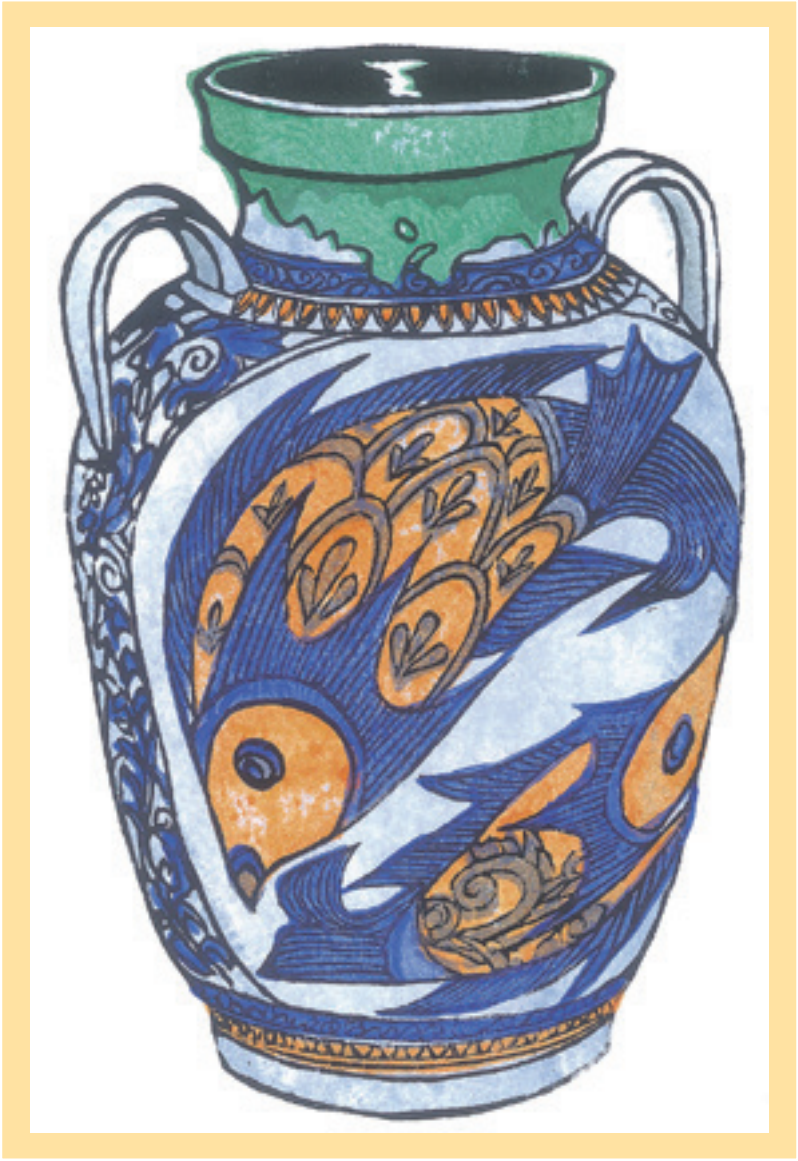


沖縄シリーズ 101 作　**線彫魚・波紋大花瓶**　1999. 08. 04

　このすばらしい「線彫魚・波紋大花瓶」は宮城須美子さんの作品です。1999 年 1 月、窯上げ後、この花瓶に水を一杯に張って漏れないか検査しているところに行き合わせました。外観は美しく仕上がっていても、水が漏れれば花瓶としての役目を果たせません。窯の火のとおり具合によって小さな“亀裂”が入ったりすると不良品となります。花瓶を作る工程を簡単に説明すると、①粘土を捏ねて底の部分をしっかりと固める ②轆轤を回しながら花瓶の形を紐状の粘土で積み重ねて行く、熟練を要する作業です ③ゆっくりと時間を掛けて乾燥させる ④難しい曲面に魚・波紋を線彫りする ⑤釉薬を含ませた筆で彩色する ⑥窯入れする ⑦窯上げして検査し出荷する。最後に無事焼きあがって欲しいと願うのは３日３晩の火入れがその仕上がりを左右するからです。そして、２、３日後、窯の温度が下がったら窯を開きます。

沖縄シリーズ 217 作　**線彫魚紋変形花瓶**　2002. 09. 10

この木版画は宮城須美子さんのすばらしい藍色の「線彫魚紋変形花瓶」です。円筒を真中で鼓のように凹ませ、その中心部を球状に膨らませた変形の花瓶です。上下の円筒部分には 7 段枠のラインを作り、その中に幾何学紋をぎっしりと彫りこんでいます。実に根気のいる技です。木版のように粘りのある材料であれば、丁寧に彫っていれば隣の壁は木目に沿って割れたりはしませんが、太くなったり細く削りすぎたりします。私はそのようなもどかしさを味わっていますので、この繊細な彫りのご苦労が良く判ります。真中の球形部分には美しい魚紋が力強い線で描かれています。繊細ですばらしい作品です。この花瓶は 2001 年恒例の『読谷（やちむん）展』に出展されました。白黒の小冊子を見て、私が記憶している色で版にしました。



沖縄シリーズ 252 作　**両取手付線彫双魚紋大花瓶**

2003. 11. 14

これは宮城須美子さんのすばらしい「両取手付線彫魚紋大花瓶」です。2003 年 11 月 2 日、国頭郡恩納村にある［ホテルみゆきビーチ］の売店で販売されていました。高さは 60cm 位、これほど大きな作品は珍しいです。宮城さんが得意とする線彫りの魚紋が 2 匹、のびのびと描かれています。上の魚は鱗に 3 枚の若葉模様、下は、唐草紋を配しています。口元、目、背、胸鰭と尾は濃い藍色の釉薬を使っています。このような立派な作品は、できればホテルが買い取り、宿泊客に“沖縄の伝統工芸”の紹介としてロビーに陳列し、美術館のように楽しませていただきたいと思いました。

沖縄シリーズ 78 作　**蓋付線彫魚紋壺**　1999. 04. 01

これは宮城須美子さんの美しい「蓋付線彫魚紋壺」です。1999年１月７日、窯出しされた直後に［宮陶房］の作業台に置かれていました。この壺は 1999 年『読谷（やちむん）展』に出展されました。白磁をバックに藍色の線彫りが美しく、多くの陶芸作品の中でも注目を集めたろうと思われます。上下の幾何学模様は繊細で、彫られた線が隣の線と接触し、山側の壁を崩さないようにするのは難しいと勝手に気を揉んでしまいます。この模様は、中央の美しい魚紋を引き立たせています。須美子さんの魚紋は、線が凛々しく勢いがあります。

沖縄シリーズ37作　**線彫魚紋抱瓶**　1998.06.07

この木版画は1998年『読谷（やちむん）展』に出展された宮城須美子さんの「線彫魚紋抱瓶」です。読谷村立美術館の宮城元信館長さんからいただいた白黒写真のパンフをもとに、想像して色版を作りました。魚紋は鋭い流線型で勢いがあります。上の魚は普通の鱗、下は唐草紋を配しています。色はよく使われている茶と藍色にしました。須美子さんの線彫りは線が美しいので、相当速い勢いで彫られているように思いました。

沖縄シリーズ 129 作　**線彫魚紋抱瓶**　　2000. 05. 26

この鋭い線で描かれた「線彫魚紋抱瓶」は宮城須美子さんの作品です。描かれた魚紋は、狭い抱瓶のキャンバスから弾け出しそうです。人間国宝　金城次郎さんの流れるような力強い線は、宮城須美子さんがきっちりと受け継がれているように思います。この作品は次郎さんの作品と見間違うところでした。

沖縄シリーズ 90 作　**蓋付線彫魚紋鉢**　1999. 06. 17

この木版画は美しい「蓋付線彫魚紋鉢」です。宮城須美子さんの作品です。1997 年 9 月初めて沖縄を訪問してからもうすぐ 2 年になります。この版は《沖縄シリーズ 90 枚目》です。沖縄の方は私たちがたびたび通って、木版画を彫っているのに対して「白柳さんは、沖縄の出身？ 親戚の方がおられるのですか」とよく聞かれます。

質問の答えらしいものを整理しますと、

① 沖縄に大阪外国語大学短期大学部の友人で同窓生（お年は大先輩）が居られたこと。

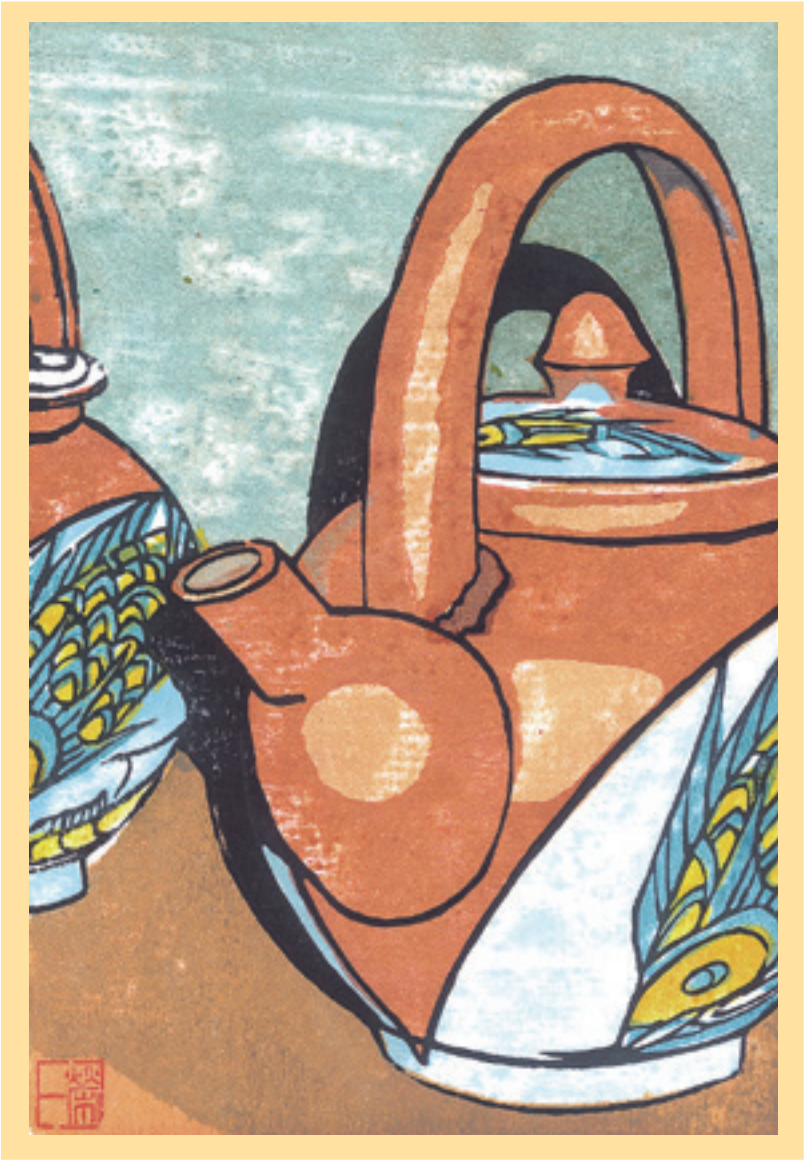
② 壺屋の［まじる商店］さんの長男さんが、1997 年 7 月、大阪市鶴見緑地で開催された「全国陶器市」で沖縄に来ればもっと多くの壺屋焼に出会えるからと勧めてくれたこと。

③ 1997 年 9 月、初めて出かけたとき、読谷村立美術館で『人間国宝 金城次郎展』が開催されていて 99 点のすばらしい作品に出会い感動したこと。

④ 同美術館 10 周年記念に館長さんが「村民の方々に私の木版画を公開したい」と言ってくれたこと。そのときのために少しでも多くと彫り続けている。

⑤ 沖縄の陶芸家やお店の方々や沖縄で出会った皆さんが大変親切に良くして下さったこと。

まだ他にあるかもしれませんが以上のようなことです。

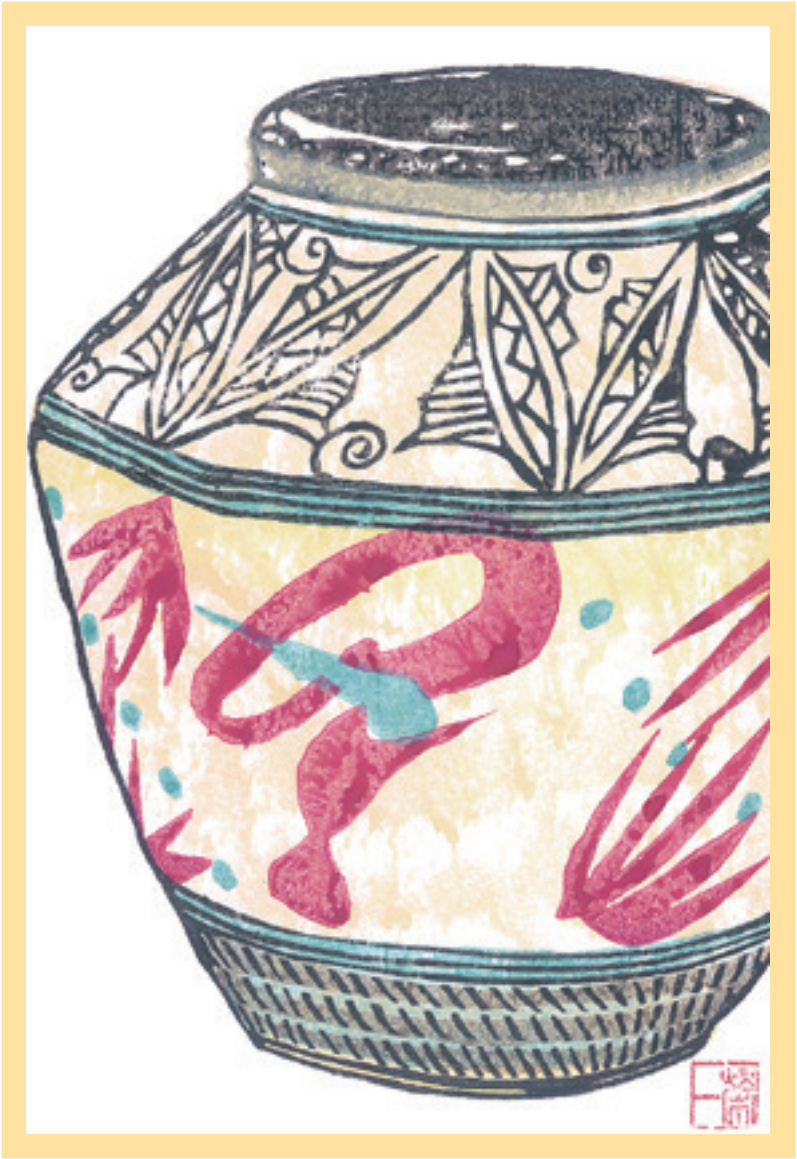


沖縄シリーズ 84 作　**線彫海老・魚紋急須**　1999. 05. 14

これは宮城須美子さんの「線彫海老・魚紋急須」です。妻には「この急須の版画は彫り、色合いも良くないので知人や版画友達に送らない方が良い」と言われました。そこで、普段は 40 枚摺るところ、やむなく 13 枚で押さえました。満足できる作品は 1 年に何枚できるか判らないので、失敗作だといってストックしないで捨てていたら何も残りません。彫った作品はほとんどすべてファイルしています。1999 年 1 月 7 日、須美子さんの工房［宮陶房］をお尋ねしたとき、金城次郎さんの［共同窯］が窯出しされ、それに合わせて販売業者が駆けつけ多くの作品を購入したあとでした。残ったものは少なく、この急須も数個が台に置かれ、新聞紙にくるまれて荷造り中でした。須美子さんは「ここの直売店［宮陶房］に飾り、販売するものがない。観光客がこの読谷（やちむん）通りを散策されるのに品物が手薄で困る」と嬉しい悩みを話していました。

沖縄シリーズ 187 作　**兎・蛙紋湯呑**　　2001. 10. 10

この「湯呑」は、人間国宝 金城次郎さんのお孫さんの作品です。ウサギの左側に蛙（湯呑の裏側に隠れている）が描かれ仲良く話し合いをしているようです。1998 年 7 月、［宮陶房］を見せていただき、冷たいジャスミン茶をこの「湯呑」でご馳走になりました。妻は、このすばらしい「湯呑」を欲しいと言いました。次郎さんの娘の須美子さんは、一度は「もう使用しているものだから」と断られましたが、再度お願いして譲っていただきました。「大切にしてください」と現在は窯を離れて生活するこの湯呑の作者である息子さんのことを思いながらの“一言”と共に頂いてきました。今は私の沖縄陶器専用の本棚に大事に保管し、ときどき眺めて喜んでいます。妻の宝物です。



沖縄シリーズ115作　**赤絵キビ紋大壺**　1999. 12. 26

これはすばらしい「赤絵キビ紋大壺」です。1999年７月３日、那覇市伝統工芸館を尋ね、常設展示されていたものを木版画にさせていただきました。壺の上部に幾何学紋、下部に赤絵でキビ紋の崩しが描かれています。壺は八面体で作られています。中央部で上下の面きりを行うという大変難しい技が駆使されています。作者は新垣栄三郎さんです。

沖縄シリーズ 113 作　**龍巻壺**　1999. 12. 14

　これは那覇市伝統工芸館に常設展示されている大きな「龍巻壺」です。波と雲紋から浮かぶ阿吽の龍が盛上技法で焼かれています。向かって右側の大きく口を開けた龍は、家庭に福を取り込み、左側の龍は口を閉じて福が逃げないようにしています。琉球王朝時代、龍紋は王家の象徴で、何人も安易に使用することはできませんでした。

沖縄シリーズ 210 作　**唐二彩抱瓶**　　2002. 07. 11

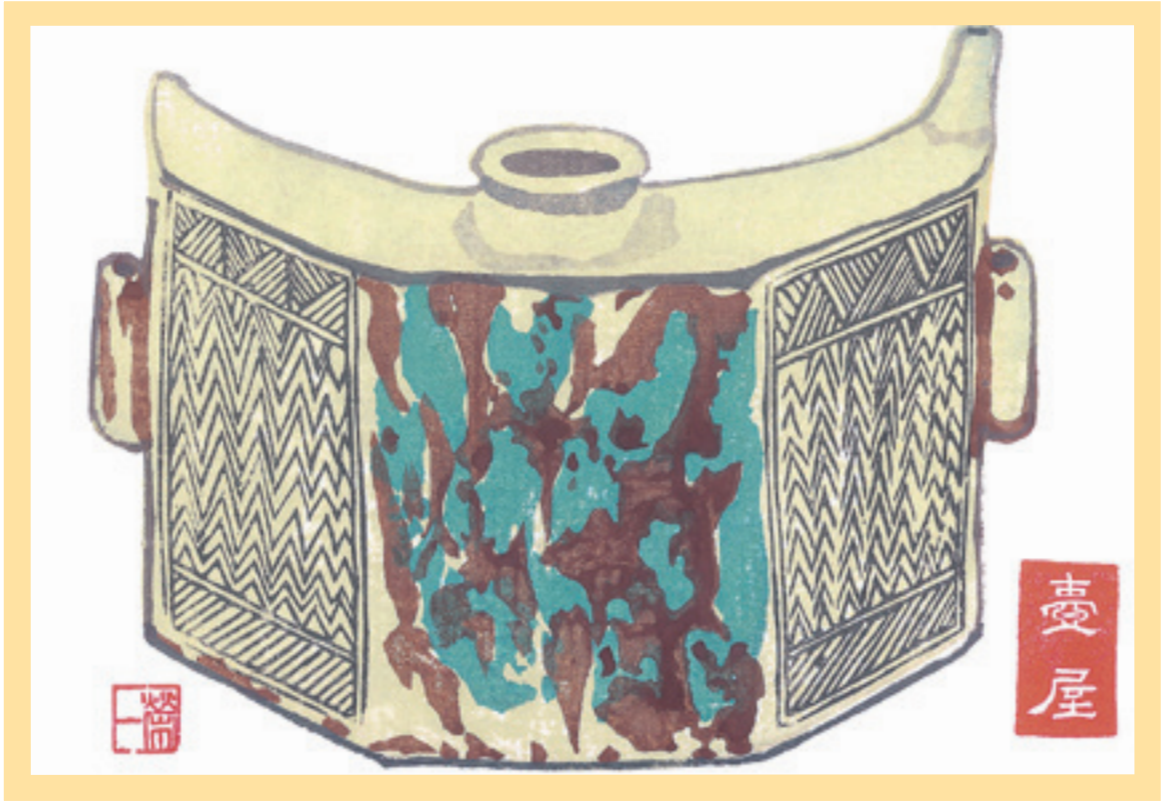
　このすばらしい抱瓶は、2001 年 12 月 10 日、那覇市伝統工芸館を訪ね、木版画にするため撮らせていただきました。２階、陶芸部門のガラスケースに入れられて展示されています。四角い窓枠に花模様を巡らせ、窓の画面には青と茶（唐二彩）の抽象的な模様をぼかして流しています。現代的な感覚でとても美しいです。華やかな原色を使わずに、しっとりとした色使いで風格を出しています。紐通しの耳は頑丈で力強くその抱瓶をしっかりと支えています。地主がさとうきびの生育や小作人の手入れの具合を見回り、一服しながらこのすばらしい抱瓶から泡盛を注いだものと思われます。この抱瓶は美しい円錐形に作られており、形の安定感と絵柄に陶工のすばらしい“技・気品”を感じます。戦前までは沖縄の抱瓶はこのように使われていました。戦後、米軍の占領、農地改革、魔法瓶の普及により、本来の酒瓶として使われなくなりました。今は花瓶の代用やこのまま装飾品として売られています。また、形が珍しいので泡盛を入れ、酒造会社が土産物として販売し、器としても人気があります。

沖縄シリーズ94作　**線彫魚紋大皿**　1999.07.05

これは、陶器作りの名人といわれた仲村渠致元（ナカンガカリ チゲン）さんの作品と言い伝えられた「魚紋大皿」です。常設展示されている沖縄県立博物館で拝見しました。すばらしい美術工芸品が大切に保管されてきたお蔭でそれらの作品に接し、感動し、明日への希望や勇気をいただいています。この木版画は名著『沖縄の陶器』に掲載されていた写真を元に彫りました。遠くの波間に浮かぶ水鳥を小さく、手前の魚紋は雄大でお皿から飛び出してきそうな迫力で遠近法を取り入れて描いています。すばらしい線彫りの魚紋に勢いが漲っています。

沖縄シリーズ 97 作　**緑黒釉筒描抱瓶**　1999. 07. 18

これは日本民藝館が所蔵するすばらしい「緑黒釉筒描抱瓶」です。作家は判っていません。この抱瓶の作られた 1800 年頃は『抱瓶較べ』（コンクール）があり、陶芸家はこのコンクールで《優秀賞》を獲得すると一躍有名となり、名誉とともに富豪、豪農、大商人の愛好家や蒐集家から制作注文が多数舞い込むことになり、陶芸家の生活もゆとりができます。すばらしい抱瓶を生み出すために彼らは更に新しい工夫と開発を行い、競って制作しました。現在販売されている抱瓶の表面は線彫り、象嵌、流し釉、イッチン、筒描き、掻き落し、盛り上げ、型押し等の技法を駆使して描かれています。現代の抱瓶は、花瓶の代用か飾り物で、大きさも小ぶりなものから 30 ㎝を超える大きなものまで作られています。



沖縄シリーズ 42 作　**象嵌色差面取抱瓶**　1998. 07. 08

この版画は「象嵌色差面取抱瓶」です。『沖縄文化財百科』（全 4 巻）の 1 巻　『建造物・美術工芸』の中に収録されています。なんとすばらしい抱瓶だろうとしばらく見とれてしまいました。抱瓶の中央は焦げ茶と緑の釉薬を色差しし、美しい抽象文様を描き出しています。その両翼は、象嵌技術を駆使して微細な網代紋を描いています。この作品は、18 世紀壺屋で焼かれた作品で、その当時の最高級の技術者が残した作品といわれていますが、作者は判っていません。沖縄県立博物館で展示されています。

沖縄シリーズ 73 作　**色絵花鳥紋抱瓶**　1999. 02. 23

これはとても美しい「抱瓶」です。平凡社から出版された『やきもの事典』の写真図版から木版画にしました。図書の図版を眺めているうちに実物を無性に見たくなり、1999 年 1 月 6 日、沖縄県立博物館を訪ねました。館内は貴重な作品群が光や熱で劣化しないように照明を薄暗くしてあり、自然と歩く足取りもゆっくり慎重になります。繊細で美しい「抱瓶」に会いたいと思って尋ねたその実物が目の前にあります。感動しました。1800 年代盛んだった『抱瓶較べ』（コンクール）で、陶芸家は優秀作品を生みだそうと競ったようです。賞を受けると注文も入るので、生活も裕福になります。この作品は、現代感覚にも通じており、おそらく優秀な賞を獲得したろうと思われますが、作者は判っていません。粋な大地主か豪族が陶芸家に注文して作らせたものと考えられます。

沖縄シリーズ 235 作　**象嵌花鳥紋抱瓶**　2003. 04. 30

この木版画は、沖縄県立博物館が所蔵する「象嵌花鳥紋抱瓶」です。1998 年に出された復刻版（初版 1972 年刊行）の『沖縄の陶器』に写真掲載されているものを彫りました。実物は同博物館で拝見しました。上段注入口の左右に鳥を配し、中央左に梅、右側に竹を描いています。腰に吊るす紐通しの耳は梅と竹の幹とし、そこから枝や葉を出した風流な抱瓶です。色彩は単調で茶の湯の“わび・さび”に通じる名品です。陶工は得意先の裕福な豪族や商人から注文を受けて、飾り絵を何にするか、描く技法は線彫り、指書き、掻き落し、象嵌などどんなやり方で、色彩の釉薬は何を使うか、形は円形か面取りをするか、耳の装飾は何にするか、大きさはどれ位に等、打ち合わせをして制作するのでしょうか。それというのも 19 世紀のこの時代、『抱瓶較べ』という陶工達の腕自慢大会の催しが盛大に行われていました。この大会で優勝したり賞を受けますと次回から注文が入り、陶工の生活も潤います。陶工達は競って技術を磨き、新たな工夫を重ねてすばらしい作品を生み出しました。

沖縄シリーズ 62 作　**緑釉彫絵木目紋抱瓶**　1998. 12. 05

この木版画は、「緑釉彫絵木目紋抱瓶」です。19 世紀の作品で作家は判っていません。名著『沖縄の陶器』に掲載されています。この本は、南風原町の中村高雄さんが限定 500 部の復刻版を送ってくれたものです。この抱瓶は、沖縄県立博物館の常設展示品です。緑釉といっても緑色は薄く暗い色で、地肌の黄土色も緑釉にあわせて渋い色でまとめています。それらの色を細かく区切り、緩やかな木目の曲線が美しいハーモニーを醸しています。茶の湯の“千利休好み”の色合いです。真中の口元は、窯の温度が高くなりすぎたのか少し溶けて崩れています。どっしりとしたすばらしい風格を備えています。

沖縄シリーズ 60 作　**盛上シーサー抱瓶**　1998. 11. 10

この木版画は「盛上シーサー抱瓶」です。酒造会社が泡盛をこのような器に入れて土産物用に販売したものです。立体感を出すためにシーサーを粘土で貼り付けたもので、一つ一つ手捻り（手と篦で形作る）で作成すると器に費用がかかりすぎます。酒造会社が陶器工場へ大量注文し、機械による型押しで造られたものです。同じ大きさの手捻りの抱瓶と比較すると肉も薄く、軽いです。1979 年ごろ、職場の先輩から空になったこの抱瓶をいただきました。紐で吊るして大切に飾っていたものを版にしました。今は酒造会社のラベルもうすれて読み取ることはできません。

沖縄シリーズ 180 作　**魚・海藻紋大壺①**　2001. 08. 05

　このすばらしい大壺は、恩納村にある［リザン シーパーク ホテル］のロビーに飾られていました。白磁に紺色で水草の間をゆったりと泳ぐ大魚を描いた高さ 45 ㎝、直径 30 ㎝位の大きな壺です。くねらせた魚体、鱗の 1 枚 1 枚が精密に美しく描かれています。鱗は球形に狭い間隔で線を入れるので、隣のラインと近付き、離れすぎないように仕上げることは至難の業です。壺に銘が書かれていないのでホテルのフロントに訊ねましたが、作者は判らないとのこと。沖縄の陶芸家に木版画を見せてたずねると「壺屋焼ではないので輸入品だと思います」ということでした。

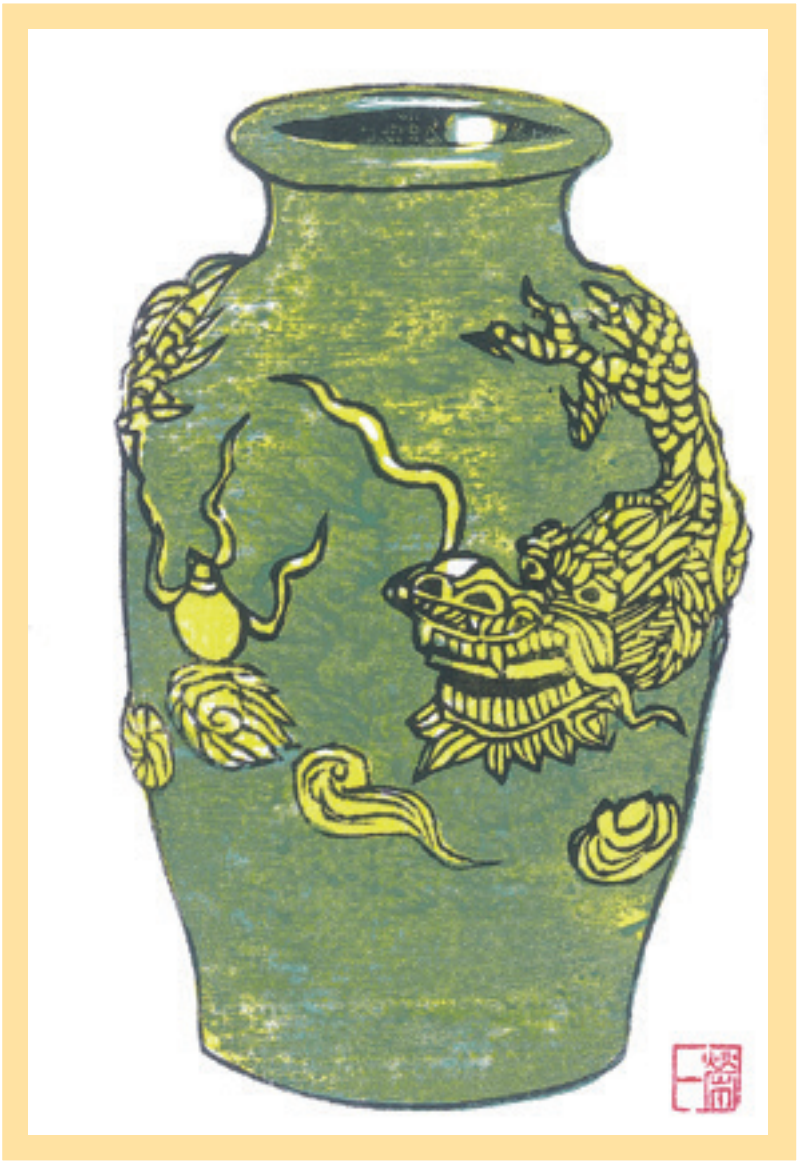
沖縄シリーズ 183 作　**魚・海藻紋大壺②**　2001.09.02

　このすばらしい壺は左の「魚・海藻紋大壺①」の裏側に描かれた魚紋を版にしたものです。魚の名前はわかりませんが小魚を獲る肉食魚のようです。陳列されていたのは恩納村の［リザン　シーパーク　ホテル］のロビーです。白磁色に紺色で、細長い口を開けながら獲物に勢いよく飛びつく魚を描いています。鱗は退化し、背鰭は大きく“アイゴ”のような刺があります。口の中の歯は鋭く尖り、捕えた魚を逃がさないように巧くできています。肉食魚の基本的な姿です。草食魚はゆっくりとついばみ、または小さなプランクトンを水ごと吸い込みますので、歯の先端は尖っていません。捕食装置も巧く発達し、適応しています。

沖縄シリーズ 170 作　**透彫梟の電気スタンド**

2001. 06. 16

これは相馬正和さんのリアルな梟です。2001 年 2 月 10 日、読谷村立美術館で開催された『読谷（やちむん）展』で拝見し、その時にいただいた全作品の小冊子から木版画にさせていただきました。電気スタンドの置物です。この展覧会は、村民の方々に読谷村で活躍されている陶芸家の作品をとおして、豊かな個性と心意気に触れて“感性”を学び、情緒教育に役立てて欲しいと願って 1991 年から始められ、陶芸家の協力を得て年々盛況になっています。県内各地の陶芸ファンは“春の風物詩”となったこの催しを心待ちにしているとのことです。



沖縄シリーズ107作　**盛上龍巻壺**　1999.09.12

これは『手捻り50年　壺屋に生きる』高江洲育男さんの作品集から木版画にさせていただいた「盛上龍巻壺」です。この作品集は宜野湾市の写真家　島袋俊哉さんが送ってくれました。この冊子を読ませていただいて、高江洲さんは子供の頃、大阪市住吉区加賀屋（現住之江区）で生まれ、小学校に通われたと知り、同じ大阪というだけでなんとなく親しみを感じます。壺屋通りを散策の途中、ご子息の忠さんの工房［郁陶園］を尋ねました。そのとき宴会の用意をされていて、厚かましくご相伴に預かりました。ご夫婦そろって親切な方です。

沖縄シリーズ 159 作　**盛上雲龍紋カラカラ**　2001. 03. 31

　これは高江洲育男さんのカラカラです。気持ちの良い響きの言葉です。豪華な雲龍紋が手捻りの盛り上げで作られています。形から見て酒器だと思いましたが、何故そう呼ばれるようになったのか由来はわからないので、辞書を引くと
①「カラカラ」と鳴る（現在のカラカラは鳴らない）
② 貴重な酒器であるこのカラカラを“借りる”から
とのことです。ローマではカラカラ大浴場が有名ですが、この言葉とは関係ありません。ひょっとするとこの説明文を読んだ方が教えてくれるかも。九州にもこの形の酒器があり、カラカラと呼ばれると掲載されています。陶器は花持ちが良いので、高価な酒器を一輪挿しにするのはもったいないですが風情があっていいでしょう。絵画、書の水差しにもいいですね。

沖縄シリーズ 160 作　**土灰釉掛龍巻花器**　　2001.04,08

これは高江洲育男さんの「土灰釉掛龍巻花器」です。水盤として花を生けたりする、どっしりとした重厚な感じのすばらしいものです。大きさは直径 28 ㎝、高さは 12.5 ㎝で、回りに龍紋が盛り土して篦で描かれています。龍が胴体を大きくくねらせて水盤から躍動しています。顔は大きく口を開き威嚇しています。篦と指先で造形された芸術品です。すばらしい豪華な水盤に花が負けないように生けるのは難しいことです。

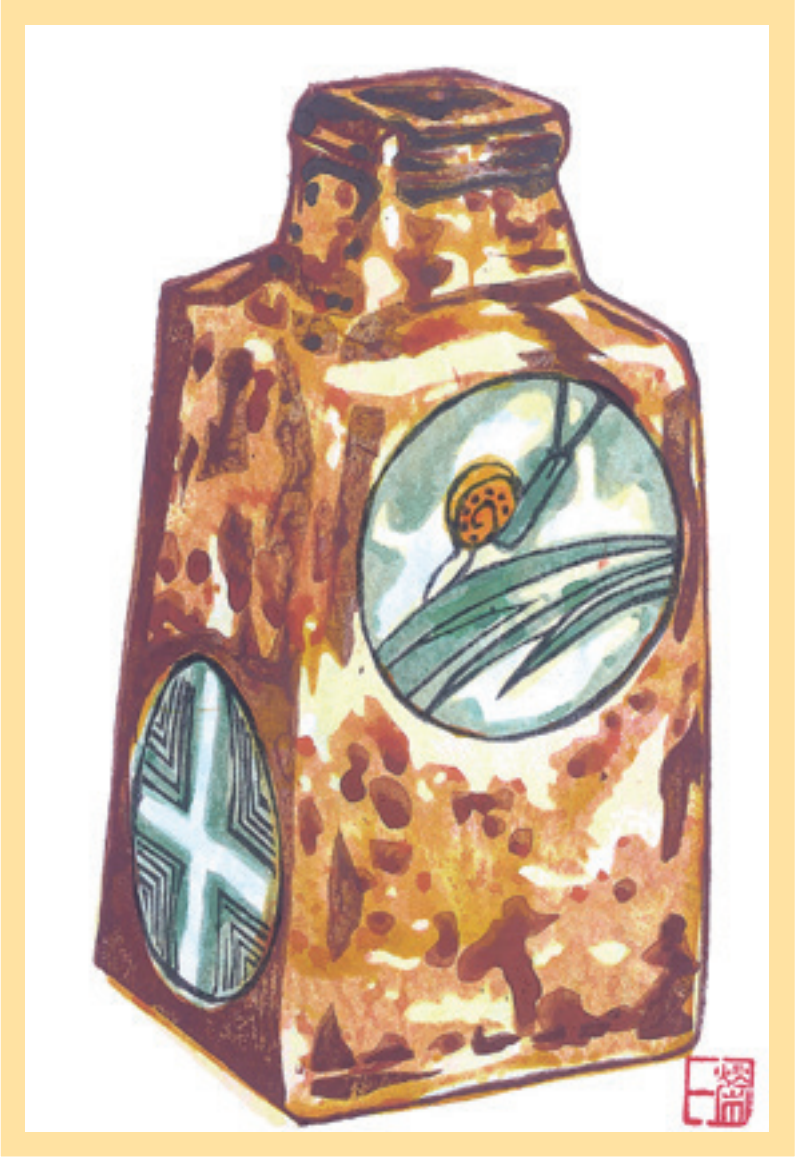
沖縄シリーズ 123 作　**双耳付線彫唐草紋大花瓶**

2000. 04. 24

これは高江洲忠さんの「双耳付線彫唐草紋大花瓶」です。シーサー作りの名人と慕われた高江洲育男さんの長男です。忠さんからいただいた個展の案内ハガキにこの作品が使われていました。そのハガキを元に木版画にさせていただいたものです。先代の育男さんのファンは、息子さんである忠さんに是非シーサーも作るように勧めていると言っていました。忠さんは、すばらしいシーサーの頭部を仕上げながら、「親父から直接習ったことはないのですが」と言って笑っていました。小さい頃から見よう見真似で引き継がれているのですね。

沖縄シリーズ 234 作　**盛上緑釉シーサー紋抱瓶**　2003. 04. 26

この木版画は、高江洲盛良さんの「盛上緑釉シーサー紋抱瓶」です。壺屋通りから少し入ったところの自宅に、定年退職後、ガス窯を築きプロの陶芸家としてデビューしました。アマ時代からいろいろな展覧会で入賞されていました。特筆すべきは“微笑むシーサー”の発明家として有名なことです。このシーサーは、気軽な土産物として人気があり、よく売れています。高江洲さんが関係者やお得意さんに配られた『1999 年のカレンダー』を知人からいただきました。その表紙に掲載された面シーサーに感動して、6 月 13 日木版画にしました。そして、7 月 1 日、工房を訪ねて見せていただいたのがこのすばらしい抱瓶です。沖縄シリーズも終わりに近付きましたので、難しく後回しにしていたものを彫りました。お訪ねしてからもうすぐ 4 年になります。



沖縄シリーズ 190 作　でんでん虫・バッタ四角錘花瓶

2001. 11. 10

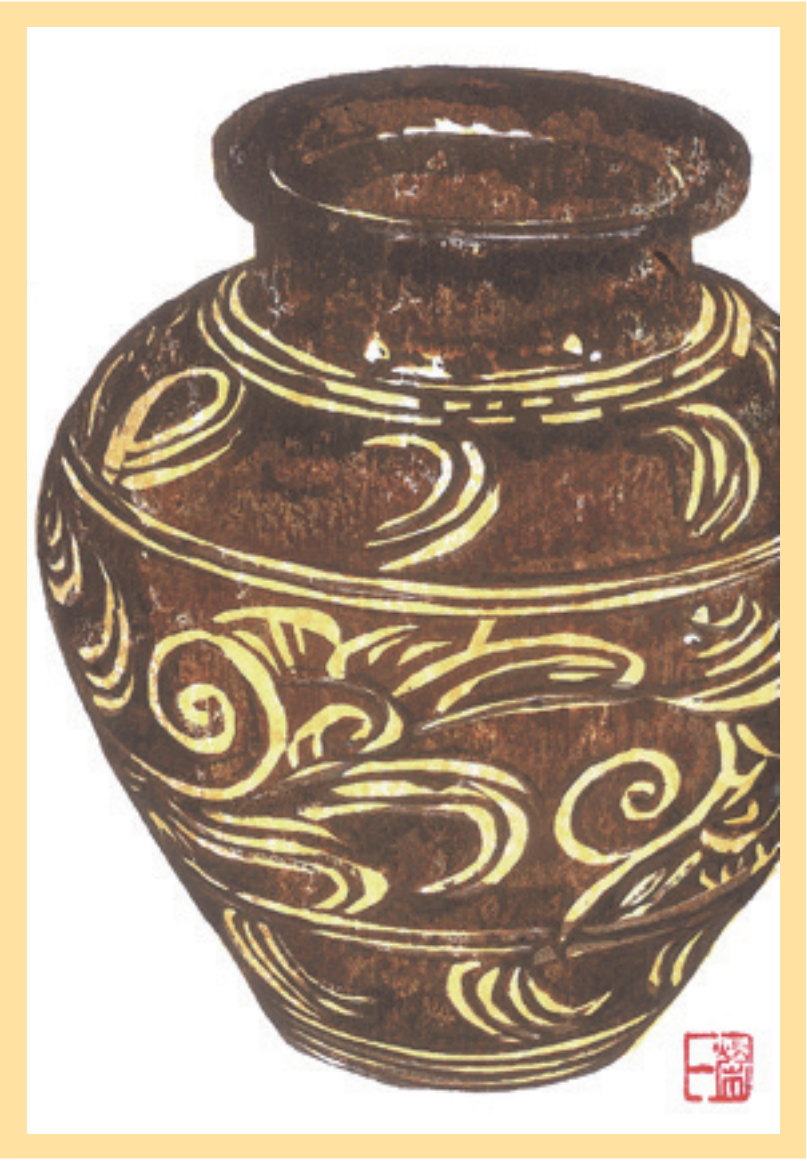
この茶色の花瓶は照屋佳信さんの作品です。並んでいる陶器の中から、妻はこれが良いと高さ 18 ㎝位の肉厚のこの花瓶を購入しました。緩やかな四角錐の上に同形の太い口元を付けています。中央の４面は細やかな線彫りで、草の上をすべる“でんでん虫”と幾何学紋、裏側に草を食む“バッタ”と花模様が描かれています。最近、この“でんでん虫”の姿を見なくなり、気に掛かりこの面を木版画にしました。照屋さんは茶、焦げ茶系統の作品を好んで焼かれています。

沖縄シリーズ152作　**唐草紋長四角花瓶**　2000.12.15

これは、照屋佳信さんの「唐草紋長四角花瓶」です。どっしりとした安定感のある長四角柱の胴、上部の口元は小さくキリリと絞られています。渋い黄土色の下地におおらかな唐草紋を真中に、上下には山高の波紋を線彫りで挟んでいます。唐草紋様の部分に藍色がかった釉薬が飛び散っています。妻はこれをとても気に入って購入し、棚に飾っています。肉厚で“信楽焼”のように重い花瓶です。

沖縄シリーズ146作　**唐草紋皿**　2000. 10. 26

照屋佳信さんが描かれた唐草紋のお皿です。手捻りで作られたお皿にすごいスピードで文様を描いています。釉薬の乗り、濃淡、筆の微妙なタッチが、焼き上げたときに筆のそのままの流れ具合や色の濃淡となって、すばらしい味を引き出すのです。何枚も同じ工程を手作業で造って行きますがそう数多くできません。１枚１枚はよく似ていますが、微妙に異なっています。それが機械生産と違うところでもあります。沖縄の土は火力に弱いので肉厚に作られどっしりとしています。佳信さんのつくる茶系統の釉薬の作品は人気がありファンも多いです。



沖縄シリーズ 214 作　**指掻唐草紋大花瓶**　2002. 07. 31

この木版画は「指掻唐草紋大花瓶」、作者は上江洲茂生さんです。2001 年２月９日、［読谷（やちむん）共同販売所］の小さな飾り座敷に置かれていました。後日、版をお送りして同販売所の方に作者を訊ねましたら、ハガキで丁寧に教えてくれました。この販売所は、読谷村に窯を置く作陶家の作品を陳列しています。品物は、比較的安価に販売されていますので人気があり、お客さんがよく見えています。この指掻きの技法は、線彫りのように繊細ではありませんが、おおらかで力強く、見る人に勢いと爽やかな気分を提供してくれます。黄色と焦げ茶の単純な色彩ですが５版５色摺りです。

沖縄シリーズ 59 作　**線彫牡丹紋花瓶**　1998.11.02

この木版画は、上江洲茂生さんの「線彫牡丹紋花瓶」です。この方の牡丹花は細やかな美しい曲線を駆使し、華やかな色は使っていないのに上品で美しく安定感があります。薄いクリーム、焦げ茶、青っぽい茶と黒、花は渋い茶系統の赤色が使われています。この版の元は 1994 年 2 月、大阪梅田阪急百貨店で開催された個展の案内ハガキです。上江洲さんは寒がりで、「大阪の個展はいつも 2、3 月で寒いので困る」と言っていました。「大阪人でもこの時期は寒いですよ」と応えました。そのハガキに上江洲さんは陶芸にかける言葉を「仕事は丁寧に丁寧に、且つおおらかさを忘れない」をモットーにしていると書かれています。お会いしたときの印象では、控えめでとても誠実、やさしい方とお見受けしました。作品にも現れるのですね。

沖縄シリーズ 193 作　**蓋付菊花紋壺**　　2002. 01. 09

この木版画は上江洲茂生さんの「蓋付菊花紋壺」です。鶯色の釉薬を壺全体に乗せて乾燥させた後、菊の花弁 1 枚 1 枚を丁寧に彫りこみ、その穴の凹みに、硬い目の白い釉薬を塗りこんで窯入れしているようです。球形の壁を壊さないようにナイフで花弁だけを彫りこむのは、根気と繊細な気持ちが必要な作業です。この壺は 2001 年 2 月、那覇市伝統工芸館の 2 階の売店で販売されていました。以前、エンジ色の菊花紋の扁壺を版画にしましたので、それを参考に彫りました。その扁壺は、現在、買われたのか売店にありません。木版画の場合は薄い色から摺り、濃い色を後から被せ、重ねていきますので薄い色は消されています。同じような濃さの場合は混ざり合って美しい配色に仕上がることがあり、そんなときは楽しく嬉しいです。

沖縄シリーズ 52 作　**象嵌菊花紋扁壺**　　1998. 09. 03

この木版画は上江洲茂生さんの「象嵌菊花紋扁壺」です。1995 年 2 月に大阪梅田阪急百貨店で開催された個展および即売会の案内ハガキに印刷されたものから版に起こしました。花びらの 1 枚 1 枚が崩れないように丁寧に彫りました。扁壺と言われていますが私の版は残念ながら丸壺のように見えます。「 扁壺 」は正面が平たく奥行きは狭い壺です。“象嵌”はあらかじめ下地のエンジ色の釉薬を壺全体に掛けた後、花びらのところをナイフで削り取り、その細かい穴に白っぽい硬い目の釉薬を埋め込み焼かれたものです。壺の表面は均一になっています。同じように“掻き落し”の技法でこの壺を作ると、始めに白の釉薬を全体に巡らせ乾燥した後、その上から表面にエンジ色の釉薬を掛けて 2 重の皮膜を作ります。それから花びらの部分を薄く削り取り白の釉薬をだします。この場合花びらの部分が少し凹みます。土の地肌まで出す場合は敢えて深く削りその凹凸を生かす場合もあります。

沖縄シリーズ 55 作　**線彫牡丹紋扁壺**　1998. 09. 19

この木版画は上江洲茂生さんの「線彫牡丹紋扁壺」です。読谷村立美術館の館長さんが、『読谷（やちむん）展』への出展等でお世話になっているので、「上江洲さんの工房へこれから挨拶に行くからいっしょに」と誘ってくれました。上江洲さんは、なぜ私達と館長さんが知りあいなのかと驚いていました。そして「白柳さんは、沖縄の方？　それとも親戚があるの」と聞かれました。沖縄のものばかり連続して版画にしていたからでしょう。私は、南風原町に親しい友人がいて、壺屋通りの方々にも大事にしていただけるのでと説明しました。この壺は、1990 年の 2 月、大阪梅田阪急百貨店で開催された個展の案内ハガキから版にさせていただきました。

沖縄シリーズ 56 作　刷毛目線彫牡丹紋扁壺

1998. 09. 24

この版は上江洲茂生さんの「刷毛目線彫牡丹紋扁壺」です。大阪梅田阪急百貨店での個展の案内ハガキで、1996 年 3 月に作成されたものを彫らせていただきました。花紋の色合いは渋く、茶色とくすんだブルーの釉薬で描かれています。沖縄の伝統を受け継ぎながら、新しい感覚を取り入れて美しい文様を創出されています。扁壺は昔の水筒のような形をしていて、牡丹紋の描かれている面は平らで奥行きは狭くなっています。

沖縄シリーズ 43 作　**線彫牡丹紋抱瓶**　1998. 07. 14

この木版画は上江洲茂生さんのすばらしい「線彫牡丹紋抱瓶」です。気品があってとても優雅です。抱瓶の中央は焦げ茶色の素地に黒の縦縞のラインが入り、牡丹紋が描かれています。牡丹の色合いは渋いピンクと赤色の混合色で、花びらの縁は青色の釉薬で彩られ、しっとりとして美しいです。左右の外側を網目模様で飾り、その網目の１つ１つに牡丹と同じ配色を使い細やかな技法で採られています。沖縄県南風原町の友人はとても気に入ってくれました。版の元は読谷村立美術館が発行した“しおり”で、館長の宮城元信さんからいただいたものです。

沖縄シリーズ 46 作　**面取牡丹紋抱瓶**　1998. 07. 31

この花紋の抱瓶は 1998 年 6 月、大阪阪神百貨店で開催された『ミニ沖縄フェスティバル』に［まじる商店］さんが展示販売されていたのを購入したものです。1997 年鶴見緑地で、沖縄行きを勧めてくれた長男の方にお会いできるかと期待し出かけましたが、あいにく他の地域を回っていて、ご主人と弟さんが来られていました。ご主人は沖縄の観光案内図書やパンフレットによく掲載される有名な方です。沖縄の伝統文化を紹介し、特に“壺屋焼”を販売しながら全国各地を巡っています。初心者の方にも親切に教えておられます。これは上江洲茂生さんの「面取牡丹紋抱瓶」で釉薬は渋い茶色系統でまとめられています。この方は県内のみならず多くの展覧会で《賞》を受け、大活躍をされています。

沖縄シリーズ 61 作　線彫唐草紋面取抱瓶　1998. 11. 21

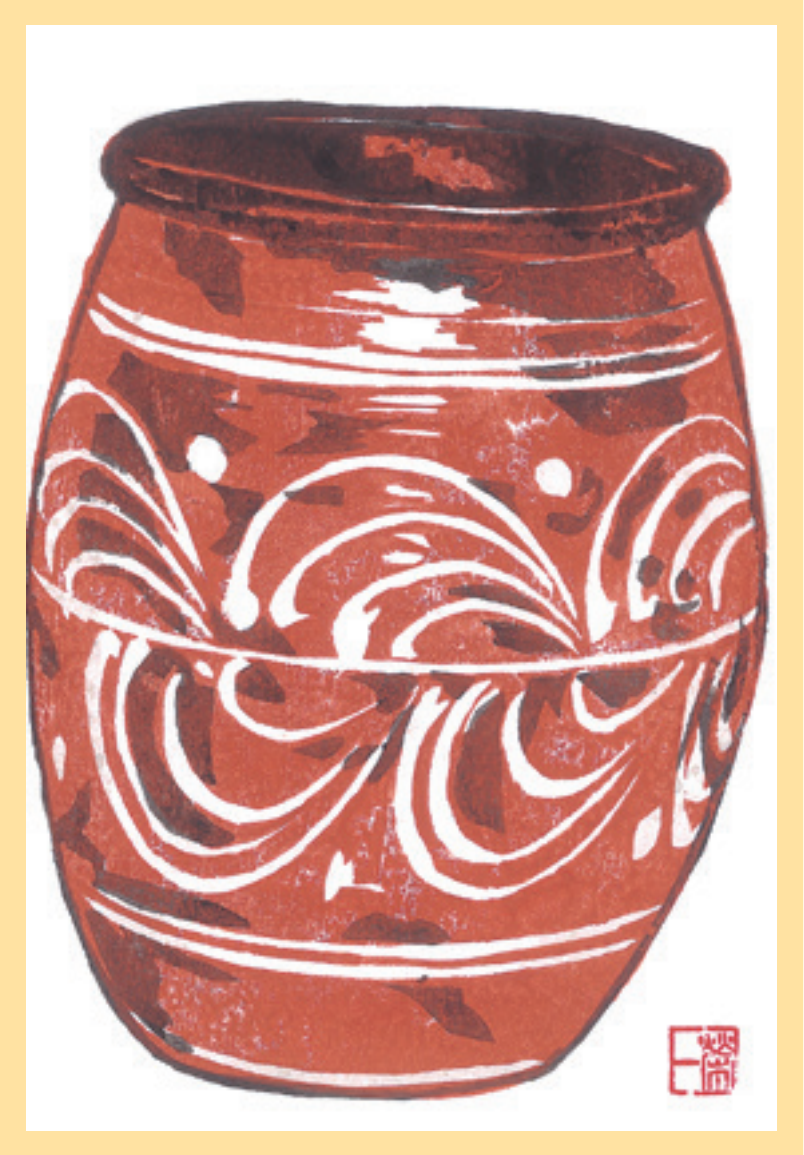
この木版画は、上江洲茂生さんの「線彫唐草紋面取抱瓶」です。1998 年 6 月、大阪阿倍野近鉄百貨店で開催された『ミニ沖縄博覧会』で購入したものです。茶と薄い肌色をバックに、濃いグリーンとブルーの暗い色で描かれた唐草紋が渋くすばらしいです。下段に胡麻模様の細かな斑点が広がり、一部分白っぽい釉薬が流れ遮って微妙な変化を付けています。手元にありますのでゆっくりと色を確かめながら摺りあげました。大きさは普通の抱瓶より二周りも大きく立派です。花瓶として使うのもいいと思いますが本棚の中に飾っています。

沖縄シリーズ 153 作　**透彫魚・波紋傘立**　2000. 12. 20

この版は、上江洲茂生さんの「透彫魚・波紋傘立」です。1997年７月１日より那覇市牧志の『沖縄三越ギャラリー』で開催された個展の案内ハガキから彫りました。立派な傘立てで玄関に置くのも贅沢です。中央に魚・波紋の透し彫りを施し、上下に幾何学的なラインを描いています。色合いもすばらしいです。上江洲さんは年賀用に、毎年陶器を題材に木版画を彫られています。その“版画”を10数点まとめて１枚の用紙に摺られ、額に入れて自宅に飾られていました。上江洲さんの作品を販売されている壺屋の陶器店にも同じ“版画”が飾ってありました。

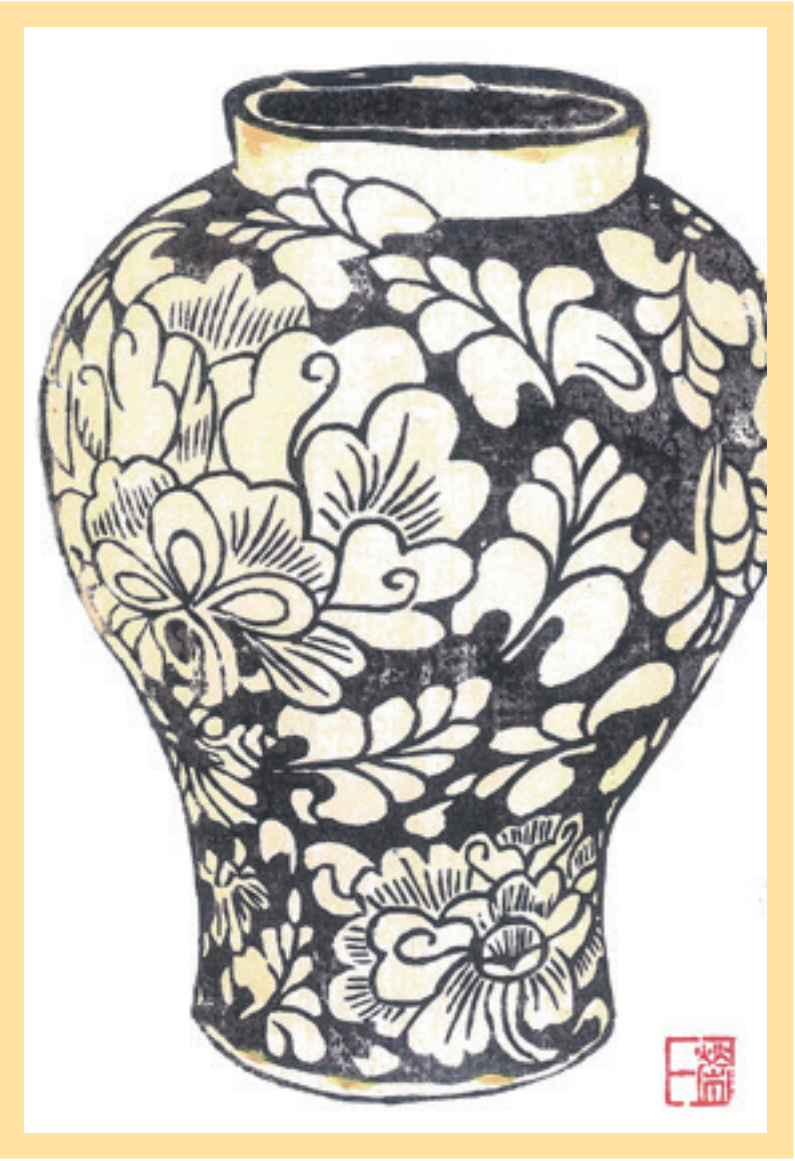
沖縄シリーズ117作　**指掻唐草紋大花瓶**　2000.02.04

これは読谷村立美術館の収蔵展示品、山田真萬さんの作品です。すばらしい指掻き円形模様の花瓶でとてもおおらかです。どこか人間国宝の金城次郎さんの作風に似ています。１階の玄関を入ると右側に事務室があり、その隣に陳列されています。陶芸作品の展示は狭い場所なので数は 10 数点です。この階は『読谷村立歴史民俗資料館』で、向かいの２室に民俗資料がたくさん展示されています。２階が美術館で大きなワンフロアの部屋です。1997 年『人間国宝　金城次郎展』が開催されていた場所です。この地は美しい史跡［座喜味城］の一角で、小高いところにあります。城の建物は復元されていませんが、流れるような曲線美の石垣が整備され残っています。



沖縄シリーズ 215 作　**イッチン唐草紋大花瓶**　2002. 08. 05

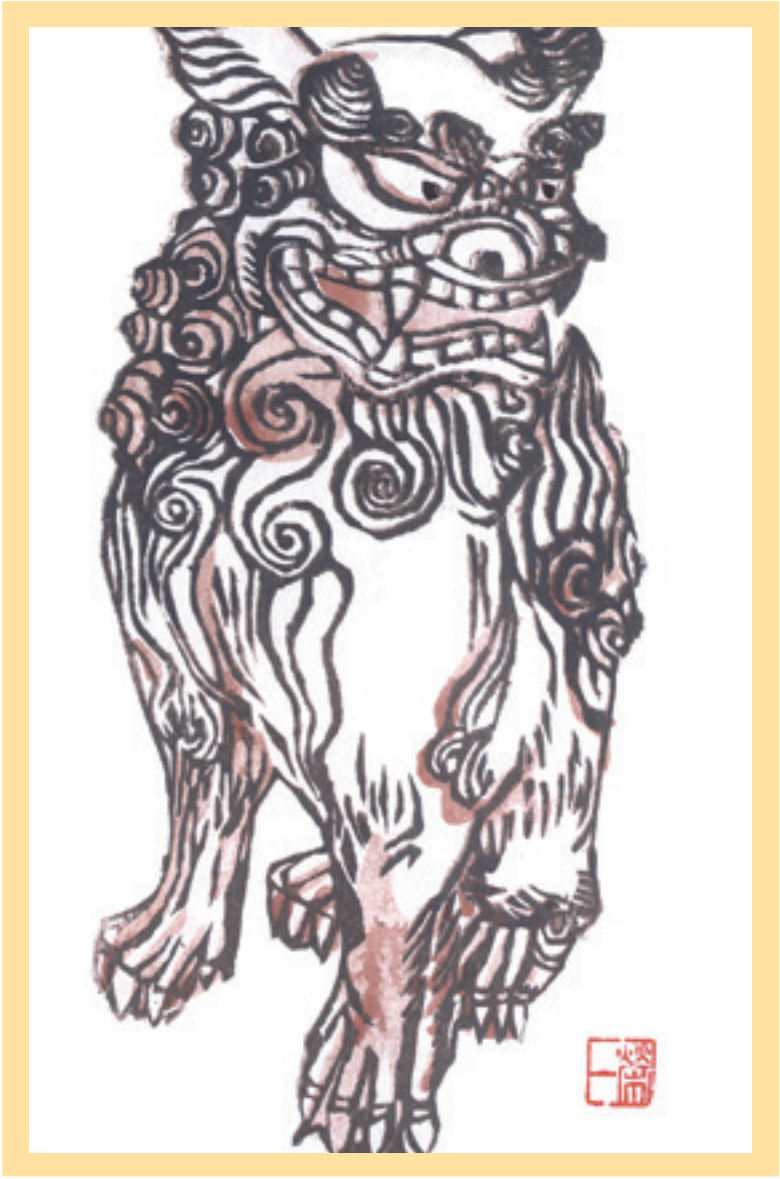
この木版画は「イッチン唐草紋大花瓶」です。2001 年２月９日、読谷村座喜味にある［北窯］の直売所の入口に菜種と桜を生けて置かれていました。花瓶にラベルが貼っていないので作者は判りませんでした。北窯は宮城正享、與那原正守、松田米司、松田共司、４氏の共同窯です。座喜味には２つの大きな窯があり、窯が雨に打たれないよう赤い屋根で覆われています。屋根は窯の作りにあわせて斜め上がりになっています。1992 年に開窯され、たくさんの作品を創出しています。飛行場や那覇市からは結構遠いですが、座喜味城や読谷村立美術館、同博物館、読谷山花織会館などを巡りながらこの読谷（やちむん）通りの窯元へやって来る人も多いです。そしてこの巨大な共同窯を見て驚きます。窯横に設置されているこの販売所は、作品の種類も多く価格も手頃で人気があります。周りはまだ原野が残っていますので、鳥の鳴き声があちこちから聞こえてきてのどかです。



沖縄シリーズ186作　**線彫唐草紋大花瓶**　2001.09.25

この木版画は、［読谷窯場共同販売所］に飾られていた美しい大きな花瓶です。濃いエンジ色をバックに、淡いクリーム色で唐草紋と牡丹の花を描いています。花瓶全体が曲線を駆使して形作られ、２色が優美です。細長い販売所の片隅に畳の縁台が用意されて大きな花瓶、壺等が置かれ、そこにこの花瓶もありました。版画では、繊細な曲線を手摺りするとき、馬簾の圧力で板の線が変形し歪んだりしますので、朴木の堅い部分を使います。堅い木は彫るのが大変で刃先の角度を少し変えただけで刃が折れてしまいます。ゆっくりと木に馴染ませながら削り取るのが“こつ”で、時間がかかります。実物に近い色が出せて良かったです。

シーサー



沖縄シリーズ 156 作　シーサー　阿形　朝日陶芸　2001.01.20

この木版画は糸満市にある朝日陶芸（有）の直営店で展示販売されていたすばらしいシーサーです。琉球ガラス工場、陶芸の工房が併設された敷地内に、広くて大きな直売店の建物が建っています。何台ものバスで買い物に来る大勢のお客さんを陶芸工房やガラス工場に案内し、最後に色鮮やかなガラス工芸品、すばらしい花瓶、壺、皿、シーサー等の壺屋焼が、整然と並んでいる販売店に入ります。入口近くの足元にこの大きな「シーサー」が置かれていました。作家は新垣光雄さんです。高さは１ｍくらい、まじまじと眺めた末に写真に撮らせていただきました。

沖縄シリーズ 172 作　**シーサー　阿形**　　2001. 06. 28

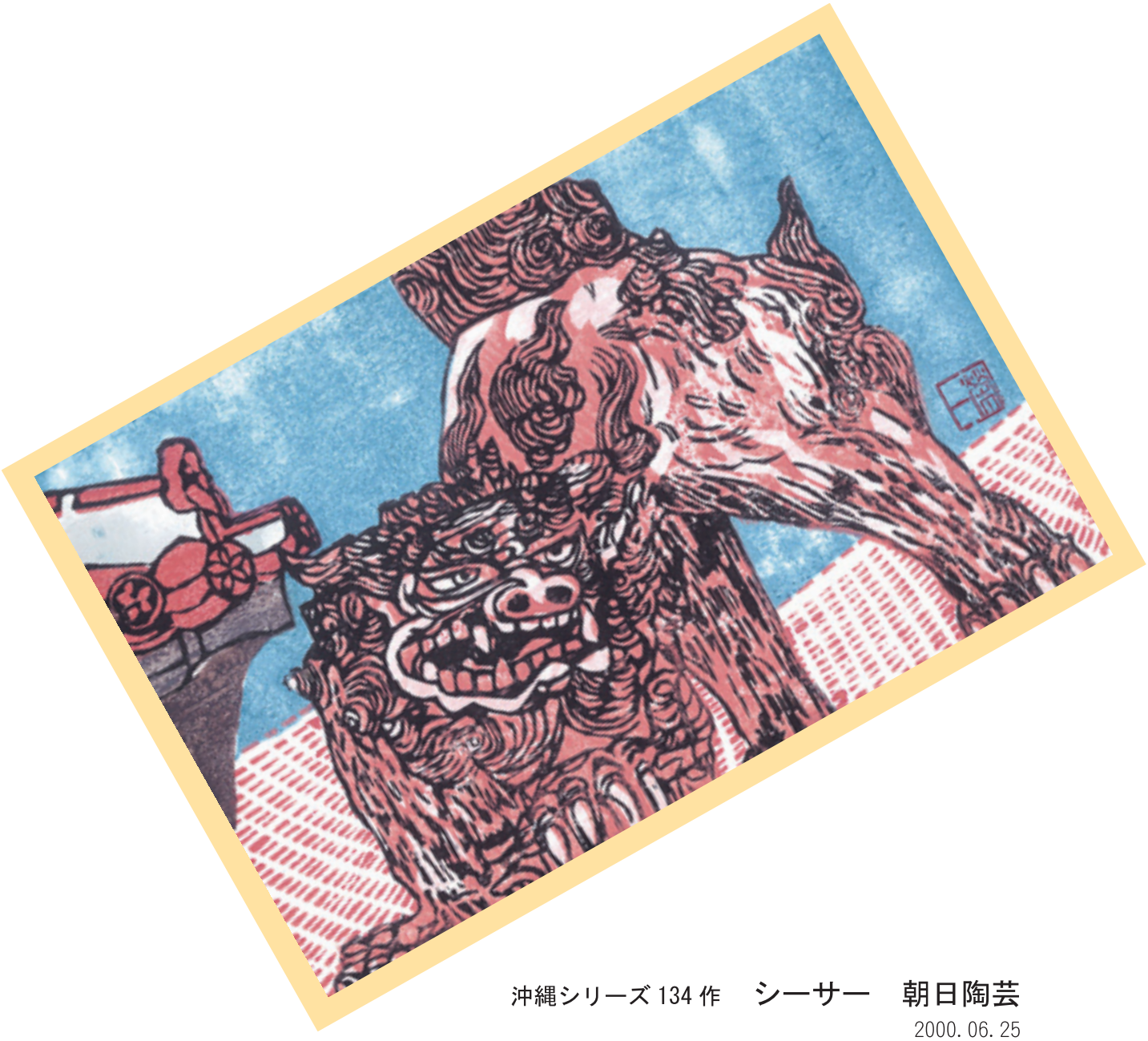
この木版画は、新垣光雄さんの工房［やちむん家］の入口に置かれたすばらしい「シーサー」です。読谷村立美術館・座喜味城から歩いてすぐ近くです。工房前の広場で白い鶏が数匹、のどかに遊んでいます。糸満市の大きな［朝日陶芸直売店］で展示されていた新垣さんのすばらしいシーサーに感動し、いつかお訪ねしたいと思っていましたので、お会いできて嬉しかったです。工房には獲物に飛び掛る姿勢のもの、壁掛け用の面シーサー、一般家庭用の門柱に飾る小型のシーサー等の作品が並んでいます。奥の部屋に沖縄サミットを記念して外務省へ旅発つ巨大なシーサーが出番を待っていました。２人で手を繋ぎ囲んでも届きそうにありません。若き現代の名工として輝かしい作品を作り続けていただきたいと願っています。

沖縄シリーズ 174 作　**シーサー　阿形**　　2001. 07. 06

この木版画は、新垣光雄さんの「シーサー」です。獲物を見つめて首を捻り目は鋭くそれを追っています。雌ライオンがレイヨウを狩る姿勢に似て、今にも飛び掛ろうとしているかのようです。顔は雄ライオンのように勇ましく厳しいです。新垣さんの工房［やちむん家］には、すばらしいシーサーが幾種類も飾られていて、さながら“シーサー美術館”のようです。絵画は何枚飾っていてもその画家が選んだ一方向からしか見ることができませんが、彫刻は作家が見て欲しい方向に置いていても、見る人が自由に角度を変えて鑑賞できます。楽しいひと時です。限られた時間を気にしながら写真を撮らせていただきました。“沖縄の伝統文化　シーサー”の魅力をリアルに紹介できるようがんばって木版に彫ります。新垣さんは現在、陶器製の仏像に挑戦されています

沖縄シリーズ175作　**シーサー　阿形**　　2001.07.09

この木版画は新垣光雄さんの［やちむん家］に飾られている「シーサー」です。斜め前方を見据えて縄張り争いの威嚇行為か得物に襲いかかろうとする姿勢をとっています。このような大きなシーサーはホテルや公民館の玄関にふさわしく、一般の家庭には大きすぎて置く場所に困ります。しかし、手軽な大きさのものは土産物として人気が高くよく売れています。これまで門柱に飾るものは厳しい表情が好まれてきました。最近、家庭の置物は張り詰めたものより滑稽さや温かみのある“微笑むシーサー”のようなものが受け入れられています。大阪でも門口にシーサーの置物を飾っている家を時々見かけます。



沖縄シリーズ 134 作　シーサー　朝日陶芸

2000. 06. 25

2000 年 4 月 20 日、沖縄南部観光のツアーで糸満市の陶器・ガラス工芸等の大きな土産物店に立ち寄りました。陶器や琉球ガラスの製品は隣接する工房で作られています。陶器工房入口の門柱にこのすばらしいシーサーが身構え出迎えていました。お寺の仁王像のようです。お店の朝日陶芸さんに作者をお聞きしましたら、読谷村座喜味に住まわれているシーサー作りの若手のホープ新垣光雄さんと教えて下さいました。バックの赤い屋根は沖縄の青い空と美しいハーモニーを奏でています。

沖縄シリーズ 171 作　**面シーサー　阿形**　　2001. 06. 23

この版画は新垣光雄さんの壁掛け用のすばらしい「面シーサー」です。2001 年２月９日、『読谷（やちむん）展』で拝見しました。白黒写真に覚えていた色を乗せて木版画にしました。そのときいただいた作品集には、作陶家の写真も掲載されています。新垣さんは若く、エネルギッシュで、すばらしいシーサーを多数世に送り出しています。工房［やちむん家］は座喜味城の近くにあります。教室を３つくらい合わせた工房では、数人の方が、それぞれの作品を仕上げています。壁側には大小さまざまな面シーサー、置物のシーサーが並べられており、中でも外務省の方に収めるシーサーはとてつもなく大きかったです。

沖縄シリーズ173作　**面シーサー　阿形**　　2001.07.01

この木版画は新垣光雄さんの壁掛け用のすばらしい「面シーサー」を横から眺めたものです。2001年2月9日、『読谷（やちむん）展』を拝見した後、光雄さんの［やちむん家］を訪ねました。坂道を少し下がると広場があり、白い鶏が走り回っており、のどかで田舎の農家のようです。周りに小さな森や藪があるので、卵を取りにハブが出ないのだろうかと心配です。一般的に壁掛け用には、肉付きの薄いものが多いのですが、この面シーサーは厚みがあって重量感があります。厳しい眼差しに迫力があり、左側に胴体や尻尾が隠れているものとして木版画にしました。不動明王の顔にどこか似ているような気がしています。

沖縄シリーズ 176 作　**面シーサー　阿形**　　2001.07.13

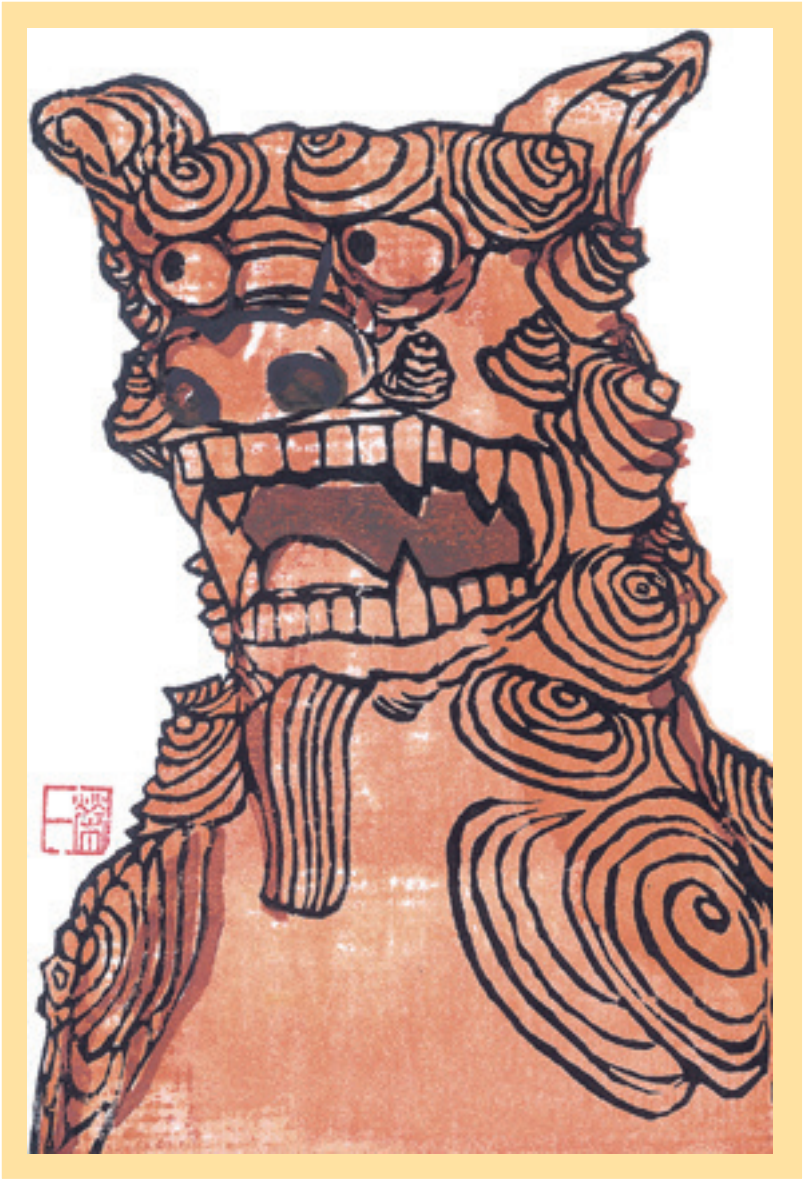
これは新垣光雄さんの壁掛け用の分厚い「面シーサー」です。斜め横から見ると立体感があり凄い迫力です。工房にはこのような大きな物から薄手の小さなものまで沢山並んでいます。このベンガラ色のシーサーは特にすばらしく、土に含まれる鉄分等の要素によって釉薬を施さない荒焼きで赤色に仕上がっています。登り窯の窯入れは、ひび割れや細かな先端部分が欠損しないよう神経を集中させて火の管理をします。灰釉や火の通り具合で思わぬ窯変が生まれたりし、楽しみなことも多いようです。読谷村立美術館から新垣さんの［やちむん家］までの道路沿いには民家がありません。座喜味城の周辺は畑地や林が所々に残っており、歩いている途中鳥の鳴き声の他は静かで村人にも会いません。沖縄ツアーは、観光地と大型の土産物店を移動するスポンサーに頼る旅です。何時の日か、美術館、博物館、伝統工芸巡り等を組み入れた観光ツアーが実施されることをひそかに願っています。私と妻は厚かましくツアーを抜けさせていただいて工房めぐりをしています。

沖縄シリーズ 143 作　**シーサー　屋根　玉泉洞**　　2000. 09. 22

　これは沖縄を代表する観光地［玉泉洞］にある民家集落の屋根に設置されたシーサーです。すばらしい顔付き、迫力満点です。昔、沖縄の“瓦葺職人”は厳しい台風から家を守るため、赤瓦を白い漆喰で頑丈に塗り固め、瓦が剥がされ、飛ばされないように造りました。考えられないような風と夏冬の温度差の中で漆喰に“ひび”が入り、劣化してたびたび被害に遭いました。そこで、職人は守護神であるシーサーを屋根に飾り、願いをかけたのです。長く納まっているのは丈夫な仕事をした証拠であり、名誉でもあります。いろいろな個性のあるシーサーが見られます。近年、鉄筋コンクリートの住宅が増えて手すりに小さなシーサーが置かれているのが目立ってきました。

沖縄シリーズ 157 作　**シーサー　進貢船　玉泉洞**　　2001. 02. 23

この「面シーサー」は“進貢船”の船尾に飾られている大きなものです。“進貢船”は琉球時代に活躍した貿易船で、中国をはじめ遠く東南アジアの諸国まで航海した、長さ 30 m、幅 8 mもある木造の大型船舶です。私が玉泉洞にあるこの船舶《南都丸》の展示場を見学したときは、復元作業中でほぼ完成していました。これは宜野湾市の写真家 島袋俊哉さんがすばらしい角度から撮影し送ってくれたものを使わせていただきました。大きな幅の狭い板を何枚も重ねて高さのある板を作り、立体感のある彫刻をしています。すごい迫力です。



沖縄シリーズ 131 作　**シーサー　残波岬ロイヤルホテル**

2000. 06. 07

この大きなシーサーは、読谷村にある［残波岬ロイヤルホテル］玄関前に据えられています。風光明媚な海岸線に建つこのすばらしいホテルには 1999 年 1 月 6 日、大阪からのツアー客として一泊しました。ホテルから眺める海は青くとても美しいです。海岸に下りますと海の透明度が高く底の岩や砂まではっきりと見え、飲料水にもなりそうでした。大阪へ帰ってからこのホテルへシーサーの作者を尋ねましたところ、企画担当の新垣香さんから「金城敏徳さんです」と教えていただきました。金城敏徳さんは、読谷村座喜味に住まわれており、番地から人間国宝　金城次郎さんの近くであることが判りました。

沖縄シリーズ 35 作　**チブル（頭部）シーサー**

1998.05.26

この木版画は朝日新聞社刊行の朝日写真ブック 15『琉球その後』に掲載されていた屋根の上にある「チブル（頭部）シーサー」です。大きな目は一点を凝視し、すばらしい迫力です。白黒写真を勝手に４色刷りにしたものです。後日このシーサーの所在を見つけました。元は壺屋の［東釜］の中屋根に設置されていたものを、今は文化財として沖縄県立美術館に保管、展示されています。壺屋の窯には複製されたものが元の屋根に置かれ、観光客が写真に収めています。私も横向きの姿を撮ってきました。

沖縄シリーズ 178 作　**シーサー　阿形**　　2001.07.22

この木版画は小橋川永勝さんの陶器製のすばらしい「シーサー」です。永勝さんの弟 小橋川太郎さんの店に置かれているのを見て、金属製だと思った私は、太郎さんの奥さんに「珍しくブロンズ製の置物も置くのですね」と尋ねましたら、「兄 永勝さんの“陶芸作品”です」とのこと。釉薬の色合い、金属的な輝き、滑らかさから疑いもなくブロンズと思いました。このシーサーはカール模様も美しく、胴体から尾に掛けて特に見事です。尾をハガキ版に収められなかったのは心残りです。色合いは濃茶を基調に黒まで使いどっしりとした安定感があります。顔は少し平たく、口は大きい。目は鋭く、凄みがあります。ガラスケースに入れて陳列するととても映えます。私の作業部屋の本棚に額入れして飾っています。毎朝、この版を眺めながら版画に向かい、仕事に行って、疲れて帰り、夜、食事を済ませてまた彫り、シーサーを眺めます。このような生活が長く続きました。

沖縄シリーズ 196 作　**シーサー　吽形**　　2002. 01. 24

この木版画は小橋川永勝さんの筋肉隆々のすばらしいシーサーです。阿吽の一対のうち、阿形のシーサーは以前に彫りました。このシーサーは吽形の口を閉じたものです。“阿形の方は大きく開けた口で福を取り込み、吽形はその福が逃げないように閉じ込めている”のだそうです。このシーサーは低い姿勢をとり、眼差しは鋭く今にも獲物に飛びかかろうとしているようです。阿形像と較べると全体に茶色が少し明く、胸から前足にかけてのカール模様がとても美しいです。ハガキの大きさに収めるため、尾を立てた部分がカットされ、全体を版にできないのが残念です。この版画ができて阿吽の一対が完成しました。

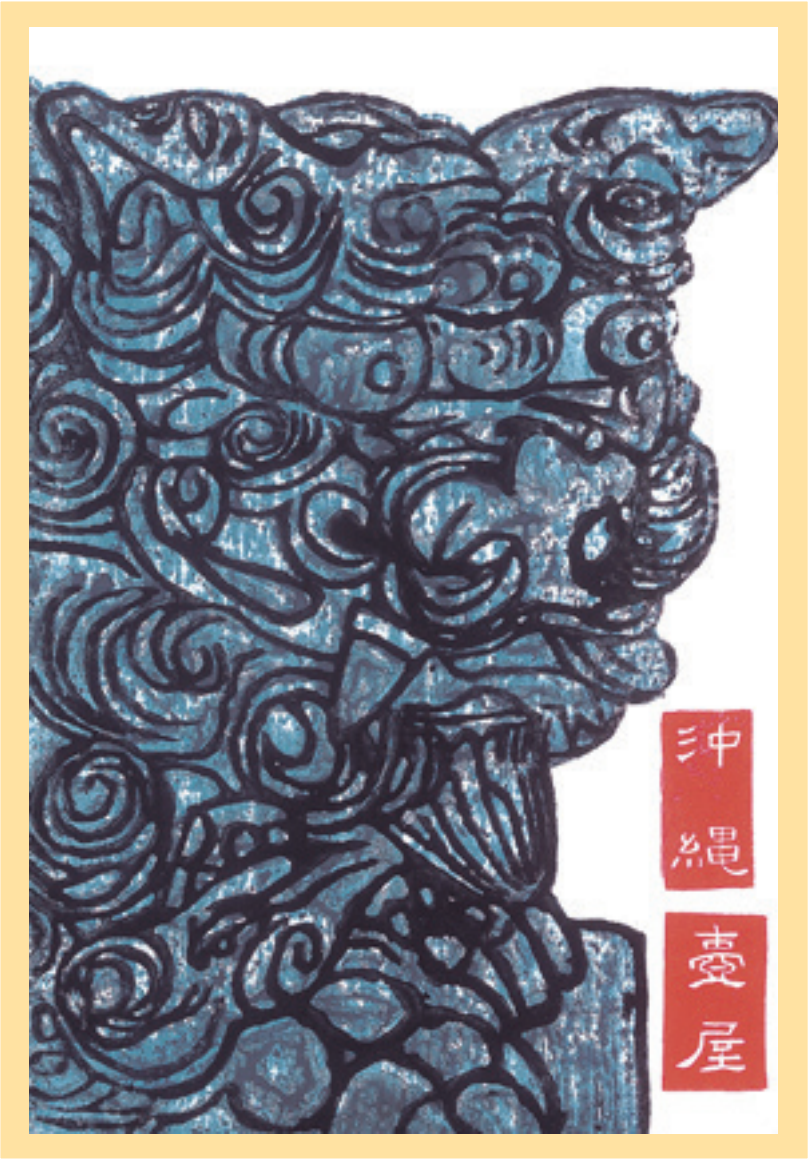
沖縄シリーズ 111 作　**屋根シーサー**　1999. 11. 18

　これは沖縄県立博物館に所蔵されているすばらしい「屋根シーサー」です。沖縄は毎年“台風”の通り道にあたり、職人さん等はきっと、祈るような気持ちで、屋根を丈夫な瓦と漆喰で塗り固め、仕上げたことでしょう。真夏の高温は瓦を膨張させ、冬は寒さで縮小させます。その繰り返しが、瓦と漆喰の間に亀裂を生み、長年経過すると、強い風によって瓦は吹き飛ばされます。屋根職人は、屋根に守護神であるシーサーを設置し飛ばされないことを願いました。現在は、赤瓦屋根の家屋も少なくなり、白い鉄筋住宅が多く見られます。

沖縄シリーズ 65 作　シーサー　阿形　まじる商店

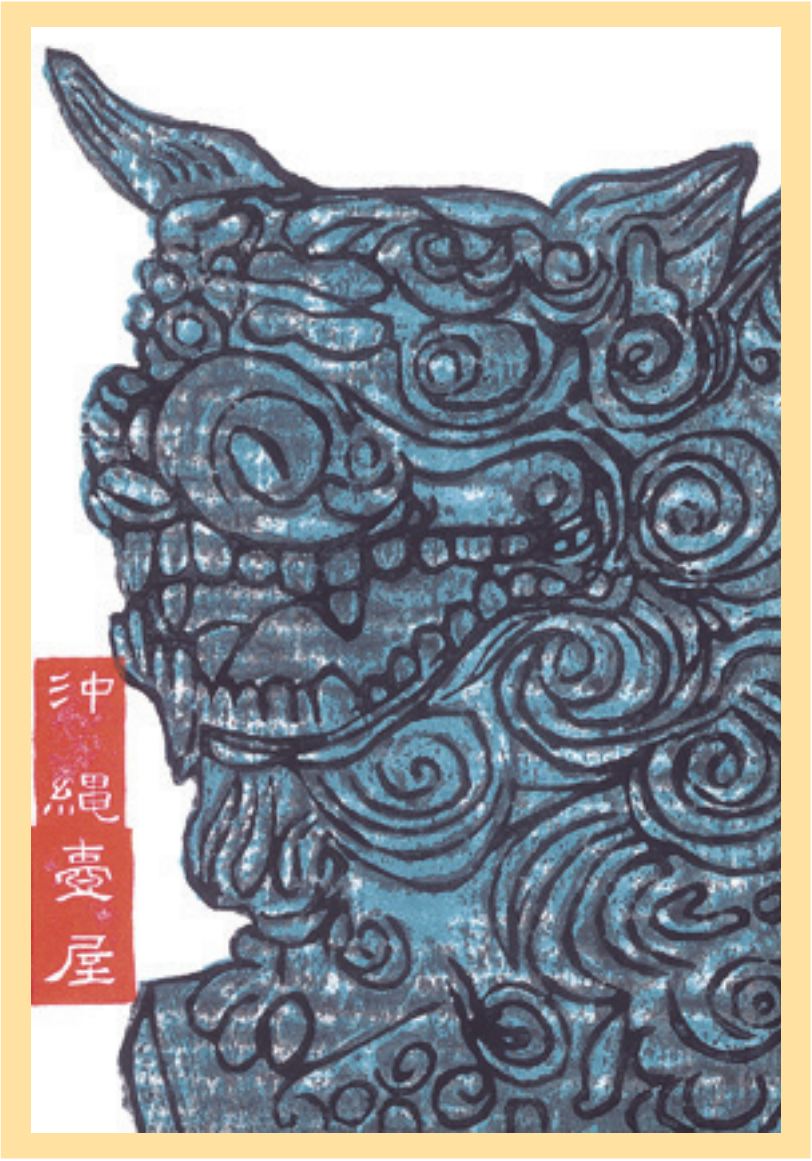
1999. 01. 14

この「シーサー」は島常賀さんの作品です。1999 年 1 月、２度目の沖縄観光に胸おどらせ、那覇市伝統工芸館、壺屋焼物博物館、沖縄県立博物館、浦添美術館、読谷村立美術館等を廻ろうと出かけました。安価なツアーは遅く出発し、帰りは早く帰るので丸一日しか沖縄観光をすることができません。［まじる商店］のご主人は、自宅に置いてある大切な陶器を私達に見せてくれました。その中にこのすばらしいシーサーがさりげなく置かれていました。背丈が 1 m位、顔付きは厳しく目もぎらぎらと輝いています。迫力に圧倒されました。



沖縄シリーズ３作　**シーサー　吽形**　　1997. 10. 29

　この木版画は「シーサー　吽形」で、阿形の像と向かい合っています。1997 年９月、私と妻がこの像を初めて眺めたときは美しく光沢があり、ブロンズ（青銅）で複製されたものと思っていました。しかし、それは、石膏で型を作り、その上から青銅色を塗ったものでした。毎年、沖縄を訪問しては那覇市伝統工芸館にお邪魔しています。毎回この像が出迎えてくれますが、沖縄の強い太陽光線がぴりぴりと差し込み、着色された青銅色の塗料は虚しく劣化、脱色し、白っぽくなって行くのが残念です。



沖縄シリーズ２作　**シーサー　阿形**　1997. 10. 25

　この木版画は那覇市伝統工芸館の玄関を入った受付の横にどっしりと据えられていた「シーサー　阿形」です。シーサー造りの名人、島常賀さんの作品です。とてもおおらかな表情です。写真に撮らせていただいたのですが細部まで彫りきれていません。元の像は壺屋焼の陶器ですが、これは石膏に複製し、着色したものです。阿吽形相の一対のうち口を開けた“阿形”の像です。沖縄では阿形の像は大きく口を開けて“福”を取り込み、吽形はその“福”が家から逃げないようにしっかりと閉じているのだそうです。

沖縄シリーズ 197 作　**面シーサー　黄土色系**　　2002. 03. 05

この木版画は岐阜県高山市『HGS 飛騨高山グリーン西山 木版画同好会』の作品交換会用に作成したもので、140 枚ほど摺りました。沖縄のシーサーは各自宅の門柱に阿吽の獅子を飾り魔除けにしています。遠くエジプトの“スフィンクス”が東へ移動し、伝播していくうちに変化し、沖縄では“シーサー”、京都や奈良等では“神社の狛犬”と言われています。私は仏閣の阿吽の仁王像も守護神ではないかと思っています。このシーサーは壺屋通りの［カカズ人形・陶芸店］に飾られていたものを版にさせていただきました。作者は島袋秀栄さんです。後日、電話で島袋さんは、「年齢も取っているのでシーサー作りも気が乗らないと作らない」と言っていました。私は「すばらしい技術を持っておられるのだからゆっくりと造り続けてください」とお願いしました。

沖縄シリーズ 198 作　**面シーサー　赤色系**　2002. 03. 10

この赤色版の面シーサーは、先に版にしました黄土色系の面シーサーを刷り上げてから５日後、なんとなく、版木の色を落として、よく見かける“赤っぽいシーサー”に摺り替えました。そして、仕上がった版を島袋秀栄さんにお送りすると、島袋さんは「黄土色と赤色系の２種類のシーサーを作っていた」と言って大変喜んでくれました。遠方から直接お電話をいただいてとても嬉しかったです。赤い面シーサーは［カカズ人形・陶芸店］に飾ってはいませんでしたから、あることも知りませんでした。「赤い版も良いのでは……」と勝手に摺ったのです。不思議なことが起こるものですね。

沖縄シリーズ 70 作

シーサー　阿形　那覇市伝統工芸館　1999. 02. 10

　これは那覇市伝統工芸館に常設展示されているすばらしい「シーサー」です。シーサー作りの名人、高江洲育男さんの作品です。色合いは美しく、胡麻のような黒い斑点も複雑で木版に彫るのに苦労しました。胴体部分は空洞で、縄のようにした粘土を轆轤を回しながら積み上げて成形していきます。シーサーは両耳を大きく横に広げ、口を大きく開けて獲物をすごい迫力で威嚇しています。

沖縄シリーズ 53 作　**シーサー　阿形　沖縄石油：平安座**　1998. 09. 12

この版は高江洲育男さんの「シーサー」です。1997 年 11 月 16 日、育男さんの追悼会場で故人を偲ぶ『作品集』を出版してみようと、誰言うことなく話が持ち上がりました。1998 年 2 月 1 日、企画委員が集まって編集作業に入り、50 年の作陶生活、陶芸を介して世界を駆け巡った活躍、多くの人々との出会い等の写真および関係資料を選択して、同年 5 月 16 日『土捻り 50 年　壺屋に生きる』が刊行されました。（あとがき：編集委員一同より）また、壺屋焼物博物館では『現代の名工　高江洲育男・陶歴 50 年展』（1998 年 5 月 12 日～ 24 日）が開催されて大好評でした。この建物は同氏が壺屋の発展を考えて建設に尽力されたのですが、完成をみないまま他界されました。同博物館長は、「この建物が完成すれば高江洲さんの『陶暦 50 年展』を開催しょうと約束していたのに」と遺作展になったことを悔やんでおられました。この撮影・制作・印刷にあたられたのは（株）近代美術さん、そして写真家の島袋俊哉さんです。作品集は大変好評で、第 1 回目に刷られた分はすぐ品切れとなり、増刷した中の一部を私に送ってくれました。先に同氏が撮影された金城敏男さんの作品集『土と炎　一筋』に続いてすばらしいものです。私はその中から一番感動したシーサーを版にしました。それは［沖縄石油］（平安座・1992 年）の玄関ゲートで来客を迎えています。シーサーは沖縄の“家”の守護神です。阿吽形相の獅子の姿を表現しています。

沖縄シリーズ 71 作　**シーサー　阿形　神原中学校**

1999. 02. 14

この版は壺屋近くのひめゆり通りに面した神原中学校の校門に据えられているすばらしい「シーサー」です。シーサー作りの名人高江洲育男さんが“子供たちが健康で心豊かに逞しく育ってほしい”と真心を込めて制作したものです。すごい勢いで見る者に迫ってきます。この版は、写真集『手捻り 50 年 壺屋に生きる』に掲載されており、島袋俊哉さんが撮影したものです。沖縄へ出かけると必ず壺屋通りを散策しますので、実物を拝見してきました。像はもう少し濃い茶色です。

沖縄シリーズ 54 作

シーサー　阿形　仲里酒造：久米島　1998. 09. 16

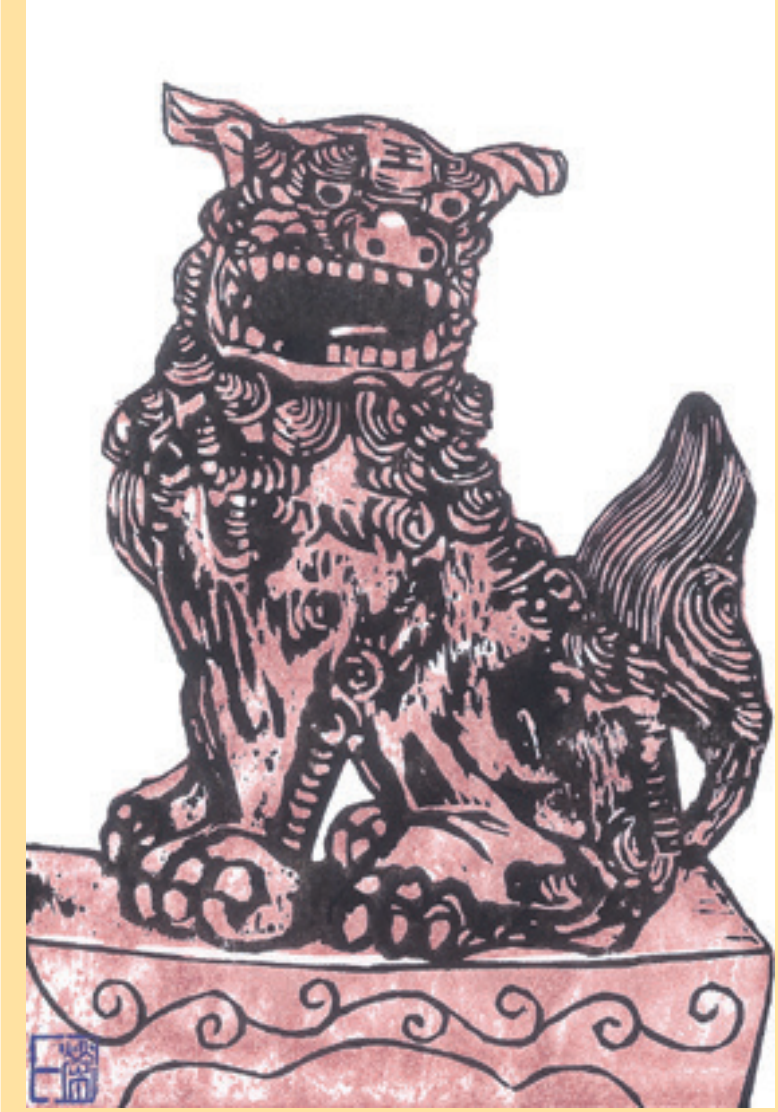
この木版画は高江洲育男さんの「シーサー」です。同氏の作品集『土捻リ 50 年　壺屋に生きる』から彫らせていただきました。琉球の銘酒、“久米島の久米仙”で有名な［仲里酒造］さんの玄関に据えられています。これも島袋さんが現地へ赴き撮影して来られました。1998 年 7 月、大阪阿倍野近鉄百貨店で『沖縄の味と技』と題して『ミニ博覧会』が開催され、“久米島の久米仙”を購入しました。住所や氏名を記入しましたので、その後、大阪で開催される『沖縄展』ごとに案内ハガキをいただいています。沖縄の［まじる商店］さんや福生市の［沖縄グラスコーラル］さんに会えるし、ついでに泡盛も購入できます。まさかその［仲里酒造］さんにこの版をお送りすることになるとは思いもよらなかったことです。注：1993 年社名変更［久米島の久米仙］

沖縄シリーズ72作　シーサー　阿形　海洋博覧会
1999.02.18

　このすばらしいシーサーは、名護市の海洋博覧会記念館にある高江洲育男さんの作品です。ライオンやトラなど猫科の動物は、このような攻撃姿勢で身構え獲物に襲いかかります。この版は、写真集『手捻り 50 年 壺屋に生きる』に掲載されており、島袋俊哉さんが撮影しています。名護市役所の建物には、数多くのシーサー（52 体位）が飾られており、走行するバスの車窓から眺めて驚きました。"シーサー博物館"のようで、何時かゆっくり見てみたいと思いました。

沖縄シリーズ 81 作　**シーサー　阿形**　　1999.04.17

この版画は高江洲育男さんのシーサーです。『土捻り 50 年 壺屋に生きる』の作品集から木版画にさせていただきました。ぎょっと見開いた眼差しは鋭く正面を凝視し、何かを訴えかけているようです。同じようなシーサーを作っていても個性というか、1 点 1 点手作り（手で粘土を捻って形作る）することによって多少違った雰囲気を作品に漂わせています。作者の微妙な意気込みやその時の勢いが作品に影響しているので不思議です。高江洲さんは、一時期、大阪市住吉区に疎開されていたと伺い、親しみは一層深くなりました。もう少し長く、すばらしい作品を作りつづけて欲しかったと思いました。そうすればお会いできたのに。今は御長男高江洲忠さんが名人の跡を継ぐようにお客さんから依頼されて、シーサー作りに励んでいます。すばらしいことです。



沖縄シリーズ 148 作　灰掛手捻台付シーサー　阿形

2000. 11. 02

　これは高江洲育男さんの力強い「灰掛手捻台付シーサー」です。口を大きく開けた阿形像で 20 ㎝位ですが、もっと大きなシーサーに見えます。台に唐草紋が彫られています。私が子供の頃、切手収集が大流行しました。そのとき、『見返り美人』という縦長の記念切手に人気が集中し、首を回したこの像を見て昔懐かしく思い出しました。恐ろしい顔付きですが親しみを感じます。

沖縄シリーズ 140 作　手捻緑釉シーサー　吽形

2000. 08. 15

これは織部焼で有名なグリーンの釉薬を全体に施したシーサーです。高江洲育男さんの作品集『手捻り 50 年 壺屋に生きる』から木版画にさせていただきました。緑の濃い部分や影などを、少し誇張して仕上げました。このシーサーを眺めていると目が合って睨まれ、思わず笑ってしまいます。

沖縄シリーズ 133 作　**チブル（頭部）シーサー**　2000. 06. 19

これは 2000 年 4 月 21 日、高江洲忠さんの直売店［育陶園］で写真に撮らせていただいた「チブル（頭部）シーサー」です。目を輝かせ、大きな口を開けすごい形相で獲物に迫っています。壺屋通りのお店の裏手に高江洲さんの工房があり、私達が訪ねたとき忠さんは中型のすばらしいシーサーを作っておられました。

沖縄シリーズ 150 作　**壁掛シーサー　一対**　2000. 11. 15

この版画は高江洲育男さんの焼締めの「壁掛シーサー」で、阿吽の一対です。獅子の周りには蔦が広がり、まるで緑のジャングルのなかにいるようです。育男さんの作品集『手捻り 50 年　壺屋に生きる』から木版画にさせていただきました。ハガキ版で小さいですが、勢いがあり圧倒されます。長男の高江洲忠さんは「シーサー」の注文を受け、全力をあげて造られています。とても嬉しいことです。

沖縄シリーズ 89 作　面シーサー　カレンダー 1999

1999. 06. 13

これはすばらしい面シーサー、高江洲盛良さんの作品です。1999 年に同氏が作成した“カレンダー”の表紙を飾ったものです。親しくしてくれた（株）近代美術の営業マンの方から、「一席設けましょう」と［枝里］さんというしゃれた居酒屋さんに誘われ、妻と遠慮なくお世話になりました。その時、いただいたのがこのすばらしい“カレンダー”です。高江洲さんはバスの運転手をしながら陶芸活動をされてきました。定年退職後、待望のガス窯を自宅裏に設置し、創作活動をされています。国際通りで陶器を扱う多くのお店は、“微笑むシーサー”を販売していますが、その作者が高江洲さんで、爆発的な人気商品になりました。今もたくさん売れていますので作り続けておられます。

沖縄シリーズ 110 作　**シーサー　玉泉洞**　1999. 11. 13

これは沖縄の観光名所 玉泉洞（鍾乳洞）の入り口の［天恵の階段］と名付けられた螺旋階段に据えられているすばらしいシーサーです。この獅子の目には“黒目”が描かれていません。そこで、この施設の経営者に、作者のお名前と住所、シーサーの目に黒眼が描かれていない理由をお尋ねしましたところ、社長さん自ら回答をいただきました。作者は高安康一（作陶家名禧顧）さん。目は見る人がどこから眺めても見えるよう、そして獅子からは、すべての方位を満遍なく眺められるようにということだそうです。太陽の光のようにすべてに恩恵を放つようにとの、崇高な願いが掛けられていたのです。話はそれますが、私の勤務地近くの大阪市住吉区浅香にある公園（前大阪市交通局我孫子操車基地）に、黒目の描かれていない大きなすばらしい「シーサーの像」（金城実さん作）があります。

沖縄シリーズ 220 作　**シーサー　吽形**　2002. 10. 19

　このすばらしい吽形のシーサーは、照屋晴美さんの作品です。沖縄のシーサーは“荒焼”といって、少し低い温度で釉薬を使わず“登り窯”で焼き上げるのが一般的です。現在、壺屋の町は住宅地と隣接しているため、薪をくべてもうもうと煙を上げることが制限され、規制されています。そのため、多くの陶芸家は、読谷村の方へ新しく登り窯を築いて移転されました。壺屋に残られている方は、規制のかからないガスや電気窯に替えて仕事を続けています。茶色は粘土の地の色で白色は釉薬です。女性のシーサー作家は珍しいと思います。このシーサーは迫力があってすばらしいです。シーサーは顔の表情が大切で、次に全体の姿、最後に巻き毛の美しさが要求されます。続いて照屋さんの阿形の像を版にします。

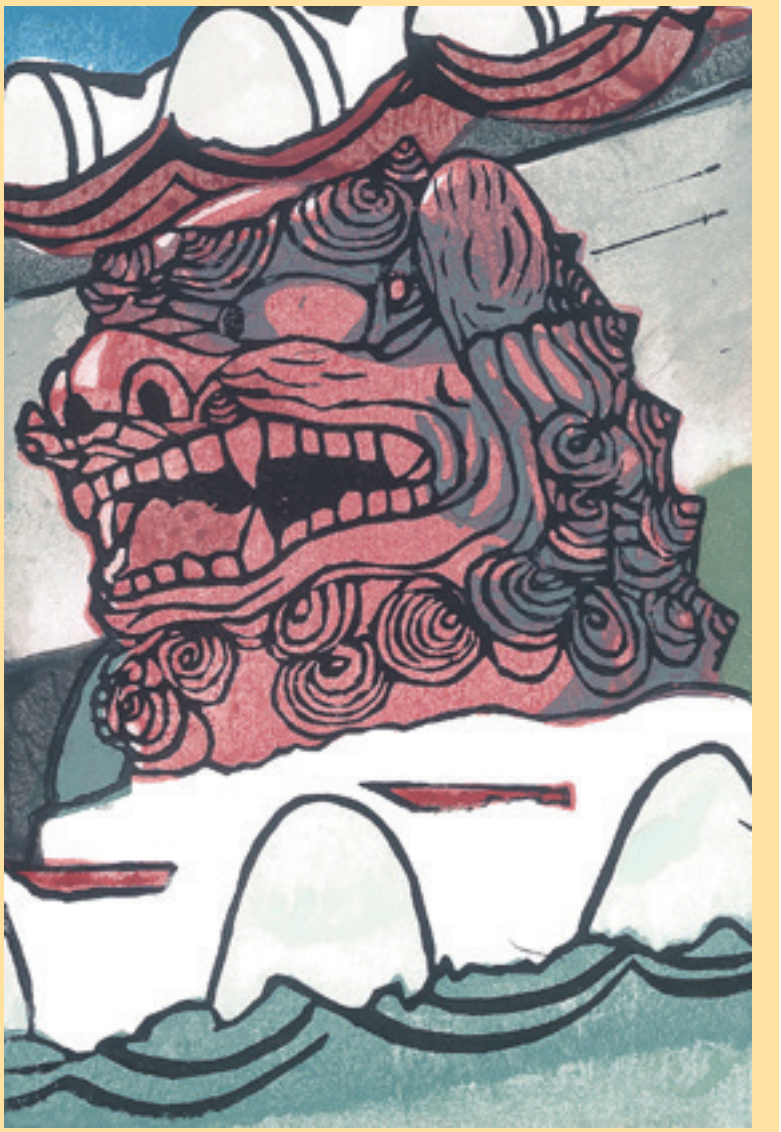
沖縄シリーズ 222 作　**シーサー　阿形**　　2002. 11. 07

　このすばらしい阿形のシーサーは照屋晴美さんの作品です。シーサーの顔は凄く厳しく迫力があります。茶色の部分は粘土の素地のようです。薄いねずみ色で全体を覆い、影の部分を茶と焦げ茶で凹凸を表現しています。この姿は威嚇し、獲物を狙う姿勢で、飼い犬や猫でも脅すとこのように身構え反撃してきます。美しい姿です。尻尾まで全体を版に収めるため、板を斜めに彫りました。シーサーはエジプトの巨大なスフィンクスが変化したものと言われています。エジプトから東へ険しい山を駆け、大小いくつもの川を渡り、大きな砂漠を横切り、日本海を超えて長い年月を経て伝承されてきました。そう考えると感慨も深いです。スフィンクスはエジプト王家の権力の象徴として彫られました。王墓の“守護神”として各地にたくさん残っています。大きなものでは高さが 20 m、全長 73. 5 mもあります。人間の頭にライオンの体を持った空想上の生き物です。本土におけるスフィンクスの伝承は神社の狛犬です。沖縄のシーサーは、一方が大きく口を開けて福を取り込み、もう片方はその福が逃げないように口を閉じているそうです。お寺の阿吽の仁王像も何か関係があるような感じがします。

沖縄シリーズ 177 作　**シーサー　阿形　南窯**

2001. 07. 16

この木版画はすばらしい「シーサー」で、壺屋通りの壺屋焼物博物館近くの［南窯］（フェーヌカマ）の前の喫茶店にあります。荒焼（アラヤチ）の専用窯・［南窯］の前にあるこの喫茶店は、道路より 10 段くらい高いところに入口があります。壺屋通りは陶器の専門店街で直販店が多く、よい品物を安く購入できます。これまで沖縄ツアーを 5 度、その度にこの壺屋のメイン通りを散策してきました。最近、本通りから脇道があるのに気付き入り込んで楽しんでいます。このシーサーは口を大きく開けていますので、頭から顎までが短く顔が扁平に見えます。どなたの作品でしょうか。次回、あの喫茶店に入って冷たいミルクを飲みながら作家の名前を教えていただこうと思っています。



沖縄シリーズ 126 作　**シーサー 阿形　東窯**

2000. 05. 07

これは壺屋の［東窯］（アガリヌカマ）に据えられている屋根シーサーです。厳密には「チブル（頭部）シーサー」です。この像は“沖縄の顔”として有名です。沖縄に関する文化、芸術、観光等の文書や図書等に、写真や挿絵で紹介されていてよく知られています。壺屋通りを散策する多くの観光客はこのシーサーを写真に収めています。沖縄県立博物館にこの原型の像が大切に常設展示されています。東窯は“上焼”（ジョウヤチ）と言って釉薬を施して焼く専用の窯でした。他方“荒焼”（アラヤチ）と言って灰釉や土の素材だけで焼く窯もあり、すばらしい実用的な甕や壺が主として作られました。

沖縄シリーズ109作　**面シーサー**　1999. 09. 23

これは那覇市前島の洒落た居酒屋［エリー］さんのお嬢さんが、作成したすばらしい「面シーサー」です。1999年1月、(株)近代美術の川端、島袋、安慶名さんに招待されて、エリーさんでご馳走になりました。ここのお嬢さんが学校の先生に習って作られたものです。シーサーの顔は、おおらかで伸び伸びとしています。学校では、壺屋の伝統工芸を理解し、人間国宝　金城次郎さんに続く人材を生み出し、育むために授業でも果敢に取り組んでおられます。

沖縄シリーズ 112 作　紅型　芝居幕　守禮の邦 1999. 12. 03

これは宜野湾市に工房を構える安里和雄さんのすばらしい紅型です。大きな芝居幕を３枚のハガキ版画に分けて彫りました。1997 年 9 月 24 日、初めて沖縄空港について向かったのが那覇市伝統工芸館です。２階の売店の壁に高さ 2. 5 m、横幅７m位のすばらしい「紅型　芝居幕」が飾られていました。沖縄の伝統的な風物が美しく描かれています。豪華な紅型幕を写真に撮らせていただきました。この紅型をハガキ版の木版画に収めるには、図柄が細かすぎるのと色数が多いのとで諦めていました。しかし、３枚に分割して彫ればできるのではないかと木版に挑戦しました。1 枚目は首里城と国王の版です。1999 年 1 月、再び、同工芸館を訪ねたときは、南の強い日差しの影響で白い木綿の布が少し焼けて、美しかった色も褪せていました。中庭のガラス窓から太陽の光線が差し込んだようです。

沖縄シリーズ 116 作　紅型　芝居幕　魚を運ぶ漁師　2000. 01. 28

これは安里和雄さんが作られた、巨大な「紅型　芝居幕」 魚を運ぶ漁師の部分です。画面右側の部分を木版画にさせていただきました。飾っていた那覇市伝統工芸館に作者のお名前を教えていただき、中央の 1 枚目をお送りしましたら、思いもかけず、安里さんから直接お電話をいただきました。感激です。喜んでいただいたので私も「彫ってきて良かった」と力強い励ましを受けました。色数は 34 色です。糸満市の漁港風景でしょうか。頭の上に籠を乗せて魚を運んでいます。その後ろに小型船を操る漁師が描かれています。何度もやり変えながら彫ったり摺ったりしましたので 1 ヶ月を要しました。この芝居幕の紅型 3 枚組は後 1 枚、左側を作成すれば仕上がります。版画は拙いものですが、実物はすばらしく色彩も鮮やかです。沖縄の風景が温かく取り入れられています。

沖縄シリーズ 145 作　紅型　芝居幕　琉球舞踊

2000. 10. 21

これは芝居や劇場幕に使われる大きな紅型を３枚に分けて木版画にしたものです。左側の部分に四竹を握りながら琉球舞踊を舞う女性が、右後方に備中鋤を掲げて農作業をする男性の姿が描かれています。全体の図柄は沖縄を代表する題材が彩色豊かに描かれています。いつか木版画にしたいという思いがやっと実現しました。これほど巨大な幕を描き、紅型で染め上げるのは大変だったろうと作者の安里和雄さんに敬意を表しています。

沖縄シリーズ 167 作　**紅型　暖簾　シーサー　吽形**

2001. 05. 28

これは宜野湾市で紅型工房を営む安里和雄さんのすばらしい「シーサー」の紅型暖簾の左側半分です。以前、那覇市伝統工芸館の売店の入口壁面に安里さんが制作した紅型の“芝居幕”が飾られていて、その幕を３枚に分割して木版画にさせていただきました。その木版画をお送りしたところ大変喜んでいただき、電話で「次回沖縄に来たら工房に立ち寄ってください」と温かいお招きをいただきました。妻と２人、厚かましく工房を訪ね、そこで見せていただいたのがこの暖簾です。モスグリーンを背景に親しみの湧く彩色豊かなシーサーが一対描かれています。ハガキ１枚に吽形のシーサーを彫り、続いて阿形を彫る予定です。シーサーは遠くエジプトのスフィンクスがシルクロードを通って渡ってくる間に変化し、沖縄ではシーサーに、本土では狛犬になったと言われています。

沖縄シリーズ 168 作　紅型　暖簾　シーサー　阿形

2001. 06. 04

これは安里和雄さんのすばらしい「シーサー」の紅型暖簾です。先の左側に続く右側の半分です。安里紅型工房を見学する機会を与えて下さいました。数人の技術者が黙々と作業をしている大きな作業台が何台も置かれている部屋は、染料を薄める溶剤の匂いが強く鼻につきます。窓際のあちこちに各種紅型が吊るされ、乾燥後の次の工程を待っています。どれも色鮮やかです。真近くで型染めしている作業を見せていただきました。注意深く型紙の上から刷毛で着色していきます。型紙は思ったより厚くがっちりとしています。型紙の彫り、削りぐあいが作品の善し悪しを決めます。厳しい世界です。

沖縄シリーズ 181 作　**紅型　暖簾　野菜図鑑** 2001.08.18

これは宜野湾市在住の［安里紅型工房］安里和雄さんのすばらしい「野菜図鑑」の紅型暖簾です。安里さんの工房を後にするとき「ちょっとちょっと」と呼び止められてプレゼントされたのが、薄いグリーンで野菜の図柄だけが縁取りされた、彩色されていない麻布です。わたしがこの布の野菜をカラーにして木版画にさせていただこうと決めました。嬉しい贈り物です。いざ、版にするとなると大変で、野菜の特定、それに相応しい色を紙に色鉛筆で塗ることから始めました。２年後に定年を迎えるおじさんが、50 年前の小学生になって、愉快に楽しく『食材図鑑』を眺めながら作業し、板に転写しました。色の種類は 31 色、刷りも 31 回です。これくらいの色数になりますともう一度摺るのはとても大儀です。でも今はまだ版木を残しています。

沖縄シリーズ200作　紅型　蝶・蜻蛉田舎風景

2002.04.16

これは宜野湾市の［安里紅型工房］の安里和雄さんの作品です。まだ作業途中と思われます。美しい画面に魅せられ木版画にさせていただきました。ここには蜻蛉、蝶、こおろぎのような昆虫が描かれています。私の子供の頃、堺市でも畑や田圃で銀やんま、しおから蜻蛉、林や藪には鬼やんまやアゲハチョウが飛んでいました。蜻蛉はとても懐かしいです。何千年も昔から人と共に生活してきた昆虫です。人間は、殺虫剤や農薬に大量の化学物質を使っています。その影響によって、蜻蛉や蝶が住めなくなり、その環境の変化は、将来、回りまわって人にも恐ろしい害毒が及んでくる可能性があり、心配です。安里さんの工房は自然を扱った題材が多いようです。

沖縄シリーズ 229 作　紅型　藍染　壺屋焼　2003. 01. 26

これは、藍色を基調にした「壺屋焼」の美しい紅型です。藤崎出さんの［つぼや工藝］で見せていただきました。店主 出さんのお父さんは著名な紅型作家 藤崎真さんです。伝統工芸の紅型や陶芸は、工程が多く複雑なため、その技術を継承していくことは大変なことです。また、題材を考案し、どのように作成していくか、新しい工夫をしていかなければなりません。陶工募集の張り紙をよく見ます。昔の徒弟制度の仕組みも崩れ、弟子が一人前に育つまでの“辛抱と我慢”の生活が、現代の若者には難しいと言われています。別の面から考えますと、将来の仕事としての“やりがい”や生活できる見通しがあれば修業も積めるのでは、と思います。技量がつかない、創造力が乏しい等の不安を払拭できるように、親方が温かい心を持って引き上げていけば後継者も育ちます。伝統工芸を愛する人々がどんどん良い作品を買ってくれることも重要です。「継続と精進が光を与えてくれる」と励ましてください。若者が、何時の日か独自の題材、手法を考案して新たな作品を開拓してくれることを願っています。

沖縄シリーズ 142 作　紅型　牡丹・魚網紋　2000. 09. 08

これは 17 世紀に木綿の布に美しく描かれた古い紅型です。平凡社が刊行した『日本の美術 別巻 民芸』より木版画にさせていただきました。すばらしい色合いと構図は、眺める人を圧倒します。今となっては紅型の端をカットしないで彫った方が良かったのにと悔やまれます。全部をハガキ画面に入れると対象物は小さくなり、彫るのが難しくなるので大変です。この色版は 19 色です。

沖縄シリーズ144作　紅型　梅　2000.10.01

これは平凡社が刊行した『日本の美術　別巻　民芸』の沖縄の紅型から版にさせていただいたものです。紅型は華やかな色合いのものが多く、このように色を押さえたものは珍しいかもしれません。型紙を造るのも大変だろうなと思いながら、すばらしい布に見とれました。

沖縄シリーズ 216 作　紅型　暖簾　赤シーサー

2002. 09. 07

これはすばらしい「赤いシーサー」の紅型暖簾です。那覇市伝統工芸館の２階の販売店で数多くの紅型が飾られ販売されています。その中でも一際目立ったのがこの紅型です。華やかな赤が見る者を引き付けます。私たちもその画面に魅せられて写真に撮らせていただきました。いざ版を作るとなると、黒と白の輪郭、特に細い白い色を活かすのは難しく、紅型にも高い技術が隠されているようです。お菓子屋やお茶屋さんの暖簾に使われると、有名になり繁盛するでしょうね。ホテルのロビーに額入れして飾るのもいいですね。すばらしいシーサーに思わず用途を考えてしまいました。

沖縄シリーズ138作　紅型　壁飾り　百合　2000. 07. 24

この美しい紅型の壁飾り「百合」は那覇市伝統工芸館の売店で販売されていたものです。芭蕉と麻糸が使用されています。色数が多いのと線が細やかで難しいため、木版画にするのは無理と思案し長く置いたままになっていました。しかし、ハガキ版に収まればとても華やかだろうと彫り始め、何とか出来上がりました。この版は13色です。

沖縄シリーズ 227 作　**紅型　木の葉紋**　　2003. 01. 14

この美しい紅型は、2001 年 2 月 10 日、那覇市伝統工芸館の売店で額に入れられていました。麻の布なのに重い感じのするすばらしい紅型です。私の木版画集に入れようと彫り始めました。紅型は沖縄の特産品で世界に誇る染色技術です。色数が多いと版数も多くなり、おまけにこの紅型は原色が少なく、色の配合も複雑です。濃淡の度合いもすこぶる重く濃い。布地の色は、薄い黄土色の中にハガキ用紙をくぐらせて彩色し、薄い色から順に木版を彫っていきます。黄色、ピンク、赤、濃い赤、薄い茶、茶、焦げ茶、濃緑、紫、濃い紫、薄い黒、黒色という具合に絵の具を溶き配合していきます。そして、絵筆で紙に確認しながら摺りに入ります。版木毎に色を出して、摺り、乾かして、次の色を摺る、の繰り返しです。上手く色を出せるとほっとしますが、駄目な時の方が多いです。色彩感覚が悪いのか、妻は「こんな色？」と実物と似ていない色を指摘します。先に黄土色を乗せていますので、木の葉の濃緑を摺るのも薄い色を先に乗せてからでないと思った濃い緑色が乗りません。何度も試行しながら摺っていきます。仕上がった色合いは重いのですが、実物はもう少し全体的に明るかったです。残念ながらこの紅型の作者は判りません。手摺りの紅型は手間がかかり、作者のぬくもりが伝わってきます。麻に染められたものは味があって素敵です。

沖縄シリーズ 251 作　紅型　農村風景　　2003.10.30

これは、沖縄の和やかな農村風景を華やかに描いた美しい紅型暖簾です。作者はわかりません。那覇市伝統工芸館の売店で販売されていました。細かい色合いがとても美しいです。木版画にしたいと思いましたがハガキ版に収めるのは難しく、それで長い間、保留してきました。もうすぐ沖縄シリーズを終えます。少し周りを割愛し彫りやすいように工夫して「心をこめて彫れば美しく仕上げられる」と取りかかりました。彫りと 65 枚の摺りに 2 ヵ月。画面は、澄み切った青い空を黄色で染めあげています。流れる雲は、白、紫、青色とおおらかです。山、川、森の木々と芭蕉の葉は色鮮やかで、赤瓦屋根の住居が点在し美しく懐かしいです。農作業を終えた水牛は池で休息し、横に大八車、竹で作った籠、椰子の葉の帽子、備中鍬、紐縄等が見られる。主人公の農夫が描かれていないのは、この感動を呼ぶ景色を同じ側から、うっとりと眺めているからかも知れません。

沖　縄　シ　リ　ー　ズ 256 作　　紅　型　　鶏　頭　寶　船
2004.04.03

これは「鶏頭寶船」と仮に名付けたすばらしい紅型です。紅型は黄色地をバックに、美しく穏やかな色合いで描かれ、船首に"鶏"を飾り、大きな帆を張って、船上に巨大な赤珊瑚、宝石類の詰められた壺、豪華な衣装が入れられた整理箪笥、長持ちなどが積み込まれています。那覇市伝統工芸館の売店で販売されていました。細かくて色の種類も多いのでハガキ版には手に負えないが、２倍にすれば何とか彫れると考えました。「大きいと少し彫るのも楽では」と思い彫り始めました。2004 年１月から取りかかりましたが、毎週末の土日曜日、遠方へ釣りに出かけていたため、彫りや摺りが遅れに遅れ、４月３日にようやく仕上がりました。なお、"鶏頭"を彫っているとき、世間を騒がせ、驚かせた《高病原性鳥インフルエンザ事件》で思いもよらず大量の"鶏"が犠牲となった悲しい出来事と重なり、大変気にかかりました。

沖縄シリーズ 208 作　**紅型　藍染　琉球**　　2002. 06. 30

この美しい琉球藍の紅型は“琉球王朝期の舞踏衣装”の一部です。2001 年２月８日、[恩納村リザンシーパークホテル]（谷茶ベイ）の特設舞台で、３人の舞踊家が沢山の観光客を前に数種類の華やかな舞を披露してくれました。その時、この衣装を着ておられた方に近くから写真を撮らせていただきました。「木版画を彫りたいから」と言わなかったら、“変なおじさん”と思われたことでしょう。私も少し、恥ずかしかったです。模様の種類は豊富で扇子、各種草や木の花、木の葉、川の流れ等が描かれています。木版画で白や薄い空色を抜き出すのは難しいです。紅型染めは予め模様を染める部分と染まってはならない部分に分けます。そして染まってはならない部分を糊で固め、色が染み込んでくるのを防ぎます。そして染める部分を切り抜きした厚紙やプラスチックをあてがい、染色刷毛で摺り込んでいくのです。木版画と似かよった工程があります。細やかな模様は型紙を作るより染色の刷り込みの方がより難しく思えました。

沖縄シリーズ 149 作　**唐草紋暖簾**　2000. 11. 10

これは、壺屋通りにある［新垣陶器店］の奥に飾られていた藍色の暖簾です。布団の表生地が色あせ、ほどいて箪笥に入れていたものを、暖簾に作り変えたそうです。この持ち主の方の心優しい気配りです。布にとっては“２度目の奉公”で、大事にされていいですね。美しい唐草紋と鶴、亀、梅、松と言う縁起のよい図柄が描かれています。お店が更に繁盛することを願って木版画にしました。

風物・その他

沖縄シリーズ114作　**龍柱　首里城正殿前**　1999. 12. 21

これは首里城正殿前に立てられていた「龍柱」の先端部分です。高さは２ｍ位です。先の戦火でこの部分だけが残ったそうで、現在は白い砂岩で復元されています。この本体は、沖縄県立博物館に展示されています。龍頭の細やかな彫りを拝見して、当時の石工技術のすばらしさに驚きます。まるで木材に彫ったような出来映えでした。

沖縄シリーズ 108 作　**首里城の龍頭**　1999. 09. 18

これは首里城正殿の屋根に設置されている守護神の「龍頭」です。首里城の建物は２層３階建てです。お城は鯱、お寺の屋根は鬼瓦が目に付きます。この龍頭は五彩の艶やかな陶器で作られています。屋根は色鮮やかで、赤瓦を台風で剥がされないように留め、同時に水漏れをも防ぐ白い漆喰、そして３匹の龍頭。初めてこの正殿を眺めたときは、お伽話に聞く“龍宮城”もこのようなものではないかと思いました。社殿は朱壁、白壁に朱色の柱、藍色、金色の飾り絵、浮き彫り模様などその華やかさに驚きました。この版画は『新おきなわ観光名所 100 選』から彫りました。

沖縄シリーズ 158 作　守禮の門　首里城　2001.03.26

この木版画は岐阜県高山市『HGS 飛騨高山グリーン西山 木版画同好会』の作品交換会に出品したものです。琉球王国の居城、首里城への入口となる「守禮の門」です。門には礼節を重んじる国家と言う意味の“守禮之邦”という扁額が掛けられています。観光客が行き交いますので、門全体を写真に撮るのは難しいです。これは宜野湾市の島袋俊哉さんが撮影し送ってくれたものを使わせていただきました。高い脚立の上から撮影されたようです。昔の「木造の門」は第２次大戦で焼失し、1992 年 11 月に復元され今に至っています。

沖縄シリーズ 246 作　「読谷山焼」　登窯　　2003. 08. 07

この大きな建物は、沖縄県中頭郡読谷村座喜味にある巨大な「読谷山焼」９連房の登り窯で、金城明光さん他３名の共同窯です。少し奥にさらに大きな 13 連房の［北窯］（宮城正享さん他３名）があります。国道 58 号線のバス停〈親志〉から〈やちむん（焼物）の里〉の看板に沿って５分ほど歩くとこの窯に出会います。アスファルト道を過ぎて［やちむん通り］に入ると、粘土の赤土道です。個人の窯元（人間国宝　金城次郎さんのご子息敏男、敏昭、宮城須美子さんの３名）とガラス工房を構える稲嶺さん等の住居の他は、雑木林が広がっています。１年に３～４回位窯入れします。松材を中心にした薪を下段の焚き口から入れて３日３晩ぶっ通しで焚きます。そのため、大量の薪が積み上げてあります。９つの房にもそれぞれ出入り口があり、作品を入れるため、中は整頓され、人が入ってもゆとりがあります。房の反対側にはその中の温度を炎の色で確認し、さらに追い焚きするための小さな丸い穴が用意されています。下の作業場から上の窯を眺めるととても急勾配、20 ｍで５ｍ上がるくらいです。作品を窯詰めするのと焼きあがった品物を取り出す作業は、重労働で神経を使います。作品は火加減によって大きな影響を受けます。沖縄の土は温度に敏感で、上がりすぎると歪んだり、釉薬が流れたりします。火の温度は 1, 200 ～ 1, 250 度前後。熟練の陶工（親方）が管理し、焼き上げて火を止めてからさらに３、４日冷ませて取り出します。作品に夢を載せていますのでわくわくする一日です。

沖縄シリーズ 165 作　**読谷村座喜味の登窯**　2001.05.15

これは読谷村座喜味にある登り窯（北窯）を左側の通路から眺めたところです。この登り窯は、山の斜面や傾斜地を利用して作られている 13 連房の巨大な窯です。下段の焚き口から薪を燃やし炎が下から上へ、次の房へも下から上へ山のような波を打って上へ上へと勢いよく熱を運ぶのです。“登り窯”は一度に大量の陶器を焼き上げ、燃料も効率よく利用することができます。しかし、これだけ大きな窯を 4 人で運営、管理していくことは大変な経営手腕が要求されます。この窯を赤瓦の大きな屋根が覆っています。天井は窯から漏れる黒い煤で真っ黒です。下から上の排煙口を見上げると、沖縄のすばらしい青い空が目に飛び込んできました。3 ヶ月に 1 度くらいの割合で火入れしているようです。力・技・優しさを込めて作られた芸術品が、3 日 3 晩の長い火入れの後、窯を冷まして姿を現します。窯変なども楽しく、わくわくする嬉しいひとときでしょう。

沖縄シリーズ 249 作　**登窯の一室内　北窯（共同）**

2003. 09. 21

これは沖縄県中頭郡読谷村座喜味にある巨大な 13 連房（室）の登り窯［北窯］の一室です。宮城正享さん他３名の共同窯です。窯は１年に３～４回、松材を中心とした薪を３日３晩焚き上げます。そのため，大量の薪を積み上げています。13 ヶ所の房にもそれぞれ出入口があり、中は書架のようになっていて、作品を火の流れ具合にあわせて効率よく配置します。房の反対側にはその中の温度を確認し、更に追い焚きする穴が用意されています。火は焚き口から上部に登るほど温度が上がり、勢いを増します。その熱を効率よく生かせるのが“連房式登り窯”の特徴です。丁度このときは窯を掃除し、新年を迎えるところでした（2002. 12. 28）。鉄のように見える梁や柱は、耐火煉瓦で黒い釉薬が何度も焼かれているうちに流れ、飛び散りこびりついたものです。

沖縄シリーズ 14 作　ミンサーを織る技術者

1998. 02. 07

この木版画は那覇市伝統工芸館で琉球帯「ミンサー」（幅の狭い薄手の帯）を織る若き技術者　赤嶺真澄さんです。この工芸館で見学者や観光客に「ミンサー」の出来る行程を説明し、実際に織るところを見せたり、工芸館でミンサー教室を開催し、生徒さんに教えたりしておられます。ミンサーを織る前段の工程で、染められた縦糸と横糸の模様を合わせるのが難しく、１本１本順番を決めて固定していくだけで、とても時間がかかるとのことです。ご本人はもっと美しい方です。（筆者：注）

沖縄シリーズ 257 作　**琉球織りの技術者**　　2004. 05. 02

この版画は、沖縄県が誇る［玉泉洞］のすぐ隣にある伝統工芸を実演する民家集落の一つで、この方は、琉球、ミンサー、首里織りを織っている技術者です。頼んで撮させていただきました。初めて訪ねた日（1997. 9. 24）からもうすぐ７年になります。沖縄の伝統的な木造の民家や一般の木造家屋は、台風の被害をまともに受けるので、鉄筋コンクリート建築にすごいスピードで建て替わっています。代表的な建物は《文化遺産》として後世に残すため、そのまま移築しています。そして、その建物を使って、織物、紡績、染色等を技術者が模範技術を公開し、廻りから見学できるようにしています。沖縄ガラス、陶芸、琉球漆器等の作品もすばらしいです。泡盛工場の見学もガラス越しに眺められて楽しめますし、公演時間がうまく噛み合えば、すばらしい琉球舞踊やエーサー踊りを常設舞台で見ることもできます。陶芸は参加型の教室を開催しており、人気があります。現在はここが、沖縄を代表する“伝統文化施設”となっており、名前も実情に合った［沖縄ワールド］と変更しています。初めて沖縄を訪ねる方には必ずおすすめしている施設です。この方も、もっと美しい方です。彫りがおいついていません。（筆者:注）

沖縄シリーズ141作　**琉球人形　名護市**　2000.08.27

1997年9月、沖縄の名護にあるパイン園の売店でこの美しい琉球人形に出会いました。岐阜や愛知県で活躍する木版画の先輩が、「人物を木版画にするのは難しい」と言われていましたので、挑戦する気持ちで人形を彫りました。若い女性は表情も豊かです。生き生きと清楚に仕上がるよう心がけました。

動物・植物

沖縄シリーズ 247 作　アジア水牛　荷台車運搬用　2003. 08. 26

これは「アジア水牛」です。この水牛は家畜としてよく飼いならされて農耕、木材、農作物等の運搬，観光荷台車の運行の他、乳、肉牛、角の印鑑、工芸品等様々な用途で利用されています。先島諸島では“竹富島の赤瓦の民家集落をめぐる観光水牛車の運行”と“西表島から由布島への海上渡航”が有名です。おとなしく御者の言うとおり重い荷車を引きます。暑いし、重かろうと水牛の気持ちになります。綿入れを巻いた“引き金具”を、水牛が首を屈め片方の長い角を通し、残った方も器用にくぐらせ首の後ろに設置するのです。これには驚きました。それから出発の合図が出されるまでおとなしく待っています。竹富島では御者の方が「私が居なくとも、いつも通っている道なので覚えている」と言いながら三線（さんしん）を弾き、正調『安里屋ユンタ』を唄ってくれました。なんとも物悲しい調べでした。大阪に帰り思い出すのはあの“御者”と従順な“水牛”。今日も元気で大勢の観光客を運んでいることでしょう。(2003. 4)

沖縄シリーズ 250 作　**カンムリワシ 特別天然記念物**　2003. 09. 29

この版画は、国が指定する《特別天然記念物》の「カンムリワシ」です。このワシは、沖縄県（石垣島と西表島）に約 100 匹、主に蛇、蛙、ネズミ等の餌を捕って生息しています。“からす”くらいの大きさで、頭頂に黒と白の美しい冠羽（飾り羽根）を持っていますが、普段は寝かせていて目立ちません。日本の鳥類で《特別天然記念物》に指定されているのが、9 種類。その内 2 種類が沖縄に。動物全体で少し緩やかな《天然記念物》に指定されているのは、191 種類。その内、沖縄に 19 種類。実に 1 割にも上ります。面積はさほど大きくなく、小さな島の集合体である沖縄県に、なぜ貴重な動物が多く生息しているのか不思議なことです。それは、①地理的には、熱帯と温帯の境目にあること ②大昔、中国大陸と陸続きであったのが、日本海が沈下して取り残され、隆起と沈下を繰り返してきたため、独自の進化をしたものと、その古き状態のままとどまっている動物（植物も）が生息しているからといわれています。さらに、③人の手が比較的入らず、長く現状が維持されてきたことが要因と考えられています。そのような地理的、歴史的等の環境を考慮して“東洋のガラパゴス”と呼ばれています。その道の研究者はこの沖縄諸島をとても重要視しています。今後も貴重な動植物との共存・保護を念頭においた開発をお願いしたいと思います。

沖縄シリーズ 224 作　リュウキュウオオコノハズク

2002. 11. 30

この鳥の名前は「リュウキュウオオコノハズク」です。このフクロウ（梟）を新聞で見て急に彫りたくなり、事典、鳥類図鑑を引っ張り出し、そして同僚に端末から探し出してもらいました。比較的大型のものをフクロウと呼んでいます。ミミズク、コノハズクは小型が多いようです。頭にある耳のようなものは擬態（飾り羽）で耳ではありません。普通、動物の耳は頭、顔の左右に平行してあるのですが、フクロウの耳は少し上下にずれていて音の方角と音の位置を正確に把握できるようにできています。また、体を動かさずに首をくるりと回し、音を出さずに背中の方も見ることができるのです。目は丸く大きくて鋭く、暗闇でも驚くほど良く見えます。足の爪は前と後ろに 2 本あり、木に止まるときの安定感と獲物を突き刺す刃物のような鋭さを持っています。更にフクロウは飛び出すときや飛んでいるときに羽音を出さない消音装置付きの翼を持っているのです。鼠、爬虫類、鳥類、大型の昆虫を捕食し、夕方から活発に活動します。里山がある田舎の学校ではフクロウの観察会等が行われたりしています。リュウキュウオオコノハズクは《絶滅危惧種》で保護されています。

沖縄シリーズ 236 作　**薬用ハブ酒**　　2003. 05. 11

この木版画は、猛毒を持つ蛇「ハブ」の瓶入り焼酎漬けです。2000 年 4 月 20 日、沖縄の物産展が『琉球の味と技』と題して大阪阿倍野近鉄百貨店で開催されていたとき、写真に撮らせていただきました。このハブは長さ 2. 2 ｍもあり、現地でもこれほど大きなものはそう数がいないと店主が説明してくれました。ハブは毒の強さでも世界の 10 本の指に入るといわれています。初めて沖縄を訪ねたとき、巨大な米軍基地の不気味さとこのハブの恐ろしさにとても不安でした。南風原町の中村高雄さんの言うとおり“森や林の茂み、さとうきび畑”に入らない限りハブを見ることはありませんでした。普通の蛇でも気持ちが悪いです。子供の頃仁徳天皇陵の周りには田や畑があり、堀で魚釣り、蜻蛉を追いかけて遊びました。そのころは自然が一杯あって蛇や蛙を見かけました。今はそれらの土地が住宅地に代わり田舎の風景が無くなりました。とても寂しいです。

沖縄シリーズ 243 作　オキナワチョウトンボ
2003.07.06

これは「オキナワチョウトンボ」、別名「ベッコウチョウトンボ」と呼ばれているものです。2003 年 4 月 16 日、ホテルで読んでいた宮古新報（宮古新報社）の中に見つけました。説明文は「金色に黒い斑点のある羽根は鼈甲を思わせる。宮古では限られた水辺近くにおり、これから夏の空をヒラヒラと飛ぶ様子が見られる。東南アジアなどに生息する熱帯のトンボでヤゴはヨシなど挺水植物が多い池沼や流れが緩やかな河川、または海岸近くの汽水の入る沼でも育つ。池や川などの環境の少ない宮古では、池間島の湿地や伊良部町の入り江などによくいる。ふつうのトンボのように俊敏な飛び方をせず、名前のとおりチョウのように飛ぶ。若い雄は、群れて飛び回りながら捕食することがある。成熟するとテリトリー（縄張り）を持つ」と紹介されています。美しい写真を少し変えて木版画にしました。私の子どもの頃、世界一の墳墓面積をもつ巨大な仁徳天皇陵の周辺は、たんぼや畑があり、田園風景が残っていました。あるとき、トンボ取りに夢中になり、履いていた下駄を草むらで脱いで判らなくなり、最初に追いかけた場所から探し回って見つけました。50 年も前のことですが、トンボを見るたびに思いだします。最近は、トンボや蝶々を追いかけたりしている子どもも少なくなりました。とても寂しいです。

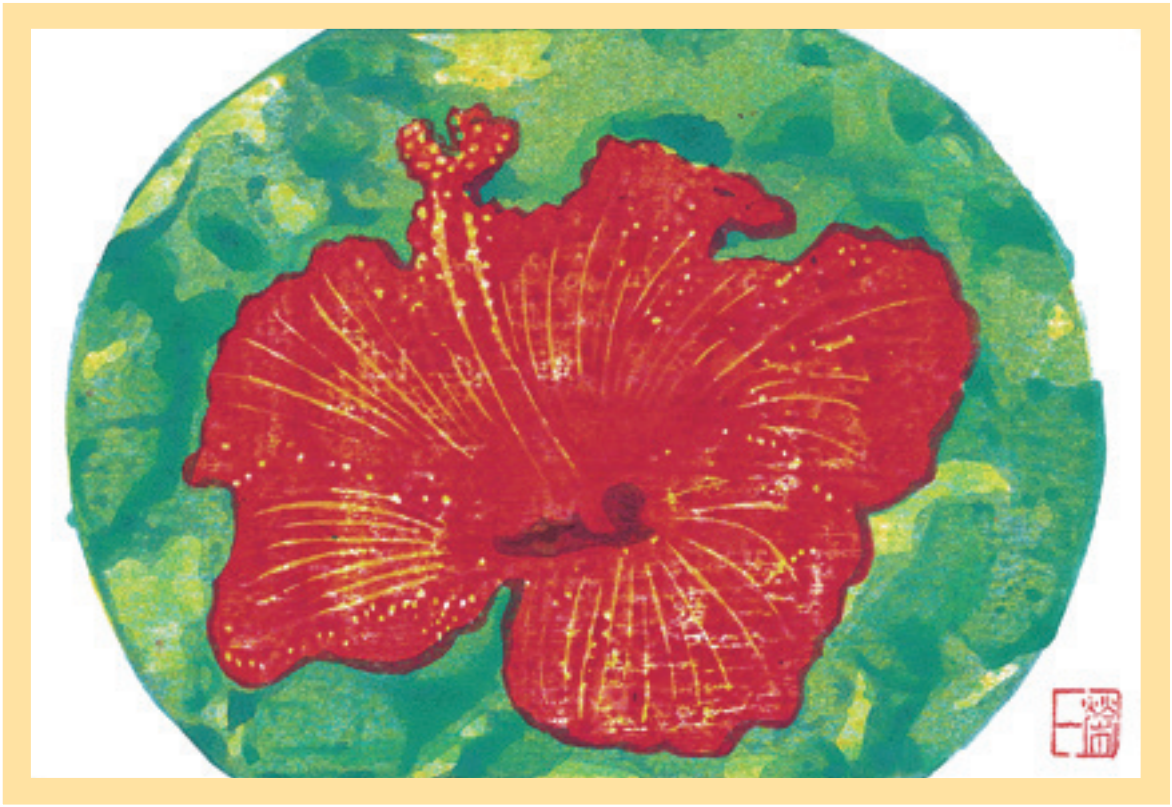
シリーズ 245 作　**オオゴマダラチョウ　西表島**
2003.07.27

　これは国内で一番大きな蝶「オオゴマダラチョウ」です。体長は約 70 ～ 75mm で、本土の「クロアゲハ」と同じ位。沖縄本島周辺、先島諸島に生息。ツアーで西表島を観光したとき、［蝶の館］を訪ねました。そこではまわりをネットで囲い、一部は、温室を使って多くの蝶を飼育しています。花にとまったり、飛んでいるのを驚かさないように歩くのです。2003 年 4 月、もう沖縄は初夏。園内は蝶を育む植物が青々と繁っています。本土でよく見かける「アオスジアゲハ」は鳥のように素早く飛びますが、この「オオゴマダラ」蝶は、羽を広げたり萎めたりが、ゆっくりしています。美しい白黒の、肉眼でもはっきり見える一際目立つ模様を身につけています。捕食者である鳥に"毒蝶"ですよと警戒 (合図) させ襲わせないためです。ガイドさんは、「蝶は優しい人を認識し、止りにくるよ」と冗談を言っていました。因みに私達のところへは止ってくれませんでした。マイクロバスの移動中、まだ森や畑地が多いので蝶やトンボをたびたび見かけました。昆虫の宝庫でもある沖縄・先島諸島は魅力のある地域なので、遠くからカメラを担いでマニアが出かけてくるとのことです。私は「イリオモテヤマネコ」に会えないかと期待しましたが、夜行性の希少動物のため、会えませんでした。見つかった場所には、交通標識のようにヤマネコの絵が立てられ、車両に注意を呼びかけていました。その数が、結構多かったです。

沖縄リーズ 100 作　糸芭蕉　大宜味村喜如嘉

1999. 08. 02

これは「糸芭蕉」です。芭蕉の種類は ①実のなるバナナ ②花を観賞する芭蕉 ③糸や紙の繊維を採る糸芭蕉があります。この糸芭蕉は古くから高級布の材料として大切にされてきました。たくさんの糸芭蕉を栽培して収穫しても、糸は多く取れません。芭蕉布は沖縄の風土、蒸し暑く、高温の気候にあった繊維で、着物にすると軽くてとても涼しいのです。沖縄県国頭郡大宜味村喜如嘉の［芭蕉布会館］の近辺では糸芭蕉が美しく整然と栽培されています。収穫には３、４年かかります。野生のものは繊維が荒く太いものが混じるので、その分、細く丈夫な繊維は少なくなります。［芭蕉布会館］を案内していただき、その工程の説明によりますと糸を採る所の過程と、糸を染め、紡ぐのが大変だそうです。製作過程が途絶えていた“芭蕉布”を復活させた人間国宝の平良敏子さんは、忙しそうに仕事をされていました。「すばらしい伝統文化を守り育ててください」と会館を後にしました。後日、大阪で『芭蕉布の伝統工芸展』が開催されたとき、入場チケットをお送りいただき、鑑賞させていただきました。



沖縄シリーズ 228 作　**ハイビスカス**　　2003. 01. 20

この「赤いハイビスカス」（仏桑華）の写真は、（株）近代美術の写真家　島袋俊哉さんが送ってくれたものです。「名護市の帰り、ものすごいスコールに会い、ハイビスカスを美しく輝かせています」とのコメントが付けられていました。いただいた写真は大切にファイルしています。沖縄県の県花は、“デイゴ”で樹上一杯真っ赤な花を咲かせる大木です。それに較べるとハイビスカスは道端や住宅の垣根に植えられています。また、鉢植えのようにこじんまり育てることが出来ますので、本土でも多く出回っています。花の色は赤、黄、白等、形も一重、八重、大きさも巨大輪から小さなものまで品種改良されています。大阪の冬は寒いので路地では育ちません。沖縄では年がら年中咲いています。寒くなる１、２月は花の数は少ないようです。

沖縄シリーズ 237 作　**月桃の花**　　2003. 05. 27

これは「月桃」（サンニン）と呼ばれる生姜科の植物で背丈が 2、3 mにもなります。インド原産で沖縄、小笠原、九州南端などで栽培されてきました。ミンサー織の技術者 赤嶺真澄さんからいただいた『月桃の美しい橙、黄色の実』の絵手紙（1998 年 10 月）の写真から遅れに遅れて木版画にしました。昔は、畑の区切りや道路脇によく植えられていたそうです。2003 年 4 月、石垣島を旅したとき、白と薄い橙色の花を見かけ匂いをかぎました。ほのかな甘い香がしました。生姜の葉よりずっと大きく、葉の形はカンナや糸芭蕉のようです。沖縄では旧暦の 12 月 8 日、月桃の葉に包んで蒸した餅を食べる習慣があるそうです。家庭によっては餅の中に黒糖、赤芋等を入れるそうです。葉には良い香と殺菌効果があるようです。この植物の繊維を使って民芸和紙が作られ、ハガキや封筒が売られています。紙の色は晒していませんので茶色っぽいです。因みに赤嶺さんからいただいた絵手紙の総数は 89 枚になりました（2003 年 5 月 3 日現在）。私の木版画制作の励みになっています。

沖縄シリーズ 244 作　**サキシマスオウ　西表島**　　2003. 07. 20

これは巨大な「サキシマスオウ」の木です。根が“板根”といって屏風のように幹の周りから放射線状に広がり、支柱棒のように幹を支えています。何とも奇妙な光景です。沖縄を何度も訪問して判ったことですが、畑の中に白い珊瑚岩がいたるところに埋まっており、掘り出したものがよく片隅に積み上げられていました。それで、この根を見た私は、沖縄地方は毎年台風が上陸するので、強風で木が倒されるのを防ぐためか、または珊瑚礁の隆起によってできた土地だから“粘土質の土”の堆積が浅く、樹木は地中深く根が張れないから三角形の支柱を作り出した、と思っていました。しかし、書物によると、湿地帯や沼地で生息する木なので空気を取り込む気根として発達したとのことです。植物の適応能力には感心します。西表島の仲間川をさかのぼるとスオウの群落があり、その中でこの木が一番大きく板根の高さは約４ｍあります。眼の前で見て息をのみました。板根は　１年で１㎝成長しますので、樹齢は実に 400 年です。マングローブの気根は、川の中から竹のような棒を無数に突き出しています。

版画の元となった作品の作者と

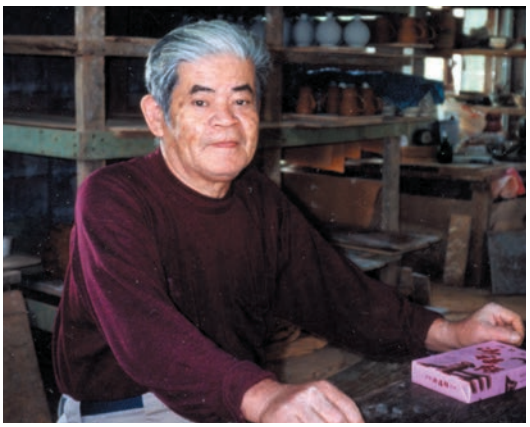
お店で撮らせていただいた新垣勲さん
（壺屋事業協同組合）

壺に魚紋を描く新垣菊子さん
（新垣製陶所）

新垣紀美江さんと新垣健司さんの奥さん
（新垣陶器店）

工房で盛上げ細工をする新垣ヨシ子さん
（新垣栄一さんのお姉さん）

お家でくつろぐ若き日の金城次郎さん



工房で撮らせていただいた金城敏男さん

関係者の皆さん

シーサーを作る小橋川永勝さん

荷造り中を撮らせていただいた
小橋川清正さん

工房で微笑む小橋川太郎さん

工房で撮らせていただいた高江洲忠さん

宮陶房前で宮城須美子さんと妻　白柳靖子

読谷村立美術館前の中村高雄さんと
妻　白柳靖子

個展会場で撮影された上江洲茂生さん

＜作品目録＞

作品番号	制作日	作　品　名	版画の元となった作品の作者や資料提供者など	掲載頁
155	2001.01.13	線彫波・魚紋花瓶	新垣 栄一	6
213	2002.07.27	盛上取手付注瓶	新垣 栄一	7
199	2002.03.28	盛上田舎風景抱瓶	新垣 栄一	8
105	1999.08.28	赤絵キビ紋大壺	新垣 栄三郎	9
93	1999.06.29	唐二彩抱瓶	新垣 栄三郎	10
205	2002.05.19	荒焼龍巻壺	新垣 栄用	11
182	2001.08.24	赤絵線彫魚紋大花瓶	新垣 勲	12
239	2003.06.11	赤絵線彫双魚紋花瓶	新垣 勲	13
184	2001.09.09	赤絵線彫魚紋大花瓶	新垣 勲	14
103	1999.08.16	赤絵線彫木の葉紋丸花瓶	新垣 勲	15
169	2001.06.11	線彫エジプト文様花瓶	新垣 勲	16
189	2001.10.28	赤絵線彫双魚紋抱瓶	新垣 勲	17
191	2001.11.23	赤絵線彫双魚紋抱瓶	新垣 勲	18
212	2002.07.19	線彫魚・波紋カラカラ	新垣 勲	19
83	1999.05.04	線彫唐草紋抱瓶	新垣 菊子	20
156	2001.01.20	シーサー　阿形　朝日陶芸	新垣 光雄	190
172	2001.06.28	シーサー　阿形	新垣 光雄	191
174	2001.07.06	シーサー　阿形	新垣 光雄	192
175	2001.07.09	シーサー　阿形	新垣 光雄	193
134	2000.06.25	シーサー　阿形　朝日陶芸	新垣 光雄	194
171	2001.06.23	面シーサー 阿形	新垣 光雄	195
173	2001.07.01	面シーサー 阿形	新垣 光雄	196
176	2001.07.13	面シーサー 阿形	新垣 光雄	197
137	2000.07.16	蓋付赤絵鉢	新垣 修	21
194	2002.01.14	赤絵線彫双魚紋大皿	新垣 修	22
139	2000.08.02	赤絵線彫魚紋花瓶	新垣 勉	23
240	2003.06.18	赤絵海老紋壺	新垣 勉	24
130	2000.06.03	赤絵線彫魚紋抱瓶	新垣製陶所	25
218	2002.09.24	貫入赤絵線彫海老紋大皿	新垣 勉	26
135	2000.07.04	赤絵線彫魚紋皿	新垣製陶所	27
188	2001.10.15	葡萄・唐草紋大花瓶	安里 真尚	28
143	2000.09.22	シーサー　屋根	玉泉洞民家集落	198
157	2001.02.23	シーサー　進貢船	玉泉洞展示品	199
226	2003.01.05	龍・木の葉紋中花瓶	兼島 靖	29
39	1998.06.20	線彫海老・魚紋大花瓶	金城 次郎	30

作品番号	制作日	作　品　名	版画の元となった作品の作者や資料提供者など	掲載頁
41	1998.07.04	線彫海老・魚紋大花瓶	金城 次郎	31
40	1998.06.27	線彫刷毛目花・魚紋大花瓶	金城 次郎	32
51	1998.08.27	線彫魚・海藻紋大花瓶	金城 次郎	33
204	2002.05.15	線彫エジプト文様大花瓶	金城 次郎	34
163	2001.04.28	刷毛目線彫エジプト文様花瓶	金城 次郎	35
48	1998.08.11	線彫海老・魚紋花瓶	金城 次郎	36
75	1999.03.08	刷毛目四耳海老・魚紋花瓶	金城 次郎	37
98	1999.07.20	刷毛目線彫海老・魚紋花瓶	金城 次郎	38
104	1999.08.24	刷毛目線彫海老・魚紋花瓶	金城 次郎	39
118	2000.02.08	刷毛目線 彫魚紋花瓶	金城 次郎	40
119	2000.02.17	線彫魚・波紋花瓶	金城 次郎	41
125	2000.05.02	双耳付指掻唐草紋大壺	金城 次郎	42
38	1998.06.13	丸型線彫魚・巻貝紋壺	金城 次郎	43
102	1999.08.09	刷毛目海老・魚紋丸壺	金城 次郎	44
66	1999.01.22	刷毛目線彫海老・魚紋壺	金城 次郎	45
45	1998.07.23	刷毛目線彫海老・魚・貝紋壺	金城 次郎	46
127	2000.05.15	線彫海老・魚紋壺	金城 次郎	47
136	2000.07.08	四面体線彫海老・魚紋壺	金城 次郎	48
95	1999.07.09	線彫魚紋鬼の腕	金城 次郎	49
120	2000.02.20	イッチン水玉魚紋嘉瓶	金城 次郎	50
162	2001.04.21	線彫魚紋扁壺	金城 次郎	51
36	1998.06.03	線彫海老紋扁壺	金城 次郎	52
164	2001.05.04	線彫海老・魚紋扁壺	金城 次郎	53
166	2001.05.20	線彫海老・魚紋扁壺	金城 次郎	54
44	1998.07.18	線彫海老・魚紋抱瓶	金城 次郎	55
58	1998.10.28	線彫魚紋抱瓶	金城 次郎	56
63	1998.12.13	線彫海老・魚紋抱瓶	金城 次郎	57
96	1999.07.14	線彫魚紋抱瓶	金城 次郎	58
124	2000.04.30	線彫魚紋抱瓶	金城 次郎	59
79	1999.04.06	線彫海老・魚紋大皿	金城 次郎	60
92	1999.06.24	緑釉線彫双魚紋大皿	金城 次郎	61
122	2000.04.03	線彫海老・魚紋大皿	金城 次郎	62
80	1999.04.11	線彫魚・貝紋大皿	金城 次郎	63
47	1998.08.04	線彫魚紋大皿	金城 次郎	64
121	2000.02.29	線彫魚紋急須	金城 次郎	65

作品番号	制作日	作　品　名	版画の元となった作品の作者や資料提供者など	掲載頁
128	2000.05.19	唐草紋大花瓶	金城 明光	66
206	2002.06.01	盛上龍巻抱瓶緑柚流	金城 明光	67
68	1999.01.30	筒描海老・魚紋大皿	金城 明光	68
77	1999.03.26	線彫海老・魚・波紋大皿	金城 秀義	69
69	1999.02.04	刷毛目線彫魚紋大花瓶	金城 敏昭	70
57	1998.10.22	線彫海老・魚紋大花瓶	金城 敏昭	71
88	1999.06.10	線彫海老・魚紋中皿	金城 敏昭	72
151	2000.11.27	木の葉・魚紋大壺	金城 敏勝	73
248	2003.09.11	盛上龍頭帆船大壺　朝日陶芸	金城 敏勝	74
131	2000.06.07	シーサー　阿形　残波岬ロイヤルホテル	金城 敏勝	200
18	1998.02.25	刷毛目波・魚紋大花瓶	金城 敏男	75
201	2002.04.21	象嵌線彫蟹・稲・唐草紋大花瓶	金城 敏男	76
203	2002.05.06	線彫牡丹・唐草紋大花瓶	金城 敏男	77
16	1998.02.14	掻落牡丹・魚紋花瓶	金城 敏男	78
202	2002.04.30	線彫魚・波紋大壺	金城 敏男	79
13	1998.02.01	丸型線彫魚・波紋大壺	金城 敏男	80
32	1998.05.10	イッチン魚紋長壺	金城 敏男	81
85	1999.05.23	線彫魚・波紋長四角壺	金城 敏男	82
25	1998.04.05	イッチン魚紋抱瓶	金城 敏男	83
30	1998.05.03	線彫魚紋抱瓶	金城 敏男	84
67	1999.01.27	線彫海老・魚紋抱瓶	金城 敏男	85
22	1998.03.18	魚紋鉢	金城 敏男	86
23	1998.03.24	巴魚紋鉢	金城 敏男	87
29	1998.04.24	唐草・魚紋鉢	金城 敏男	88
17	1998.02.19	線彫海老・魚紋大皿	金城 敏男	89
33	1998.05.16	波・唐草・魚紋大皿	金城 敏男	90
31	1998.05.06	飴釉線彫魚紋大皿	金城 敏男	91
24	1998.03.29	呉須釉魚紋抜絵大皿	金城 敏男	92
28	1998.04.18	呉須釉双魚紋抜絵大皿	金城 敏男	93
26	1998.04.10	白化粧流魚紋大皿	金城 敏男	94
27	1998.04.14	象嵌魚紋大皿	金城 敏男	95
12	1998.01.23	丸型海老・魚紋皿	金城 敏男	96
21	1998.03.14	呉須釉線彫魚紋皿	金城 敏男	97
15	1998.02.10	泰山不動・魚紋皿	金城 敏男	98
91	1999.06.20	線彫巴魚紋皿	金城 敏男	99

作品番号	制作日	作　品　名	版画の元となった作品の作者や資料提供者など	掲載頁
19	1998.03.05	唐草紋７寸皿	金城 敏男	100
20	1998.03.02	唐草・魚紋陶板　方向①	金城 敏男	101
74	1999.03.10	唐草・魚紋陶板　方向②	金城 敏男	102
34	1998.05.22	魚紋陶板	金城 敏男	103
233	2003.04.13	唐草紋花瓶	小橋川 永勝	104
178	2001.07.22	シーサー　阿形	小橋川 永勝	202
196	2002.01.24	シーサー　吽形	小橋川 永勝	203
87	1999.06.05	龍紋大花瓶	小橋川 永弘	105
207	2002.06.15	龍紋大花瓶	小橋川 永弘	106
221	2002.10.27	双耳付緑柚掻落唐草紋壺	小橋川 永弘	107
50	1998.08.20	赤絵壺	小橋川 永昌	108
106	1999.09.07	赤絵牡丹崩し紋大皿	小橋川 永昌	109
1	1997.10.09	赤絵魚・波紋壺	小橋川 清正	110
5	1997.11.14	赤絵丸型魚紋壺	小橋川 清正	111
6	1997.11.22	赤絵丸型海老・魚紋壺	小橋川 清正	112
8	1997.12.04	赤絵丸型海老・魚紋壺	小橋川 清正	113
7	1997.11.28	赤絵瓢箪型海老・魚紋壺	小橋川 清正	114
9	1997.12.10	赤絵鶴首魚・唐草紋壺	小橋川 清正	115
4	1997.11.08	赤絵海老・魚紋抱瓶	小橋川 清正	116
10	1998.01.11	赤絵丸型魚紋透彫菓子皿	小橋川 清正	117
11	1998.01.16	赤絵丸型海老・魚紋皿	小橋川 清正	118
192	2001.12.29	赤絵壺	小橋川 仁王	119
82	1999.04.25	赤絵唐草紋大花瓶	小橋川 太郎	120
147	2000.10.29	赤絵唐草紋丸型花瓶	小橋川 太郎	121
185	2001.09.15	赤絵唐草紋鼓型花瓶	小橋川 太郎	122
225	2002.12.06	赤絵瓢箪型草花紋花瓶	小橋川 太郎	123
64	1998.12.24	赤絵線彫唐草紋壺	小橋川 太郎	124
132	2000.06.14	赤絵木の葉紋丸壺	小橋川 太郎	125
49	1998.08.16	赤絵唐草紋抱瓶	小橋川 太郎	126
76	1999.03.17	赤絵唐草紋抱瓶	小橋川 太郎	127
86	1999.05.29	線彫赤絵唐草紋大深皿	小橋川 太郎	128
219	2002.10.11	赤絵唐草紋大皿	小橋川 太郎	129
223	2002.11.23	赤絵円形文様中皿	小橋川 太郎	130
230	2003.02.08	赤絵カトレア紋中皿	小橋川 太郎	131
99	1999.07.29	長四角幾何学紋花瓶	小橋川 ツル子	132

作品番号	制作日	作　品　名	版画の元となった作品の作者や資料提供者など	掲載頁
161	2001.04.17	蓋付緑釉波紋中壺	小橋川 ツル子	123
154	2000.12.27	赤絵唐草・幾何学紋抱瓶	小橋川 ツル子	134
195	2002.01.19	赤絵幾何学紋抱瓶	小橋川 ツル子	135
211	2002.07.14	赤絵流唐草紋抱瓶	小橋川 ツル子	136
231	2003.03.23	赤絵ヤンバルクイナ・花紋花瓶	国場 一	137
255	2004.01.27	赤絵花・ヤンバルクイナ紋花瓶	国場 一	138
241	2003.06.27	赤絵唐草紋中花瓶	国場 一	139
179	2001.07.27	赤絵イッチン抽象文様壺	国場 一	140
209	2002.07.07	蓋付唐草紋壺	国場 一	141
238	2003.06.02	面取唐草・ヤンバルクイナ紋壺	国場 一	142
253	2003.12.27	赤絵唐草紋壺	国場 一	143
254	2004.01.16	赤絵抽象花紋壺	国場 一	144
232	2003.04.11	カラフル湯呑　２種類	国場 一	145
242	2003.07.01	刷毛目魚紋双耳付鉢	久場 政一	146
101	1999.08.04	線彫魚・波紋大花瓶	宮城 須美子	147
217	2002.09.10	線彫魚紋変形花瓶	宮城 須美子	148
252	2003.11.14	両取手付線彫双魚紋大花瓶	宮城 須美子	149
78	1999.04.01	蓋付線彫魚紋壺	宮城 須美子	150
37	1998.06.07	線彫魚紋抱瓶	宮城 須美子	151
129	2000.05.26	線彫魚紋抱瓶	宮城 須美子	152
90	1999.06.17	蓋付線彫魚紋鉢	宮城 須美子	153
84	1999.05.14	線彫海老・魚紋急須	宮城 須美子	154
187	2001.10.10	兎・蛙紋湯呑	宮陶房	155
115	1999.12.26	赤絵キビ紋大壺	那覇市伝統工芸館	156
113	1999.12.14	龍巻壺	那覇市伝統工芸館	157
210	2002.07.11	唐二彩抱瓶	那覇市伝統工芸館	158
94	1999.07.05	線彫魚紋大皿	仲村渠 致元	159
97	1999.07.18	緑黒釉筒描抱瓶	日本民藝館	160
42	1998.07.08	象嵌色差面取抱瓶	沖縄県立博物館	161
73	1999.02.23	色絵花鳥紋抱瓶	沖縄県立博物館	162
235	2003.04.30	象嵌花鳥紋抱瓶	沖縄県立博物館	163
62	1998.12.05	緑釉彫絵木目紋抱瓶	沖縄県立博物館	164
35	1998.05.26	チブル（頭部）シーサー	沖縄県立博物館	201
111	1999.11.18	屋根シーサー	沖縄県立博物館	204
114	1999.12.21	龍柱　首里城正殿前	沖縄県立博物館	244

作品番号	制作日	作　品　名	版画の元となった作品の作者や資料提供者など	掲載頁
60	1998.11.10	盛上シーサー抱瓶	量産品 酒造店	165
180	2001.08.05	魚・海藻紋大壺①	恩納村の RSP ホテル	166
183	2001.09.02	魚・海藻紋大壺②	恩納村の RSP ホテル	167
65	1999.01.14	シーサー 阿形 まじる商店	島 常賀	205
3	1997.10.29	シーサー 吽形 那覇市伝統工芸館	島 常賀	206
2	1997.10.25	シーサー 阿形 那覇市伝統工芸館	島 常賀	207
197	2002.03.05	面シーサー　阿形　黄土色系	島袋 秀栄	208
198	2002.03.10	面シーサー　阿形　赤色系	島袋 秀栄	209
170	2001.06.16	透彫梟の電気スタンド	相馬 正和	168
158	2001.03.26	守禮之門	首里城	246
108	1999.09.18	首里城の龍頭	首里城本殿の屋根	245
107	1999.09.12	盛上龍巻壺	高江洲 育男	169
159	2001.03.31	盛上雲龍紋カラカラ	高江洲 育男	170
160	2001.04.08	土灰釉掛龍巻花器	高江洲 育男	171
70	1999.02.10	シーサー　阿形　那覇市伝統工芸館	高江洲 育男	210
53	1998.09.12	シーサー　阿形　沖縄石油：平安座	高江洲 育男	211
71	1999.02.14	シーサー　阿形　神原中学校	高江洲 育男	212
54	1998.09.16	シーサー　阿形　仲里酒造：久米島	高江洲 育男	213
72	1999.02.18	シーサー　阿形　海洋博覧会	高江洲 育男	214
81	1999.04.17	シーサー　阿形	高江洲 育男	215
148	2000.11.02	灰掛手捻台付シーサー　阿形	高江洲 育男	216
140	2000.08.15	手捻緑釉シーサー　阿形	高江洲 育男	217
133	2000.06.19	チブル（頭部）シーサー	高江洲 育男	218
150	2000.11.15	壁掛シーサー　一対	高江洲 育男	219
123	2000.04.24	双耳付線彫唐草紋大花瓶	高江洲 忠	172
234	2003.04.26	盛上緑柚シーサー紋抱瓶	高江洲 盛良	173
89	1999.06.13	面シーサー　カレンダー 1999	高江洲 盛良	220
110	1999.11.13	シーサー　阿形　玉泉洞	高安 禧鶴	221
220	2002.10.19	シーサー　吽形	照屋 晴美	222
222	2002.11.07	シーサー　阿形	照屋 晴美	223
190	2001.11.10	でんでん虫・バッタ四角錘花瓶	照屋佳信	174
152	2000.12.15	唐草紋長四角花瓶	照屋佳信	175
146	2000.10.26	唐草紋皿	照屋佳信	176
177	2001.07.16	シーサー　阿形　南窯	壺屋「南窯」	224
126	2000.05.07	シーサー　阿形　東窯	壺屋古窯「東窯」	225

作品番号	制作日	作　品　名	版画の元となった作品の作者や資料提供者など	掲載頁
214	2002.07.31	指掻唐草紋大花瓶	上江洲 茂生	177
59	1998.11.02	線彫牡丹紋花瓶	上江洲 茂生	178
193	2002.01.09	蓋付菊花紋壺	上江洲 茂生	179
52	1998.09.03	象嵌菊花紋扁壺	上江洲 茂生	180
55	1998.09.19	線彫牡丹紋扁壺	上江洲 茂生	181
56	1998.09.24	刷毛目線彫牡丹紋扁壺	上江洲 茂生	182
43	1998.07.14	線彫牡丹紋抱瓶	上江洲 茂生	183
46	1998.07.31	面取牡丹紋抱瓶	上江洲 茂生	184
61	1998.11.21	線彫唐草紋面取抱瓶	上江洲 茂生	185
153	2000.12.20	透彫魚・波紋傘立	上江洲 茂生	186
117	2000.02.04	指掻唐草紋大花瓶	山田 真萬	187
109	1999.09.23	面シーサー	与古田 枝里	226
215	2002.08.05	イッチン唐草紋大花瓶	読谷村「北窯」	188
186	2001.09.25	線彫唐草紋大花瓶	読谷協同販売所	189
246	2003.08.07	「読谷山焼」　登窯　9 連房	読谷村座喜味	248
165	2001.05.15	読谷村座喜味の登窯　13 連房	読谷村「北窯」	249
249	2003.09.21	登窯の一室内　北窯（共同）	読谷村「北窯」	250
14	1998.02.07	ミンサーを織る技術者	赤嶺真澄	251
257	2004.05.02	琉球織の技術者	沖縄 ワールド	252
112	1999.12.03	紅型　芝居幕　守禮の邦	安里 和雄	227
116	2000.01.28	紅型　芝居幕　魚を運ぶ猟師	安里 和雄	228
145	2000.10.21	紅型　芝居幕　琉球舞踊	安里 和雄	229
167	2001.05.28	紅型　暖簾　シーサー　吽形	安里 和雄	230
168	2001.06.04	紅型　暖簾　シーサー　阿形	安里 和雄	231
181	2001.08.18	紅型　暖簾　野菜図鑑	安里 和雄	232
200	2002.04.16	紅型　蝶・蜻蛉田舎風景	安里 和雄	233
229	2003.01.26	紅型　藍染　壺屋焼	藤崎 真	234
142	2000.09.08	紅型　牡丹・魚網	日本の美術別巻	235
144	2000.10.01	紅型　梅	17・18 世紀作品	236
216	2002.09.07	紅型　暖簾　赤シーサー	那覇市伝統工芸館	237
138	2000.07.24	紅型　壁飾り　百合	那覇市伝統工芸館	238
227	2003.01.14	紅型　木の葉紋	那覇市伝統工芸館	239
251	2003.10.30	紅型　農村風景	那覇市伝統工芸館	240
256	2004.04.03	紅型　鶏頭寶船	那覇市伝統工芸館	241
208	2002.06.30	紅型　藍染　琉球	琉球舞踊衣装	242

作品番号	制作日	作　品　名	版画の元となった作品の作者や資料提供者など	掲載頁
149	2000.11.10	唐草紋暖簾	新垣陶器店	243
141	2000.08.27	琉球人形　名護市	フルーツランド	253
247	2003.08.26	アジア水牛　荷台車運搬用	竹富島観光	254
250	2003.09.29	カンムリワシ　特別天然記念物	石垣・西表島	255
224	2002.11.30	リュウキュウオオコノハズク	鳥類図鑑	256
236	2003.05.11	薬用ハブ酒	琉球の味と技展	257
243	2003.07.06	オキナワチョウトンボ	宮古新報	258
245	2003.07.27	オオゴマダラチョウ　西表島	蝶の飼育館	259
100	1999.08.02	糸芭蕉　大宜味村喜如嘉	芭蕉布会館	260
228	2003.01.20	ハイビスカス	島袋 俊哉	261
237	2003.05.27	月桃の花	赤嶺 真澄	262
244	2003.07.20	サキシマスオウ　西表島	仲間川の近辺	263

＜参考文献＞

図　書

『ふるさとの旅路』20 巻「奄美　沖縄　八重山」　世界出版社

『カラー　トラベルガイド　日本の旅』　17 巻「沖縄」　山田書院

『目の眼』　特集「沖縄のやきもの」　No.93　里文出版 1984 年 7 月

『日本の美術』　別巻「民芸」　平凡社

『日本の文化地理』17 巻「熊本・宮崎・鹿児島・沖縄」　講談社

『日本のやきもの』　読売新聞社 1974 年

『人間国宝　金城次郎のわざ』　琉球陶器の最高峰　朝日新聞社　1988 年

『人間国宝　金城次郎作品展』　日本橋　三越本店 1995 年

『沖縄文化財百科』　全 4 巻　那覇出版社　1 巻　「建造物・美術工芸」
2 巻　「芸術・民俗」
3 巻　「史跡・名勝」
4 巻　「天然記念物」

『沖縄工芸ふれあい広場　戦後工芸の歩み』　沖縄県商工労働部・観光文化局工芸産業部

『沖縄の陶器』復刻版　琉球電信電話公社

『ロマンの旅　日本の伝説』　18 巻　「沖縄」　世界文化社

『太陽』　特集 沖縄　No.87　平凡社 1970 年 9 月号

『手捻り 50 年壺屋に生きる　現代の名工 / 高江洲育男作品集』

『陶芸事典』　室伏哲郎編　日本美術出版

『トラベルメイト 13　ふるさとの伝統工芸を訪ねる旅』　近畿日本ツーリスト

『壺屋 10 年　金城次郎 雑器の美』　用美社

『土と炎 一筋　金城敏男 作品集』　近代美術

『ワイドカラー日本』　20 巻「沖縄」　世界文化社

『やちむん　壺屋焼』　心伝える　手のぬくもり　壺屋陶器事業共同組

『読谷やちむん展』　6 冊　読谷村教育委員会・読谷村立美術館　1997 ～ 2002 年

カレンダー

『盛良ワールド』　1999 年カレンダー　高江洲　盛良

新　聞

朝日新聞　大阪版　1997 年 12 月 22 日

宮古新報　2003 年　4 月 16 日

沖縄タイムス　1997 年 10 月 20 日

1997 年 12 月 12 日

＜著者紹介＞

白柳 栄一（しろやなぎ えいいち）

1942 年　大阪府堺市に生まれる

1961 年　大阪市立大学職員となり、３年後から図書館職員として 42 年間勤務

1970 年頃からリノリュウム版の年賀ハガキを彫りはじめ、その後木版画に専念する。

1996 年　高山市の版画の宿「西山荘木版画同好会」の会員になる

1997 年　「飛騨高山グリーン西山木版画同好会」の会員に引き継がれる

2002 年　定年退職

木版画絵葉書を出版

◇円空佛 和顔悦色施　その１，２　各８枚

◇富田人形（滋賀県無形民族文化財指定）８枚

和歌山県、滋賀県や円空佛シリーズを彫っているとき、
沖縄の陶器に魅せられて、それらを途中にしたまま、
６年半の間に何度も沖縄を訪問し、木版画にした。

沖縄に魅せられて　　白柳栄一 沖縄木版画集

2004 年 12 月 15 日発行

著　者 —— **白柳栄一**
発行者 —— **桐生敏明**
発行所 —— **株式会社 かんぽうサービス**
〒 550-0002
大阪市西区江戸堀 1 丁目 2 番 14 号
電話 (06)6443-761　　FAX (06)6445-2470
発売元 —— **株式会社 かんぽう**
〒 550-0002
大阪市西区江戸堀 1 丁目 2 番 14 号
電話 (06)6443-2171　　FAX (06)6443-2175

印刷／製本……株式会社 淀川工技社

© EIICHI SHIROYANAGI　2004 Printed in Japan
乱丁本・落丁本はお取替えいたします。

9784900277557

ISBN4-900277-55-X

C0071 ¥5000E

1920071050003

定価：5,250円（税込み）

株式会社かんぽう

官報：政府刊行物